

悉く其の衆三萬餘人を集め、偽りて高平川に敗し、因りて没奔干を襲ひ殺し、而して其の衆を并す。勃勃、自ら謂へらく、『夏后氏の苗裔なり』と。六月、自ら大夏天王・大單子と稱す。大赦し、龍升と改元す。百官を置き、其の兄右地代を以て丞相と爲し、代公に封じ、力侯提を大將軍と爲し、魏公に封じ、叱干阿利を御史大夫と爲し、梁公に封じ、弟阿利羅引を司隸校尉と爲し、若門を尙書令と爲し、叱以鞭を左僕射と爲し、乙斗を右僕射と爲す。賀狄干、久しく長安に在り、常に幽閉せらる。因りて經史を習讀し、舉止、儒者の如し。還るに及びて、魏主珪、其の言語衣服皆秦人に類するを見、慕うて之に效ふと以爲ひ、怒りて其の弟歸を并せて之を殺す。

秦王興、太子泓を以て尙書の事を録せしむ。

秋七月戊戌朔、日、之を食する有り。

汝南王遵之、事に坐して死す。遵之は、亮の五世の孫なり。

癸亥、燕王熙、其の後苻氏を徵平陵に葬る。喪車高大にして、北門を毀ちて出づ。熙、被髮徒跣し、歩して從ふこと二十餘里。甲子、大赦す。初め中衛將軍馮跋及び弟侍御郎素弗、皆、罪を熙に得。熙、之を殺さんと欲す。跋兄弟、山澤に亡命せり。熙、賦役繁數にして、民、命に堪へず。跋・素弗、其の從弟萬泥と與に謀りて曰はく、『吾が輩、還首、路無し。若かず、民の怨めるに因り、共に大

【一八】 高平川。今の甘肅省涇原道固原縣にあり。  
 【一九】 勃勃は、字は屈子、匈奴の右賢王去卑の後、劉元海の族、劉武の曾孫、劉衛辰の子なり。劉武は即ち劉虎なり。  
 【二〇】 汝南王亮は楚王璋の難に死す。  
 【二一】 還首。自ら歸りて罪を請ふなり。

事を擧げんには。以て公侯の業を建つ可し。事の捷たずして、死すとも未だ晩からざるなり』と。遂に相與に車に乗り、婦人をして御せしめ、潛に龍城に入り、北部司馬孫護の家に匿る。熙出でて葬を送るに及びて、跋等、左衛將軍張興及び苻進の餘黨と與に、亂を作す。跋素より慕容雲と善し。乃ち雲を推して主と爲す。雲、疾を以て辭す。跋曰はく、『河間・涇虐にして、人神共に怒る。此れ天亡ばすの時なり。公は高氏にして名家なり。何ぞ能く人の養子と爲りて、得難きの運を棄つるや』と。之を扶けて出づ。跋の弟乳陳等、衆を帥りて弘光門を攻め、鼓噪して進む。禁衛皆散走す。遂に宮に入りて甲を授け、門を閉ちて拒守す。中黃門趙洛生、走りて熙に告ぐ。熙曰はく、『鼠盜、何ぞ能く爲さん。朕當に還りて之を誅すべし』と。乃ち後の柩を南苑に置き、髮を收め甲を貫き、馳せ還りて難に赴く。夜、龍城に至り、北門を攻む。克たず。門外に宿す。乙丑、雲、天王の位に即く。大赦し、正始と改元す。熙退きて龍騰苑に入る。尙方の兵格頭、城を踰えて熙に從ひ、『營兵、心を同じうし順を效し、唯だ軍の至るを俟つ』と稱す。熙、之を聞き、驚き走りて出づ。左右、敢て迫るもの莫し。熙、溝下より潛に遁る。良久しうして、左右、其の還らざるを恠み、相與に之を尋ぬるに、唯だ衣冠を得るのみ。適く所を知らず。中領軍慕容拔、中常侍郭仲に謂つて曰はく、『大事、捷つに垂んとして、帝、故無く自ら驚く。深く恠む可きなり。然れども城内

【二】 人の養子と爲る。事、一百九卷隆安元年に見ゆ。  
 【三】 雲。字は子雨、祖父は高和。句麗の支庶なり。慕容寶、養うて以て子と爲す。



企遲す。必ず功を成すに至らん。稽留す可からず。吾當に先づ往きて城に趣くべし。卿は留まりて帝を待ち、帝を得ば速かに來れ。若し帝未だ還らずば、吾、意の如きを得、城中を安撫し、徐ろに迎ふるも未だ晚からず」と。乃ち分ちて壯士二千餘人を將ゐて、北城に登る。將士、熙至れりと謂ひ、皆、仗を投じ、降らんと請ふ。既にして熙久しく至らず、拔の兵、後繼無し。衆心疑懼し、復た城を下りて苑に赴き、遂に皆潰え去る。拔、城中の人に殺さる。丙寅、熙、微服して林中に匿れ、人の執ふる所と爲り、雲に送らる。雲數めて之を殺し、其の諸子を并す。雲、姓を高氏に復す。幽州の刺史上庸公懿、令支を以て魏に降る。魏、懿を以て平州の牧・昌黎王と爲す。懿は評の孫なり。

魏主珪、濡源より西し、參合陂に如き。乃ち平城に還る。秃髮儁檀、復た秦に貳あり、使を遣はして乞伏熾磐を邀ふ。熾磐、其の使を斬り、長安に送る。

南燕主超の母妻、猶ほ秦に在り。超、御史中丞封愷を遣はし、秦に使して以て之を請はしむ。秦王興曰はく、「昔、苻氏の敗るるや、太樂諸伎、悉く燕に入れり。燕、今、藩と稱し、伎を送り、或は吳口千人を送らば、請ふ所乃ち得可きなり」と。超、羣臣と與に之を議す。左僕射段暉曰はく、

【二四】 企遲。足をつまだてて待つ也。  
 【二五】 慕容熙、時に年二十三。垂より熙に至るまで四世、凡そ二十四年にして滅ぶ。  
 【二六】 前燕の亡びしは、慕容評の罪なり。  
 【二七】 太樂諸伎燕に入る。長安の陷るや、太樂諸伎、西燕に入る。西燕の亡ぶるや、慕容垂、收めて以て中山に歸る。中山の陷るや、相率ゐて鄴に奔る。是に由つて南燕これを得たり。

「陛下、嗣ぎて社稷を守る。宜しく私親の故を以て遂に尊號を降すべからず。且つ太樂は先代の遺音なり、與ふ可からざるなり。吳口を掠めて之に與ふるに如かず」と。尙書張華曰はく、「鄰國を侵掠せば、兵連なり禍結ばれん。此れ既に能く往かば、彼も亦能く來らん。國家の福に非ざるなり。陛下の慈親、人の掌握に在り、豈に虚名を斬惜して、之が爲めに降屈せざる可けんや。中書令韓範、嘗て秦王と俱に、苻氏の太子の舍人たりき。若し之をして往かしめば、必ず志の如きを得ん」と。超、之に従ふ。乃ち韓範をして秦に聘せしめ、藩と稱して奉表す。慕容凝、興に言つて曰はく、

【二八】 斬。容む也。  
 【二九】 七聖。燕主廆・皝・儁・暉・垂・德・超の七人。

「燕王、其の母妻を得ば、復た臣たる可からず。宜しく先づ伎を送らしむべし」と。興乃ち範に謂つて曰はく、「朕、燕王の家屬を歸さんこと必せり。然れども今、天時尙ほ熱し。當に秋涼を俟つべし」と。八月、秦、員外散騎常侍韋宗をして燕に聘せしむ。超、羣臣と與に、宗を見るの禮を議す。張華曰はく、「陛下、前に既に表を奉る。今宜しく北面して詔を受くべし」と。封還曰はく、「大燕は、七聖、光を重ぬ。奈何ぞ一旦にして豎子の爲めに節を屈せん」と。超曰はく、「吾、太后の爲めに屈せん。願はくは諸君、復た言ふ勿かれ」と。遂に北面して詔を受く。

毛修之、漢嘉の太守馮遷と與に、兵を合はせ、楊承祖を撃ちて之を斬る。修之、進みて譙縱を討たんと欲す。益州の刺史鮑陋、可かず。修之、上表して言はく、「人の生を重んずる所以は、實に生理



の保つ可き有ればなり。臣の情地、生塗已に竭く。命を朝露に借る所以は、天威に憑りて讎逆を誅夷せんことを庶へばなり。今、屢、乗ず可きの機有り。而るに陋、毎に期に違うて、赴かず。臣、死を寇庭に効すと雖も、而も救援の理絶ゆ。將に何を以てか濟はんとする」と。劉裕乃ち襄城の太守劉敬宣を表して、衆五千を帥ゐて蜀を伐たしめ、劉道規を以て征蜀都督と爲す。

魏主珪、豺山宮に如く。候官告ぐ、「司空庾岳、服飾鮮麗にして、行止風采、人君に擬則す」と。珪、岳を收へて之を殺す。

北燕王雲、馮跋を以て都督中外諸軍事・開府儀同三司・錄尚書事と爲し、馮萬泥を尚書令と爲し、馮素弗を昌黎の尹と爲し、馮弘を征東大將軍と爲し、孫護を尚書左僕射と爲し、張興を輔國大將軍と爲す。弘は跋の弟なり。

九月、譙縱、藩と秦に稱す。

秃髮儁檀、五萬餘人を將ゐて、沮渠蒙遜を伐つ。蒙遜、興に均石に戰ひ、大に之を破る。蒙遜進みて西郡の太守楊統を日勒に攻め、之を降す。

冬十月、秦の河州の刺史彭奚念叛き、秃髮儁檀に降る。秦、乞伏熾磐を以て、河州の刺史を行はしむ。

南燕主超、左僕射張華・給事中宗正元をして、太樂の伎一百二十人を秦に獻せしむ。秦王興、乃ち超の母妻を還し、其の資禮を厚くして之を遣る。超、親ら六宮を帥ゐて、馬耳關に迎ふ。

夏王勃勃、鮮卑の薛千等の三部を破り、其の衆を降すこと萬を以て數ふ。進みて秦の三城已北の諸戌を攻め、秦の將楊丕・姚石生等を斬る。諸將皆曰はく、「陛下、關中を經營せんと欲せば、宜しく先づ根本を固め、人心をして憑係する所有らしむべし。高平は山川險固、土田饒沃なり。以て都を定む可し」と。勃勃曰はく、「卿は其の一を知りて、未だ其の二を知らず。吾が大業は草創にして、士衆未だ多からず。姚興も亦一時の雄にして、諸將、命を用ふ。關中は未だ圖る可からざるなり。我、今専ら一城を固めば、彼必ず力を我に并せん。衆、其の敵に非ず、亡びんこと立ちて待つ可し。如かず、驍騎を以て風のごとく馳せ、其の不意に出で、前を救ふときは則ち後を撃ち、後を救ふときは則ち前を撃ち、彼をして奔命に疲れしめ、我は則ち游食自若たらんには。十年に及ばずして、嶺北・河東、盡く我が有と爲らん。興既に死して嗣子闇弱なるを待ち、徐ろに長安を取らんこと、吾が計中に在り」と。是に於て嶺北を侵掠す。嶺北の諸城、門、晝啓かず。興乃ち歎じて曰はく、「吾、黃兒の言を用ひず、以て此に至れり」と。勃勃、婚を秃髮儁檀に求む。儁檀許さず。十一月、勃勃、騎二萬を帥ゐて、儁檀を撃ち、支陽に至る。萬餘人を殺傷し、

【三〇】 馬耳關。今の山東省濟南道歷城縣にあり。  
【三一】 薛千。晉書載記には薛千に、異本には薛干に作る。  
【三二】 黃兒。興の弟邕の小子。  
【三三】 支陽。縣、今の甘肅省甘涼道平番縣に在り。



二萬七千餘口・牛馬羊數十萬を驅掠して還る。僞檀、衆を帥ゐて之を追ふ。焦朗曰はく、「勃勃、天姿雄健、軍を御すること嚴整にして、未だ輕んず可からざるなり。如かず、温園より北に渡り、萬斛堆に趣き、水を阻して營を結び、其の咽喉を扼せんには。百戰百勝の術なり」と。僞檀の將賀連怒りて曰はく、「勃勃は敗亡の餘、烏合の衆なり。奈何ぞ之を避け、之に示すに弱きを以てせん。宜しく急に之を追ふべし」と。僞檀、之に従ふ。勃勃、陽武の下峽に於て、凌を鑿り車を埋め、以て路を塞ぎ、兵を勒して僞檀を逆へ撃ち、大に之を破る。奔るを追ふこと八十餘里、殺傷萬計、名臣勇將、死する者什に六七。僞檀、數騎と與に、南山に犇る。幾ど追騎の得る所と爲らんとす。勃勃、戸を積みて之を封じ、號して鬪。體臺と曰ふ。勃勃、又、秦の將張佛生を、青石原に敗り、俘斬五千餘人。僞檀、外寇の逼るを懼れ、三百里内の民を徙し、皆、姑臧に入らしむ。國人駭き怨む。屠各成七兒、之に因りて亂を作す。一夕、衆を聚め、數千人に至る。殿中都尉張猛、衆に大言して曰はく、「主上の陽武の敗は、蓋し衆を恃みしが故なり。躬を責め過を悔いば、何ぞ明を損せん。而るに諸君、遽に此の小人に従ひ、不義の事を爲す。殿中の兵今至らん。禍、目前に在り」と。衆、之を聞き、皆散す。七兒、晏然に犇る。追うて之を斬る。軍諮祭酒梁袁・輔國司馬邊憲等、反を謀る。僞檀、皆、之を殺す。

- 【三六】温園。水の名、今の甘肅省蘭山道阜蘭縣にあり。
- 【三九】凌。氷なり。
- 【四〇】南山。枝陽の南山なり。
- 【四一】青石原。今の甘肅省涇原道涇川縣に在り。

魏主珪、平城に還る。

十二月戊子、武岡の文恭侯王謐・薨す。

是の歲、西涼公嵩、前表未だ報せられざるを以て、復た沙門法泉を遣はし、間行し、表を奉りて建康に詣らしむ。

四年、春正月甲辰、琅邪王德文を以て司徒を領せしむ。劉毅等、劉裕が入りて政を輔くるを欲せず、中領軍謝混を以て揚州の刺史と爲さんと議す。或るひと、裕をして丹徒に於て揚州を領せしめ、内事を以て孟昶に付せんと欲す。尙書右丞皮沈を遣はし、二議を以て裕に諮ふ。沈先づ裕の記室録事參軍劉穆之を見て、具に朝議を道ふ。穆之僞り起ちて厠に如き、密に裕に疏白して曰はく、「皮沈の言は、從ふ可からず」と。裕既に沈を見、且く外に出でしめ、穆之を呼びて之に問ふ。穆之曰はく、「晉朝、政を失ふこと日久しく、天命已に移る。公、皇祚を興復し、勳高く位重し。今日の形勢、豈に謙に居り、遂に藩を守るの將たるを得んや。劉猛の諸公、公と俱に布衣より起り、共に大義を立て、以て富貴を取る。事、先後有り、故に一時相推す。體を委して心服し、宿に臣主の分を定むと爲すに非ざるなり。力敵し執均しくば、終に相吞噬せん。揚州は根本の係る所、人に假す可からず。前者

- 【一】王謐薨じ、揚州の刺史、官を缺く、故に其の人を用ふるを議す。
- 【二】事、前卷元興三年に見ゆ。



以て王諡に授けしは、事、權道に出づ。今若し復た以て佗に授けば、便ち應に制を人に受くべし。一たび權柄を失はば、得可きに由無からん。將來の危難、熟念す可し。今、朝議、此の如し。宜しく相酌答し、必ず「我在り」と云ふべし。辭を措くこと又難し。唯だ應へて云へ、「神州の治本、宰輔の崇要にして、此の事既に大なり、懸に論す可きに非ず。便ち暫く入朝し、共に同異を盡さん」と。公、京邑に至らば、彼必ず敢て公を越えて更に餘人に授けざらんこと、明かなり」と。裕、之に従ふ。朝廷乃ち裕を徵し、侍中・車騎將軍・開府儀同三司・揚州の刺史・錄尚書事と爲す。徐兗二州の刺史たること故の如し。裕、表して兗州を解き、諸葛長民を以て青州の刺史と爲し、丹徒に鎮せしめ、劉道憐を并州の刺史と爲し、石頭に戍せしむ。

庚申、武陵の忠敬王遵・薨す。

魏主珪、豺山宮に如き、遂に甯川に至る。

南燕主超、其の母段氏を尊んで皇太后と爲し、妻呼延氏を皇后と爲す。超、南郊に祀る。獸有り、鼠の如くにして赤く、大さ馬の如し。來りて壇側に至る。須臾にして、大に風ふき晝晦く、羽儀帷幄皆毀裂す。超懼れ、以て太史令成公綏に問ふ。對へて曰はく、「陛下、奸佞を信用し、賢良を誅戮し、賦斂繁多に、事役殷重なるの致す所なり」と。超乃ち大赦し、公孫五樓等を黜く。俄にして復た之を用ふ。

北燕王雲、妻李氏を立てて皇后と爲し、子彭城を太子と爲す。

三月庚申、燕王熙及び苻后を微平陵に葬る。熙に諡して昭文皇帝と曰ふ。

高句麗、使を遣はし、北燕に聘し、且つ宗族を叙す。北燕王雲、侍御史李拔を遣はして之に報ゆ。

夏四月、尚書左僕射孔安國・卒す。甲午、吏部尚書孟昶を以て之に代らしむ。

北燕・大赦す。

五月、北燕、尚書令馮萬泥を以て幽冀二州の牧と爲し、肥如に鎮せしめ、中軍將軍馮乳陳を并州の牧と爲し、白狼に鎮せしめ、撫軍大將軍馮素弗を司隸校尉と爲し、司隸校尉務銀提を尚書令と爲す。

譙縱、使を遣はして藩と秦に稱し、又、盧循と潜に通ず。縱・上表して、桓謙を秦に請ひ、之と共に劉裕を撃たんと欲す。秦王興、以て謙に問ふ。

謙曰はく、「臣の累世、恩を荆楚に著す。若し巴蜀の資に因り・流に順つて東下するを得ば、士民必ず翕然として響應せん」と。興曰はく、「小水は巨魚を容れず。若し縱の才力、自ら・事を辨するに足らば、亦、君を假りて以て鱗翼と爲さじ。宜しく自ら多福を求むべし」と。遂に之を遣る。謙、成都に至り、懷を虚しうして士を引く。縱、之を疑ひ、龍格に置き、人をして之を守らしむ。謙、泣きて諸弟に謂つて曰はく、「姚主の言は神なり」と。

【六】宗族を叙す。雲はもと高句麗の支屬なり。詳なることは一九九卷隆安元年に見ゆ。

【七】龍格。成都の廣都縣龍瓜灘の地名。



秦王興、禿髮儁檀が外内多難なるを以て、因りて之を取らんと欲し、尙書郎韋宗をして往きて之を覘はしむ。儁檀、宗と興に當世の大略を論じ、縱横、窮り無し。宗退きて歎じて曰はく、「奇才英器は、必ずしも華夏ならず、明智敏識は、必ずしも讀書せず。吾乃ち今、九州の外、五經の表に復た自ら人有るを知れり」と。歸りて興に言つて曰はく、「涼州、弊せりと雖も、儁檀、權譎人に過ぐ。未だ圖る可からざるなり」と。興曰はく、「劉勃勃、烏合の衆を以てすら、猶ほ能く之を破れり。況や我、天下の兵を擧げて、以て之に加ふるをや」と。宗曰はく、「然らず。形移り執變じ、返覆萬端なり。人を陵ぐ者は敗り易く、戒懼する者は攻め難し。儁檀が勃勃に敗れし所以は、之を輕んじたればなり。今、我、大軍を以て之に臨まば、彼必ず懼れて、全きを求めん。臣、竊に羣臣の才略を觀るに、儁檀の比なる者無し。天威を以て之に臨むと雖も、亦、未だ敢て其の必勝を、保せざるなり」と。興聽かず。其の子中軍將軍廣平公弼、後軍將軍斂成、鎮遠將軍乞伏乾歸をして、步騎三萬を帥りて儁檀を襲はしめ、左僕射齊難をして騎二萬を帥りて勃勃を討たしむ。吏部尙書尹昭諫めて曰はく、「儁檀、其の險遠なるを恃む、故に敢て違慢す。若かず、沮渠蒙遜及び李嵩に詔して之を討たしめ、自ら相困斃せしめんには、必ずしも中國の兵を煩はざるなり」と。亦、聽かず。興、儁檀に書を送りて曰はく、「今、齊難を遣はして勃勃を討たしむ。其の西に逸せんことを

【八】 儁檀、外には陽武の敗あり、内には梁哀・邊憲の亂あり。  
 【九】 返覆。一本には返復に作る、從ふ可し。  
 【一〇】 保。保證する也。

恐る。故に弼等をして河西に於て之を邀へしむ」と。儁檀、以て然りと爲し、遂に備を設けず。弼、金城より濟る。姜紀、弼に言つて曰はく、「今、王師、勃勃を討つと聲言す。儁檀、猶豫し、守備未だ嚴ならず。願はくは輕騎五千を給せよ。其の城門を掩はば、則ち山澤の民、皆、吾が有と爲らん。孤城、援無く、坐して克つ可からん」と。弼從はず。進みて、漢口に至る。昌松の太守蘇霸、城を閉ちて之を拒ぐ。弼、人を遣はし之を諭して降らしめんとす。霸曰はく、「汝、信誓を棄てて與國を伐つ。吾、死する有るのみ。何の降ることか之れ有らん」と。弼進み攻め、之を斬り、長驅して姑臧に至る。儁檀、城に嬰りて固守し、奇兵を出して弼を撃ち、之を破る。弼退きて西苑に據る。城中の人王鍾等、内應を爲さんと謀る。事洩る。儁檀、首謀者を誅して其餘を赦さんと欲す。前軍將軍伊力延侯曰はく、「今、彊寇、外に在り、而して奸人、竊に内に發す。危きこと孰か焉よりも甚だしからん。悉く之を阮にせずんば、何を以てか後を懲さん」と。儁檀、之に従ひ、五千餘人を殺す。郡縣に命じて、悉く牛羊を野に散せしむ。斂成、兵を縱ちて鈔掠す。儁檀、鎮北大將軍俱延、鎮軍將軍敬歸等を遣はし、之を撃たしむ。秦の兵大に敗る。斬首七千餘級。姚弼、壘を固くして出でず。儁檀、之を攻む。未だ克たず。秋七月、興、衛大將軍常山公顯を遣はし、騎二萬を帥りて、諸軍の後繼と爲らしむ。高平に至る。弼敗れぬと聞き、道を倍して之に

【一】 金城より河を濟るなり。  
 【二】 漢口。縣の名、今の甘肅省甘涼道古浪縣。  
 【三】 儁檀、牛羊を散じて以て敵に餌す、而して斂成、これを掠む、宜なり、其の敗るるや。



赴く。顯、善く射る者孟欽等五人を遣はし、涼風門に挑戰す。竝未だ發するに及ばざるに、僞檀の材官將軍宋益等、迎へ撃ちて之を斬る。顯乃ち罪を斂成に委ね、使を遣はして僞檀に謝し、河外を慰撫し、兵を引ききて還る。僞檀、使者徐宿を遣はし、秦に詣りて罪を謝せしむ。夏王勃勃、秦の兵且に至らんとすと聞き、退きて、河曲に保す。齊難、勃勃既に遠しと以ひ、兵を縦ちて野に掠む。勃勃、師を潜めて之を襲ふ。俘斬七千餘人。難、兵を引ききて退き走る。勃勃追うて木城に至り、之を禽へ、其の將士萬三千人を虜にす。是に於て、嶺北の夷夏の勃勃に附く者、萬を以て數ふ。勃勃、皆、守宰を置き、以て之を撫す。

司馬叔璠、蕃城より鄒山に寇す。魯郡の太守徐邕、城を棄てて走る。車騎長史劉鍾、撃ちて之を却く。

北燕王雲、慕容歸を封じて遼東公と爲し、燕の祀を主とらしむ。

劉敬宣既に、峽に入り、巴東の太守溫祚を遣はし、二千人を以て外水に出でしめ、自ら益州の刺史鮑陋・輔國將軍文處茂・龍驤將軍時延祖を帥る、墊江由り、轉戦して前む。譙縱、救を秦に求む。秦王興、平西將軍姚弋・南梁州の刺史王敏を遣はし、兵二萬を將ゐて之に赴かしむ。敬宣の軍、黃虎に至る。成都を去ること五百里、縱・輔國將軍譙道福、衆を悉して嶮に拒ぐ。相持すること六十餘日。敬宣、進むを得ず。食盡き、軍中疾疫し、死する者大半なり。乃ち軍を引ききて還る。敬宣、坐し

- 【四】河曲。内蒙古オールドスの東北。
- 【五】峽。謂はゆる三峽なり。
- 【六】黃虎。今の四川省嘉陵道射洪縣に在り。

て官を免せられ、封三分の一を削らる。荊州の刺史劉道規、督統するを以て、號を建威將軍に降さる。九月、劉裕、敬宣が利を失へるを以て、位を遜らんと請ふ。詔して、降して中軍將軍と爲す。開府は故の如し。劉毅、重法を以て敬宣を繩さんと欲す。裕、之を保護す。何無忌、毅に謂つて曰はく、『奈何ぞ。私憾を以て至公を傷けん』と。毅乃ち止む。

乞伏熾磐、秦の政の浸く衰ふるを以て、且つ秦の攻襲せんことを畏れ、冬、十月、諸部二萬餘人を招結し、城を、嶧岷山に築きて之に據る。

十一月、禿髮儁檀、復た涼王と稱し、大赦し、嘉平と改元す。百官を置く。夫人折掘氏を立てて王后と爲し、世子武臺を太子と爲し、尙書の事を録せしめ、左長史趙龍、右長史郭倅を尙書左右僕射と爲し、昌松侯俱延を太尉と爲す。

南燕、汝水竭き、河凍りて皆合す、而るに、南燕主超、之を惡み、李宣に問ふ。對へて曰はく、『澠水、氷無きは、良に、逼りて京城を帯び、日月に近きに由るなり』と。超大に悦び、朝服一具を賜ふ。

十二月、乞伏熾磐、彭奚念を枹罕に攻む。奚念に敗られて還る。

- 【七】私憾。前の元年に見ゆ。
- 【八】嶧岷山。西羌に在り。今の甘肅省蘭山道皋蘭縣に在るべし。
- 【九】武臺。本名は虎臺。唐人、晉書を作り、唐祖の諱を避け、虎を改めて武と爲す。
- 【一〇】汝水は當に女水に作るべし。
- 【一一】澠水。今の山東省膠東道内にあり。



是の歳、魏主珪、高邑公莫題を殺す。初め〔三〕拓跋窟咄が珪を伐つや、題、珪の年少きを以て、潜に箭を以て窟咄に遺りて曰はく、『三歳の犢、豈に能く重載に勝へんや』と。珪、心に之を銜む。是に至りて、『題、居處倨傲にして、人主に擬則す』と告ぐる者或り。珪、人をして箭を以て題に示し、而して之に謂つて曰はしむ、『三歳の犢、果して如何』と。題父子、對して泣く。詰朝、收へて之を斬る。

〔三〕拓跋窟咄、珪を伐つ。一百六卷孝武の太元十一年に見ゆ。

卷の第一百一十五

晉紀三十七

安皇帝庚

〔一〕義熙五年、春正月庚寅朔、南燕主超、羣臣を朝會し、太樂の備はらざるを歎じ、晉人を掠して以て伎を補はんと議す。領軍將軍韓諱曰はく、『先帝、舊京傾覆せるを以て、三齊を戢翼せり。陛下、士を養ひ民を息め、以て魏の釁を伺ひ、先業を恢復せずして、更に南鄰を侵掠し、以て讐敵を廣めんとす。可ならんや』と。超曰はく、『我が計已に定まれり。卿と與に言はず』と。

辛卯、大赦す。

庚戌、劉毅を以て衛將軍・開府儀同三司と爲す。毅、才を愛し士を好む。

當世の名流、輻湊せざるは莫し。獨り揚州の主簿吳郡の張邵、往かず。或るひと之に問ふ。邵曰はく、

晉安皇帝義熙五年

〔一〕義熙五年。西紀四〇九年なり。

〔二〕三年、超、太樂伎を秦に獻ず、故に其の備はらざるを歎す。

〔三〕先帝云云。中山陷るや、慕容德、鄴を棄てて滑臺を保す。既にしてまた滑臺を失ひ、乃ち東して齊の地を取りてこれに據れり。事竝に前に見ゆ。



④『主公は命世の人傑なり。何ぞ多問を煩はさん』と。

秦王興、其の弟平北將軍冲・征虜將軍狄伯支等を遣はし、騎四萬を帥ひ、夏王勃勃を撃たしむ。冲、嶺北に至り、還りて長安を襲はんと謀る。伯支従はずして止む。因りて伯支を斃殺し、以て口を滅す。

秦王興、使を遣はし、譙縱を冊拜して、大都督・相國・蜀王と爲し、九錫を加へ、制を承けて封拜せしめ、悉く王者の儀の如くす。

二月、南燕の將慕容興宗・斛穀提・公孫歸等、騎を帥ひて、宿豫に寇し、之を抜き、大に掠して去る。男女二千五百を簡びて太樂に付して之を教ふ。

歸は五樓の兄なり。是の時、五樓、侍中尙書たり、左衛將軍を領し、専ら朝政を總ぶ。宗親、竝に顯要に居る。王公・内外、之を憚らざるは無し。

南燕主超、宿豫の功を論じ、斛穀提等を封じて、竝に郡縣公と爲す。桂林王鎮諫めて曰はく、『此の數人は、民を勤らし兵を頓らし、國の爲めに怨を結ぶ。何の功ありてか封する』と。超怒りて答へず。

尙書都令史王儼、五樓に諂事し、比歲、屢官を遷り、左丞に至る。國人、之が語を爲して曰はく、『侯を得んと欲せば、五樓に事へよ』と。超、又、公孫歸等を遣はして濟南に寇せしむ。男女千餘人を俘にして去る。彭城より以南、民皆堡聚して以て自ら固む。并州の刺史

劉道憐に詔して、淮陰に鎮し、以て之に備へしむ。

乞伏熾磐、入りて秦の太原公懿に上邽に見ゆ。彭奚念、虚に乗じて之を伐つ。熾磐、之を聞き、怒り、懿に告げずして歸り、奚念を撃ちて之を破り、遂に枹罕を圍む。乞伏乾歸、秦王興に從つて平涼に如く。熾磐、枹罕に克ち、人を遣はして乾歸に告げしむ。乾歸逃れて苑川に還る。馮翊の人劉厥、衆數千を聚め、萬年に據り、亂を作す。秦の太子泓、鎮軍將軍彭白狼を遣はし、東宮の禁兵を帥ひて之を討たしむ。厥を斬り、其餘黨を赦す。諸將、露布表言して、其の首級を

廣くせんと請ふ。(三)泓許さずして曰はく、『主上、吾に後事を委ぬ。(吾)式て寇逆を遏むる能はず。當に躬を責め罪を請ふべし。尙ほ敢て矜誕して自ら功と爲さんや』と。秦王興、平涼より朝

那に如く。(四)姚冲の謀を聞き、冲に死を賜ふ。

三月、劉裕、抗表して南燕を討たんとす。朝議、皆、以て不可と爲す。惟だ左僕射・孟昶、車騎司馬謝裕・參軍臧熹、以爲へらく、必ず克たんと。裕に、行かんことを勸む。裕、昶を以て中軍留府の事

晉安皇帝義熙五年

二〇一

- 【八】 彭奚念は枹罕に據る。
- 【九】 乾歸が秦に留めらるる、と、前卷三年に見ゆ。
- 【一〇】 秦王興、平涼に在り、故に厥、間に乘じて亂を作す。
- 【一一】 露布。軍中、捷を奏するの辭なり。辭を帛に書して漆竿の上に建つる也。
- 【一二】 其の首級を廣くす。實際に得たる首級の數を誇大して報告する也。
- 【一三】 胡三省曰はく、姚泓、文義に優遊す、儒者よりこれを觀れば、子の道を得たるに似たり。然れども撥亂の才に非ざるなりと。
- 【一四】 朝那。縣の名、故城は今の甘肅省涇原道平涼縣の西北に在り。
- 【一五】 姚冲の謀。還りて長安を襲はんと欲するをいふ。
- 【一六】 中軍將軍の留府の事を監するなり。

- 【四】 主公。劉裕、揚州を領す、故にこれを主公と稱す。
- 【五】 宿豫。縣の名、故城は今の江蘇省徐海道宿遷縣の東南に在り。
- 【六】 尙書都令史。尙書令史を總ぶる官。
- 【七】 比歲。毎年。



を監せしむ。謝裕は安の兄の孫なり。初め苻氏の敗るるや、王猛の孫鎮惡・來奔す。以て臨澧の令と爲す。鎮惡、騎乗は長ずるに非ず、關弓は甚だ弱けれども、謀略有り、果斷に善く、喜みて軍國の大事を論ず。或るひと、鎮惡を劉裕に薦む。裕與に語りて之を説ぶ。因りて留宿す。明旦、參佐に謂つて曰はく、「吾聞く、「將門に將有り」と。鎮惡は信に然り」と。即ち以て中軍參軍と爲す。

恆山崩る。

夏四月、乞伏乾歸、枹罕に如き、世子熾磐を留めて之を鎮せしめ、其の衆を收めて二萬を得、徙りて度堅山に都す。

雷、魏の天安殿の東序に震す。魏主珪、之を惡み、左校に命じて、衝車を以て東西の序を攻め、皆之を毀たしむ。初め珪、寒食散を服す。之を

久しうして藥發す。性、躁擾多く、忿怒すること常無し。是に至りて寢く劇し。又、災異數見はる。占者多く言ふ、「當に急變有りて肘腋に生ずべし」と。珪、憂懣して安んぜず、或は數日、食はず、或は旦に達るまで寐ねず、平生の成敗得失を追

計し、獨語して止まず。羣臣左右の皆信す可からざるを疑ひ、百官事を奏して前に至る毎に、其の舊惡を追計すれば、輒ち之を殺す。其餘、或は顔色變動し、或は鼻息調はず、或は步趨、節を失し、或は言辭差謬すれば、皆以爲へらく、惡を懷きて心に在り、發して外に形はると。往往手づから之を

擊殺す。死者は、皆天安殿の前に陳ぬ。朝廷、人自ら保んぜず、百官苟くも免れ、相督攝するもの莫く、盜賊公行し、里巷の間、人爲めに希少なり。珪も亦之を知りて曰はく、「朕、故に之を縱して、然らしむ。災年を過ぐるを待ち、更に當に之を清治すべきのみ」と。是の時、羣臣、罪を畏れ、多く敢て親近を求めず。唯だ著作郎崔浩、恭勤にして懈らず、或は終日歸らず。浩は、吏部尚書宏の子なり。宏未だ嘗て旨に忤はず、亦、諂諛せず。故に宏父子、獨り謹せられず。

夏王勃勃、騎二萬を率ゐて秦を攻め、平涼の雜胡七千餘戸を掠取し、進みて依力川に屯す。

己巳、劉裕、建康を發し、舟師を帥ゐ、淮より泗に入る。五月、下邳に至り、船艦輜重を留め、歩して進みて琅邪に至る。過ぐる所、皆、城を築き、兵を留めて之を守らしむ。或るひと裕に謂つて曰はく、「燕人若し

大峴の險を塞ぎ、或は壁を堅くし野を清めば、大軍深く入るとも、唯だ功なきのみならず、將に自ら歸る能はざらんとす。奈何」と。裕曰はく、「吾、之を慮ること熟せり。鮮卑は貪婪にして、遠計を知らず、進みては虜獲を利とし、退きては禾苗を惜む。我が孤軍遠く入り、持久する能はず、進みて臨胸に據り退きて廣固を守るに過ぎざらんと謂ひ、必ず險を守り野を清むる能はざらん。敢て諸君の爲めに之を保せん」と。南燕主超、晉の師有りと聞き、羣臣を引きて會議

- 【一七】 臨澧。今の湖南省武陵道安福縣。
- 【一八】 關弓。弓を彎く也。
- 【一九】 度堅山。乞伏の先司繁の居りし所なり。今の甘肅省蘭山道金縣に在り。
- 【二〇】 寒食散。晉人多く服する藥。

- 【二一】 平涼。故城は今の甘肅省涇原道靖遠縣の西北に在り。
- 【二二】 依力川。今の甘肅省涇原道固原縣に在り。
- 【二三】 大峴。今の山東省膠東道臨胸縣の東に在り。
- 【二四】 臨胸。今の山東省膠東道臨胸縣の地。



征虜將軍公孫五樓曰はく、『吳の兵は輕果なり。利、速かに戰ふに在り。鋒を争ふ可からず。宜しく大峴に據り、入るを得ざらしむべし。日を曠しくし時を延ばし、其の銳氣を沮み、然る後徐ろに精騎二千を簡び、海に循つて南し、其の糧道を絶ち、別に段暉に救して、兖州の衆を帥る。山に緣りて東下せしめ、腹背之を撃つは、此れ上策なり。各守宰に命じて、險に依り自ら固め、其の資儲を校するの外、餘は悉く焚蕩し、禾苗を芟除し、敵をして資する所無からしめば、彼は僞軍にして食無く、戰を求むるも得ず、旬月の間に、以て坐ながら制す可し。此れ中策なり。賊を縱して峴に入れ、城を出でて逆へ戰ふは、此れ下策なり』

と。超曰はく、『今歲、星、齊に居る。天道を以て之を推せば、戰はずして自ら克たん。客主、執、殊なり。人事を以て之を言へば、彼は遠く來りて疲弊す。勢、久しき能はじ。吾は五州の地に據り、富庶の民を擁し、鐵騎萬羣、麥禾、野に布く。奈何ぞ苗を芟り民を徙し、先づ自ら蹙弱せんや。縱して峴に入らしめ、精騎を以て之を蹂るに如かず。何ぞ克たざるを憂へん』と。輔國將軍廣寧王賀賴盧、苦諫すれども、從はず。退きて五樓に謂つて曰はく、『必ず此の若くせば、亡ぶること日無からん』と。太尉桂林王鎮曰はく、『陛下、必ず、騎兵の平地に利なる者を以てせば、宜しく峴を出でて逆へ戰ふべし。戰つて而も勝たずんば、猶ほ退きて守る可し。宜しく敵を縱して峴に入らしめ、

【二〇四】 山に緣り東下す。南燕は兖州の梁父に治す。梁父の山に緣りて東下するをいふ。  
 【二〇五】 僞軍。本國を離れたる軍。  
 【二〇六】 五州。并州、幽州、徐州、兖州、青州。

自ら險固を弃つべからざるなり』と。超從はず。鎮出で、韓諱に謂つて曰はく、『主上、既に逆へ戰つて敵を却くる能はず、又、民を徙して野を清むるを肯せず、敵を延きて腹に入れ、坐ながら攻圍を待つは、酷だ。劉璋に似たり。今年國滅びなば、吾必ず之に死せん。卿は中華の士、復た文身と爲らん』と。超、之を聞き、大に怒り、鎮を收へて獄に下す。乃ち莒、梁父の二戌を攝め、城隍を修め、士馬を簡び、以て之を待つ。劉裕、大峴を過ぐ。燕の兵出でず。裕、手を舉げて天を指し、喜び色に形はる。左右曰はく、『公、未だ敵を見ざるに先づ喜ぶは、何ぞや』と。裕曰はく、『兵已に險を過ぎ、士に必死の志有り。餘糧、畝に棲り、人に匱乏の憂無し。虜已に吾が掌中に入れり』と。六月己巳、裕、東莞に至る。超先づ公孫五樓、賀賴盧及び左將軍段暉等を遣はし、歩騎五萬を將ゐて、臨朐に屯せしむ。晉の兵が峴に入るを聞き、自ら歩騎四萬を將ゐ、往きて之に就き、五樓をして騎を帥る、進みて巨蔑水に據らしむ。前鋒孟龍符、與に戰うて之を破る。五樓退き走る。裕、車四千乘を以て左右の翼と爲し、軌を方べて徐ろに進み、燕の兵と臨朐の南に戰ふ。日、晨に向へども、勝負猶ほ未だ決せず。參軍胡藩、裕に言つて曰はく、『燕、兵を悉して出で戰ふ。臨朐の城中、留守必ず寡からん。願はくは奇兵を以

【二〇七】 劉璋。事、六十七卷漢の獻帝建安十八年に見ゆ。  
 【二〇八】 文身。古は東南の民、斷髮文身せり、故に鎮、然云ふ。  
 【二〇九】 攝。收むる也。  
 【二一〇】 大峴の險を過ぐるを得たるを謂ふ。  
 【二一一】 燕人が禾苗を芟除せざるを謂ふ。  
 【二一二】 巨蔑水。今の山東省膠東道臨朐縣の東を流れて海に入る河。  
 【二一三】 日晨に向ふ。日、中を過ぎて西に傾く也。



て、問道より其の城を取らん。此れ韓信が趙を破りし所以なり」と。裕、藩及び諮議參軍檀韶・建威將軍河内の向彌を遣はし、師を潛め、燕の兵の後にでて臨胸を攻めしめ、「輕兵、海道より至る」と聲言す。向彌、甲を擲して先登し、遂に之に克つ。超、大に驚き、單騎にて段暉に城南に就く。裕因りて兵を縦ちて奮撃す。燕の衆大に敗る。段暉等大將十餘人を斬る。超遁れて廣固に還る。其の玉璽・輦及び豹尾を獲たり。裕、勝に乗じ北ぐるを逐ひ、廣固に至る。丙子、其の大城に克つ。超、衆を收め、入りて小城に保す。裕、長圍を築きて之を守る。圍の高さ三丈、塹を穿つこと三重。降附を撫納し、賢俊を采拔す。華夷大に悦ぶ。是に於て、齊の地の糧儲に因り、悉く江淮の漕運を停む。超、尙書郎張綱を遣はし、師を秦に乞ふ。桂林王鎮を赦して以て錄尙書・都督中外諸軍事と爲し、引見して之に謝し、且つ計を問ふ。鎮曰はく、「百姓の心は、一人に係る。今、陛下、親しく六師を董し、奔敗して還る。羣臣、心を離し、士民、氣を喪ふ。聞く、秦人、自ら内患有りと。恐らくは兵を分ちて人を救ふに暇あらざらん。散卒の還る者、尙ほ數萬有り。宜しく悉く金帛を出して以て之に餌し、更に一戰を決すべし。若し天命、我を助けば、必ず能く敵を破らん。若し其れ然らずんば、死すとも亦美と爲す。門を開ちて盡くるを待つに比し、猶ほ愈らずや」と。司徒樂浪

【三五】韓信の事、九卷漢の高帝三年に見ゆ。  
 【三六】段暉云云。超、臨胸城中より出て、南して暉に就く。  
 【三七】豹尾。大駕の屬車八十一乘、三行と作す、尙書御史、これに乗る。最後の一乘に豹尾を懸く。  
 【三八】内患。秦、内に赫連の患有るを謂ふ。

王惠曰はく、「然らず。晋の兵、勝に乗じ、氣執百倍せり。我、敗軍の卒を以て之に當るは、亦難からずや。秦、勃勃と相持すと雖も、患と爲すに足らず。且つ我と與に中原に分據す。執、唇齒の如し。安んぞ來りて相救はざるを得ん。但だ、大臣を遣はさずんば、則ち重兵を得る能はざらん。尙書令韓範は、燕・秦に重んぜらる。宜しく遣はして師を乞ふべし」と。超、之に従ふ。秋七月、劉裕に北青冀二州の刺史を加ふ。南燕の尙書略陽の垣尊及び弟京兆の太守苗、城を踰えて來り降る。裕、以て行參軍と爲す。尊・苗は、皆、超が委任して以て腹心と爲せる所の者なり。或るひと、裕に謂つて曰はく、「張綱、巧思有り。若し綱を得て、攻具を爲らしめば、廣固は必ず拔く可からん」と。會、綱、長安より還る。太山の太守申宣、之を執へ、裕に送る。裕、綱を樓車に升せ、城を周りて呼ばしめて曰はく、「劉勃勃、大に秦の軍を破り、兵の相救ふ無し」と。城中、色を失はざるもの莫し。江南、兵を發し及び使者を遣はして廣固に至る毎に、裕輒ち潛に兵を遣はし、夜、之を迎へ、明日、旗を張り鼓を鳴らして至る。北方の民、兵を執り糧を負うて裕に歸する者、日に千を以て數ふ。城を圍むこと益、急なり。張華、封愷、皆、裕の獲る所と爲る。超、大峴以南の地を割きて藩臣と爲らんと請ふ。裕許さず。秦王興、使を遣はして裕に謂つて曰はく、「慕容氏、相與に鄰好す。今、晋、之を攻むるこ

【三九】韓範云云。事、前卷二年に見ゆ。  
 【四〇】北青冀。晉氏南渡の後、南青冀二州を淮南に立て、北青冀二州を齊の地に立つ。  
 【四一】垣氏の子孫、後、遂に南國の邊將と爲り、功名を著す。  
 【四二】樓車。望櫓ある車。



と急なり。秦已に鐵騎十萬を遣はして洛陽に屯す。晉の軍還らずんば、當に長驅して進むべし」と。  
 裕、秦の使者を呼び、謂つて曰はく、「汝が姚興に語れ。我、燕に克つの後、兵を息むること三年、當に關洛を取るべし。今、能く自ら送らば、便ち速かに來る可し」と。劉穆之、秦の使有りと聞き、馳せ入りて裕に見ゆ。而るに秦の使者已に去れり。裕、言ふ所を以て穆之に告ぐ。穆之、之を尤めて曰はく、「常日は、事、大小と無く、必ず預謀を賜はる。此れ宜しく善く詳かにすべし。云何ぞ遽爾として之に答ふる。此の語は、以て敵を威すに足らず、適、以て之を怒らすに足らん。若し廣固未だ下らざるに、羌寇奄至せば、何を以て之を待つかを審かにせず」と。裕、笑つて曰はく、「此れは是れ兵機なり。卿の解する所に非ず。故に相語らざるのみ。夫れ兵は神速を貴ぶ。彼若審し能く起き救はば、必ず我が知らんことを畏れん。寧んぞ先づ信命を遣はす容けんや。逆め此の言を設くるは、是れ自ら張大にするの辭なり。晉の師出でざること、日たること久し、羌、(晉か)齊を伐つを見、殆ど將に内に懼れ、自ら保つに暇あらざらんとす。何ぞ能く人を救はんや」と。  
 乞伏乾歸、復た秦王の位に即く。大赦し、更始と改元す。公卿以下、皆本位に復す。  
 慕容氏の・魏に在る者、百餘家、逃れ去らんと謀る。魏主珪、盡く之を殺す。  
 初め魏の太尉穆崇、衛王儀と興に甲を伏せ、魏主珪を弑せんと謀る。果さず。珪、崇・儀の功を惜

【四三】 本位に復す。乾歸、公卿將帥を降して僚佐偏裨と爲せり。事、一百十二卷隆安五年に見ゆ。

み、祕して問はず。珪が疾有り、多く大臣を殺すに及びて、儀自ら疑うて出亡す。追うて之を獲、八月、儀に死を賜ふ。

封融、劉裕に詣りて降る。

九月、劉裕に太尉を加ふ。裕、固辭す。

秦王興、自ら將として夏王勃勃を撃ち、貳城に至り、安遠將軍姚詳等を遣はし、分ちて租運を督せしむ。勃勃、虚に乗じて奄至す。興懼れ、輕騎にして詳等に就かんと欲す。右僕射韋華曰はく、「若し變興一たび動かば、衆心駭き懼れ、必ず戰はずして自ら潰えん。詳の營にも亦未だ必ずしも至る可からざらん」と。興、勃勃と戰ふ。秦の兵大に敗れ、將軍姚榆生、勃勃の禽ふる所と爲る。左將軍姚文崇等、力戰す。勃勃乃ち退く。興、長安に還る。勃勃復た秦の救奇堡・黃石固・我羅城を攻め、皆之を拔き、七千餘家を大城に徙し、其の丞相右地代を以て幽州の牧を領し、以て之を鎮せしむ。初め興、衛將軍姚弋仲を遣はし、步騎一萬を帥る、韓範に隨ひ、往きて姚紹に洛陽に就き、兵を并せて以て南燕を救はしむ。勃勃に敗らるるに及びて、強の兵を追うて長安に還らしむ。韓範・歎じて曰はく、「天、燕を滅ぼす」と。南燕の尙書張俊、長安より還り、劉裕に降り、因つて裕に説きて曰はく、「燕人

【四四】 封融、魏に奔ること前卷二年に見ゆ。魏、慕容氏を殺す、故に融、裕に歸す。  
 【四五】 貳城、貳縣城なり。杏城の西北、平涼の東南に在り。今の甘肅省涇原道寧縣にあり。  
 【四六】 救奇堡・黃石固・我羅城。共に今の甘肅省涇原道平涼縣にあり。



の恃む所の者は、韓、範必ず能く秦の師を致さんと謂へばなり。今、範を得て以て之に示さば、燕必ず降らん」と。裕乃ち範を表して散騎常侍と爲し、且つ書を以て之を招く。長水校尉王蒲、範に秦に犇るを勸む。範曰はく、「劉裕、布衣より起り、桓玄を滅ぼし、晋室を復せり。今、師を興して燕を伐ち、向ふ所崩潰せり。此れ殆ど天授にして人力に非ざるなり。燕亡びなば則ち秦之が次と爲らん。吾以て再び辱む可からず」と。遂に裕に降る。裕、範を將ゐて城を循る。城中、人情離沮す。或るひと、燕主超に、範の家を誅するを勸む。超、範の弟諱が忠を盡して貳無きを以て、範の家を并せて之を赦す。冬十月、段宏、魏より裕に奔る。張綱、裕の爲めに攻具を造り、諸の奇巧を盡す。超怒り、其の母を城上に懸け、之を支解す。

【四七】 魏より裕に奔る。段宏が魏に奔ること、前卷三年に見ゆ。

【四八】 王姬。周は姬姓なり、故に王女を王姬と謂へり。後世、因りて王女を稱す。

西秦王乾歸、夫人邊氏を立てて皇后と爲し、世子熾磐を太子と爲す。仍て熾磐に命じて、中外の諸軍を都督し、尙書の事を録せしめ、屋引破光を以て河州の刺史と爲し、枹罕に鎮せしめ、安南の焦遺を以て太子の太師と爲し、與に軍國の大謀に參せしむ。乾歸曰はく、「焦生は特に名儒なるのみに非ず、乃ち王佐の才なり」と。熾磐に謂つて曰はく、「汝、之に事ふること、當に吾に事ふる如くなるべし」と。熾磐、遺を牀下に拜す。遺の子華、至孝なり。乾歸、女を以て之に妻せんと欲す。辭して曰はく、「凡そ妻を娶るは、之と共に二親に事へんと欲すればなり。今、王姬の貴きを以て、下りて

蓬茅の士に嫁するは、誠に其の匹に非ず。臣、其の中饋を闕かんことを懼る。願ふ所に非ざるなり」と。乾歸、曰はく、「卿の行ふ所は、古人の事なり。孤の女、以て卿に強ふるに足らず」と。乃ち以て尙書民部郎と爲す。

北燕王雲、自ら、功德無くして大位に居るを以て、内、危懼を懷き、常に壯士を畜養し、以て腹心爪牙と爲す。寵臣離班・桃仁、専ら禁衛を典る。賞賜、巨萬を以て計ふ。衣食起居、皆、之と同じうす。而るに班・仁、志願、厭く無く、猶ほ怨憾有り。戊辰、雲、東堂に臨む。班・仁、劍を懷にし、帟を執りて入り、啓する所有りと稱す。班、劍を抽きて雲を撃つ。雲、几を以て之を扞ぐ。仁、旁より雲を撃ち、之を弑す。馮跋、洪光門に升り、以て變を観る。帳下督張泰・李桑、跋に言つて曰はく、「此の豎、執何の至る所ぞ。請ふ公の爲めに之を斬らん」と。乃ち劍を奮つて下る。桑、班を西門に斬り、泰、仁を庭中に殺す。衆、跋を推して主と爲す。跋、以て其の弟范陽公素弗に讓る。素弗、可かず。跋、乃ち天王の位に昌黎に即く。大赦す。詔して曰はく、「陳氏、姜に代りて、齊國を改めざりき。宜しく即ち國號を燕と曰ふべし」と。太平と改元す。雲に諡して惠懿皇帝と曰ふ。跋、母張氏を尊びて太后と爲し、妻孫氏を立てて王后と爲し、

【四九】 中饋。室中に在りて饋食を司ること。婦人の職分をいふ。  
 【五〇】 帟。紙に同じ。  
 【五一】 跋、字は文起、長樂信都の人、其先は畢萬の後なり。  
 【五二】 陳氏云云。周の呂望、始めて齊に封ぜらる、姜姓なり。戰國の時、齊の太公田和、陳敬仲の後にして、姜氏の後を篡ひて其國を取り、仍ほ號して齊と曰ふ。



子永を太子と爲す。范陽公素非を以て、車騎大將軍・錄尚書事と爲し、孫護を尚書令と爲し、張興を左僕射と爲し、汲郡公弘を右僕射と爲し、廣川公萬泥を幽平二州の牧と爲し、上谷公乳陳を并青二州の牧と爲す。素非、少きとき豪俠放蕩なり。嘗て婚を尙書左丞韓業に請ふ。業、之を拒む。宰相と爲るに及びて、業を待つこと尤も厚し。好みて舊門を申拔し、謙恭儉約にして、身を以て下を帥ゐる。百僚、之を憚る。論者、其の宰相の度有るを美む。

魏主珪、將に齊王嗣を立てて太子と爲さんとす。魏の故事、凡そ嗣子を立つるには、輒ち先づ其の母を殺す。乃ち嗣の母劉貴人に死を賜ふ。珪、嗣を召し、之に諭して曰はく、『漢の武帝、鉤弋夫人を殺せるは、以て母后が政に豫り・外家が亂を爲すを防がんとなり。汝當に統を繼ぐべし。吾故に遠く古人に迹ひ、國家の長久の計を爲すのみ』と。嗣、性孝にして、哀泣して自ら勝へず。珪、之を怒る。嗣、舍に還り、日夜號泣す。珪、知りて復た之を召す。左右曰はく、『上怒ること甚し、入らば將に測られざらんとす。如かず、且く之を避け、上の怒解くるを俟ちて入らんには』と。嗣乃ち逃げて外に匿る。惟だ帳下の代人、車路頭・京兆の王洛兒、二人、之に隨ふ。初め珪、賀蘭部に如き、獻明賀太后の妹の美なるを見、賀太后に言つて、之を納れんことを請ふ。賀太后曰はく、『不可なり。是れ過美なり、必ず不善有らん。且つ已に夫有り。奪ふ可からざるなり』と。珪、密に人をして其の夫を殺さしめ、而して之を納る。清河王紹を生む。紹、兇狠無賴にして、好みて輕しく里巷に遊び、行人を劫剝し、以て樂と爲す。珪、之を怒り、嘗て井中に倒懸し、死に垂なんとして、乃ち之を出す。齊王嗣、屢、之を誨責す。紹、是に由りて嗣と協はず。戊辰、珪、賀夫人を誹責し、囚へて將に之を殺さんとす。會、日暮れ、未だ決せず。夫人密に、紹に告げしめて曰はく、『汝、何を以てか我を救はん』と。左右、珪が殘忍なるを以て、人人危懼す。紹、年十六、夜、帳下及び宦者宮人數人と與に、謀を通じ、垣を踰えて宮に入り、天安殿に至る。左右呼んで曰はく、『賊至れり』と。珪、驚き起き、弓刀を求むれども獲ず。遂に之を弑す。己巳、宮門、日中に至れども開かず。紹、詔と稱し、百官を端門前に集め、北面して立たしむ。紹、門扉の間より、百官に謂つて曰はく、『我、叔父有り、亦兄有り。公卿、誰に從はんと欲するか』と。衆、愕然として色を失ひ、對ふる者有る莫し。良久しうして南平公長孫嵩曰はく、『王に從はん』と。衆乃ち宮車晏駕せるを知る。而れども其の故を測らず。敢て聲を出すもの莫し。唯だ陰平公烈、大に哭して去る。烈は儀の弟なり。是に於て朝野恟恟として、人、異志を懷く。肥如侯賀護、烽を安陽の城北に擧ぐ。賀蘭部の人、皆之に赴く。其餘の諸部も、亦、各屯聚す。紹、人情の安からざるを聞き、大に布帛を出し、王公

【五三】漢の武帝云云。事、二十卷漢の武帝の後元元年に見ゆ。  
【五四】車氏は車焜氏なり、拓跋氏の疏屬なり、後魏の孝文帝に至りて、改めて車氏と爲す。

晉安皇帝義熙五年

【五二】珪、時に年三十九。明元帝永興二年、諡を上りて宣武皇帝と曰ひ、廟を烈祖と號す。  
【五】端門。宮門の正南門をいふ。  
【五七】魏の燕に克つや、儀、功有り、是年八月、死を賜はる。  
【五八】安陽城。今の直隸省河北道蔚縣の東北。



以下に賜ふ。崔宏獨り受けず。齊王嗣、變を聞き、乃ち外より還る。晝は山中に伏匿し、夜は王洛兒の家に宿す。洛兒の鄰人李道、潜に嗣に奉給す。民間、頗る之を知り、喜んで相告ぐ。紹、之を聞き、道を收へて之を斬る。紹、人を募り、嗣を求訪し、之を殺さんと欲す。獵郎叔孫俊、宗室の疏屬拓跋、磨渾と與に、自ら云ふ、『嗣の在る所を知る』と。紹、帳下二人をして、之と偕に往かしむ。俊、磨渾、出づるを得、即ち帳下を執へて、嗣に詣り、之を斬る。俊は建の子なり。王洛兒、嗣の爲めに平城に往來し、大臣に通問す。夜、安遠將軍安同等に告ぐ。衆、之を聞き、翕然として響應し、爭ひ出でて奉迎す。嗣、城西に至る。衛士、紹を執へて之を送る。嗣、紹及び其の母賀氏を殺し、并せて紹の帳下及び宦官宮人の内應を爲せる者十餘人を誅す。其の先に乘輿を犯せる者は、羣臣、之を櫛食す。壬申、(六二) 嗣、皇帝の位に即く。大赦し、永興と改元す。劉貴人を追尊して宣穆皇后と曰ふ。公卿の、先に罷めて第に歸り、朝政に預らざる者は、悉く之を召し用ふ。長孫嵩に詔して、北新侯安同・山陽侯 奚斤・白馬侯崔宏・元城侯拓跋屈等八人と與に、(六三) 止車門の右に坐し、共に朝政を聽かしむ。時人、之を八公と謂ふ。屈は磨渾の父なり。嗣、尙書 燕鳳が什翼健に速び事へた

【五九】 獵郎。拓跋氏、代北に起り、俗、獵を尙ぶ。故に獵郎を置く。  
 【六〇】 磨渾。元城侯屈の子。  
 【六一】 嗣。字は木末、道武皇帝の長子。  
 【六二】 奚。後魏の孝文、獻帝の第三兄の後を以て達奚氏と爲す、尋いで又改めて奚氏と爲す。

【六三】 止車門。臣子、宮門に至り、皆車より下りて入る、故にこれを止車門といふ。  
 【六四】 燕鳳。什翼健、代王と爲り、鳳を以て左長史と爲す。

るを以て、(六五) 都坐大官封懿等と與に入りては講論に侍し。出でては政事を議せしむ。王洛兒、車路頭を以て、散騎常侍と爲し、叔孫俊を衛將軍と爲し、拓跋磨渾を尙書と爲し、皆、爵郡縣公を賜ふ。嗣、舊臣に問ふ、『先帝に親信せられたる者は、誰とか爲す』と。王洛兒、(六六) 李先と言ふ。嗣、召して先に問ふ、『卿、何の才何の功を以て、先帝に知られたる』と。對へて曰はく、『臣、不才にして功無し。但だ忠直を以て、先帝に知られたるのみ』と。詔して、先を以て安東將軍と爲し、常に内に宿せしめ、以て顧問に備ふ。朱提王悦は、(六七) 虔の子なり。罪有りて自ら疑懼す。閏十一月丁亥、悦、匕首を懷にして入りて侍し、將に亂を作さんとす。叔孫俊、其の舉止に異有るを覺り、手を引きて之を掣し、懷中を索め、匕首を得たり。遂に之を殺す。  
 十二月乙巳、太白、(六八) 虛危を犯す。南燕の靈臺の令張光、南燕主超に、出で降らんことを勸む。超、手づから之を殺す。  
 柔然、魏を侵す。

【六五】 都坐大官。魏、尙書都省を謂つて尙書都坐と爲す。都坐大官は蓋し尙書の長官なるべし。  
 【六六】 李先。慕容永の謀主なり。永滅びて、中山に徙る。魏、燕を伐つ、李先、魏に歸す。道武、これを親信す。  
 【六七】 虔。拓跋虔、一百八卷孝武太元二十一年に見ゆ。  
 【六八】 虛危。二十八宿中の二。天門。廣固の内城の南門。廣固は今の山東省膠東道益都縣の西に在り。

六年、春正月甲寅朔、南燕主超、(二) 天門に登り、羣臣を城上に朝せしむ。乙卯、超、寵姬魏夫人



と與に城に登り、晉の兵の盛なるを見、手を握りて對して泣く。韓諱諫めて曰はく、「陛下、堙厄の運に遭ふ。正に當に努力して自ら強め、以て士民の志を壯にすべし。而るに更に兒女子の泣を爲すか」と。超、目を拭うて之を謝す。尙書令董誥、超に降らんことを勸む。超、怒りて之を囚ふ。

魏の長孫嵩、兵を將ゐて柔然を伐つ。

魏主嗣、郡縣の豪右多く民の患と爲るを以て、悉く優詔を以て之を徵す。民、士を戀ひ、内に徙るを樂まず。長吏逼りて之を遣る。是に於て無賴の少年、逃亡して相聚り、所在、寇盜羣起す。嗣、八

公を引きて之を議して曰はく、「朕、民の爲めに蠹を除かんと欲す。而るに

守宰、綏撫する能はず、之をして紛亂せしむ。今、犯す者既に衆く、盡く

誅す可からず。吾、大赦して以て之を安んせんと欲す。何如」と。元城侯

屈曰はく、「民逃亡して盜を爲すに、罪せずして之を赦すは、是れ上たる者、

反つて下に求むるなり。其の首惡を誅し、其餘黨を赦すに如かず」と。崔宏曰はく、「聖王の民を御

するは、務、之を安んずるに在るのみ、之と勝負を較せざるなり。夫れ赦は、正に非ずと雖も、以て

權を行ふ可し。屈は、先に誅し後に赦さんと欲す。要す。兩つながら去る能はずと爲さば、曷ぞ一赦

して遂に定まるに若かんや。赦して而も從はずば、誅するも未だ晚からざるなり」と。嗣、之に従ふ。

二月癸未朔、將軍于栗磾を遣はし、騎一萬を將ゐて、命に従はざる者を討たしむ。向ふ所皆平ぐ。

南燕の賀賴盧・公孫五樓、地道を爲り、出でて晉の兵を撃てども、却くる能はず。城久く閉ぢ、城中

の男女、脚弱を病む者太半、出で降る者相繼ぐ。超、輦して城に登る。尙書悅壽、超に説きて曰はく、

「今、天、寇を助けて虐を爲し、戰士凋瘵し、獨り窮城を守り、外援に絶望せり。天時人事、亦、知

る可きなり。苟くも歴數、終有れば、堯舜も位を避く。陛下、豈に變通の

計を思はざる可けんや」と。超、歎じて曰はく、「廢興は命なり。吾寧ろ劍

を奮つて死すとも、壁を啣みて生くる能はじ」と。丁亥、劉裕、衆を悉し

て城を攻む。或るひと曰はく、「今日は、往亡なり。師を行るに利あらず」

と。裕曰はく、「我往きて彼亡ぶ。何爲れぞ利あらざらん」と。四面より急

に之を攻む。悅壽、門を開き、晉の師を納る。超、左右數十騎と與に、城

を踰え、圍を突き出て走る。追うて之を獲たり。裕、數むるに降らざる

の罪を以てす。超、神色自若として、一に言ふ所無し。惟だ母を以て、劉

敬宣に託するのみ。裕、廣固が久く下らざりしを忿り、盡く之を阮にし。妻女を以て將士を賞せんと

欲す。韓範諫めて曰はく、「晉室南遷し、中原鼎沸し、士民、援無く、強ければ則ち之に附く。既に君

臣と爲れば、必ず須く之が爲めに力を盡すべし。彼は皆衣冠の舊族、先帝の遺民なり。今、王師、

弔伐し、而して盡く之を阮にせば、安所にか歸せしめんや。竊に恐らくは西北の人、復た來蘇の望

- 【四】 壁を啣みて生く。敵に降服して生存するをいふ。
- 【五】 往亡。曆書に、二月驚蟄の後十四日を以て、往亡日と爲す。
- 【六】 劉敬宣、先に嘗て燕に奔る、故に超、母を以てこれに託す。
- 【七】 弔伐。民を弔ひ罪を伐つ也。



み無からんことを」と、裕、容を改めて之を謝す。然れども猶ほ王公以下三千人を斬り、家口萬餘を没入し、其の城隍を夷ぐ。超を送りて建康に詣り、之を斬る。

臣光曰はく、「晉、江を濟りてより以來、威靈競はず、戎狄横驚し、中原を虎噬す。劉裕、始めて王師を以て東夏を翦平す。此の際に於て、賢俊を旌禮し、疲民を慰撫し、愷悌の風を宣べ、殘穢の政を滌ぎ、羣士をして風に嚮ひ、遺黎をして踵を企てしめず、而して更に恣に屠戮を行ひ、以て忿心を快くせり。其の施設を迹ぬるに、曾ち苻姚にも之れ如かず。宜なり其の四海を蕩壹し、美大の業を成す能はざりしこと。豈に智勇有りと雖も而も仁義無きの之をして然らしめたるに非ずや。」

初め徐道覆、劉裕が北伐するを聞き、盧循に虚に乗じて建康を襲はんことを勸む。循従はず。道覆、自ら番禺に至り、循を説きて曰はく、「本、嶺外に住まるは、豈に理此に極まるを以て、之を子孫に傳へんとするならんや。正に劉裕が與に敵と爲し難きを以ての故なり。今、裕、兵を堅城の下に頼め、未だ還期有らず。我、此の歸るを思ふの死士を以て、何劉の徒を掩撃せんこと、掌を反すが如くならんのみ。此の機に乗せずして、苟くも一日の安きを求む。朝廷、常に君を以て腹心の

【八】 降安二年、慕容徳、國を建て南燕と號す。二主十三年にして亡ぶ。

【九】 横驚。ほしのままにかけまはる。

【一〇】 嶺外。交廣の地は五嶺の外に在り。

【一一】 此の歸るを思ふの死士。孫泰の徒黨は、もと、三吳の人。孫恩の掠むる所の者、又、三吳の人なり。久しく海中に在り。故に皆、郷土に歸らんと思ふ。

【一二】 何劉。何無忌、劉毅。

疾と爲す。若し裕、齊を平ぐるの後、甲を息むること歳餘、璽書を以て君を徵し、裕自ら將として豫章に屯し、諸將を遣はし、銳師を帥ゐて嶺を過ぎしめば、復た將軍の神武を以てすと雖も、恐らくは必ず當る能はざらん。今日の機、萬、失ふ可からず。若し先づ建康に克ち、其の根帯を傾けば、裕、南に還ると雖も、能く爲す無からん。君若し同せずんば、便ち當に始興の衆を帥ゐて、直ちに尋陽を指すべし」と。循、甚だ此の舉を樂まざれども、而も以て其の計を奪ふ無し。乃ち之に従ふ。初め道覆、人をして船材を南康山に伐らしめ、始興に至りて之を賤賣す。居人、争うて之を市ふ。船材大に積もる。而るに人疑はず。是に至りて、悉く取りて以て艦を裝ふ。旬日にして辨ず。循、始興より長沙に寇し、道覆、南康に寇す。廬陵・豫章の諸の守相、皆、任を委てて奔走す。道覆、流に順つて下る。舟械甚だ盛なり。時に、燕に克つの問、未だ至らず。朝廷、急に劉裕を徵す。裕、方に、留まりて下邳に鎮し、司雍を経營せんことを議す。會、詔書を得、乃ち韓範を以て都督八郡軍事・燕郡の太守と爲し、封融を勃海の太守と爲し、檀韶を琅邪の太守と爲し、戊申、兵を引きて還る。韶は祗の兄なり。之を久しうして、劉穆之、範・融、

【一三】 始興の衆。元興三年、循、道覆をして始興を攻め陥れしめ、因りてこれを守らしむ。

【一四】 南康山。今の江西省贛南道にある山なり。

【一五】 始興。南康より、西、始興に至るまで四百里。

【一六】 流に順ふ。贛石の流に順ふなり。

【一七】 問。聞なり。報道。

【一八】 青州は、舊、齊・濟南・樂安・城陽・東萊・長廣・平昌・高密の八郡を督す。所謂燕郡とは、蓋し南燕、廣固に於て燕都の尹を置きたるを、今改めて燕郡の太守と爲すなり。

【一九】 範融。二人は燕の舊臣なり。穆之、其の變を爲さんことを恐る。故にこれを殺す。



反を謀ると稱し、皆、之を殺す。

安成の忠肅公何無忌、尋陽より兵を引きて盧循を拒ぐ。長史鄧潛之諫めて曰はく、『國家の安危、此の一舉に在り。聞く、循の兵艦大に盛なりと。』教、上流に居る。宜しく南塘を決し、二城を守り、以て之を待つべし。彼、必ず、敢て我を捨てて遠く下らじ。力を蓄へ鋭を養ひ、其の疲老を俟ち、然る後之を撃たん。此れ萬全の策なり。今、成敗を一戦に決し、萬一、利を失はば、悔ゆとも將に及ぶ無からんとす』と。參軍殷闡曰はく、『循が將ゐる所の衆は、皆、三吳の舊賊、百戦の餘勇なり。』始興の溪子は、拳捷にして善く鬪ふ。未だ輕んじ易からざるなり。將軍、宜しく留まりて豫章に屯し、兵を屬城に徵すべし。兵至りて合戦すとも、未だ晩しと爲さざるなり。若し此の衆を以て輕しく進まば、殆ど必ず悔有らん』と。無忌聽かず。三月壬申、徐道覆と豫章に遇ふ。賊、彊弩數百をして、西岸の小山に登り、之を邀射せしむ。會、西風暴に急なり。無忌の乗る所の小艦を飄はして東岸に向ふ。賊、風に乗じ、大艦を以て之に逼る。衆遂に奔潰す。無忌、聲を厲まして曰はく、『我が蘇武の節を取り來れ』と。節至る。執りて以て戰を督す。賊衆雲集す。無忌、辭色、撓む無く、節を握りて死す。是に於て、中外震駭す。朝議、乘輿を奉じて北走し、劉裕に就かんと欲す。既にして賊の未だ至らざるを知り、乃ち止む。

- 【一】 南塘。今の江西省潯陽道にある贛江の堤。
- 【二】 始興の溪子。徐道覆が統ぶる所の始興の兵を謂ふ。
- 【三】 拳捷。拳は力強き也、捷は敏捷なり。

西秦王乾歸、秦の金城郡を攻め、之を拔く。

夏王勃勃、尙書胡金纂を遣はして平涼を攻む。秦王興、平涼を救ひ、金纂を撃ち、之を殺す。勃勃、又、兄の子左將軍羅提を遣はし、攻めて定陽を拔き、將士四千餘人を阮にす。秦の將曹熾・曹雲・王肆佛等、各數千戸を將ゐて内に徙る。興、之を湟山及び陳倉に處く。勃勃、隴右に寇し、白崖堡を破り、遂に清水に趣く。略陽の太守姚壽都、城を棄てて走る。勃勃、其の民萬六千戸を大城に徙す。興、安定より之を追ひ、壽渠川に至る。及ばずして還る。

- 【一】 定陽。今の陝西省榆林道宜川縣。
- 【二】 湟山。澤の名。
- 【三】 清水。縣、今の甘肅省渭原道清水縣。略陽郡に屬す。
- 【四】 臨松。張天錫、張掖を分ちて臨松郡を置く。故城は今の甘肅省甘涼道張掖縣の南に在り。
- 【五】 顯美。縣、今の甘肅省甘涼道武威縣に在り。
- 【六】 窮泉。今の甘肅省甘涼道山丹縣に在り。
- 【七】 王鍾の誅。前卷四年に見ゆ。
- 【八】 敬は姓、歸は名。
- 【九】 胡阮。今の甘肅省甘涼道武威縣に在り。

初め南涼王儁檀、左將軍枯木等を遣はし、沮渠蒙遜を伐ち、臨松の千餘戸を掠めて還る。蒙遜、南涼を伐ち、顯美に至り、數千戸を徙して去る。南涼の太尉俱延、復た蒙遜を伐ち、大に敗れて歸る。是の月、儁檀、自ら五萬騎を將ゐて蒙遜を伐ち、窮泉に戰ふ。儁檀大に敗れ、單馬奔り還る。蒙遜、勝に乗じ、進みて姑臧を圍む。姑臧の人、王鍾の誅に懲り、皆、驚き潰ゆ。夷夏の萬餘戸、蒙遜に降る。儁檀懼れ、司隸校尉敬歸及び子佗を遣はし、蒙遜に質と爲し、以て和を請ふ。蒙遜、之を許す。歸りて胡阮に至り、逃げ還



る。佗、追兵に執へらる。蒙遜、其の衆八千餘戸を徙して去る。右衛將軍折掘奇鎮、石驢山に據りて以て叛く。儁檀、蒙遜の逼るを畏れ、且つ嶺南の奇鎮の據る所と爲らんことを懼れ、乃ち樂都に遷る。大司農成公緒を留めて、姑臧を守らしむ。儁檀纔に城を出づ。魏安の人侯諶等、門を閉ぢて亂を作し、三千餘家を收合し、南城に據り、焦朗を推して大都督・龍驤大將軍と爲し、諶自ら涼州の刺史と稱し、蒙遜に降る。

劉裕、下邳に至り、船を以て輜重を載せ、自ら精銳を帥ひ、歩して歸る。山陽に至り、何無忌敗死せりと聞き、京邑の守を失はんことを慮り、甲を巻きて兼行し、數十人と淮上に至り、行人に問ふに朝廷の消息を以てす。行人曰はく、「賊尙ほ未だ至らず。劉公若し還らば、便ち憂ふる所無からん」と。裕大に喜ぶ。將に江を濟らんとす。風急なり。衆咸之を難んず。裕曰はく、「若し天命、國を助けば、風當に自ら息むべし。若し其れ然らずんば、覆溺すとも何ぞ害とせん」と。即ち命じて舟に登らしむ。舟移りて風止む。江を過ぎて京口に至る。衆乃ち大に安んず。夏四月癸未、裕、建康に至る。江州の覆没せるを以て、表して章綬を送らんとす。詔して、許さず。青州の刺史諸葛長民、兖州の刺史劉藩、并州の刺史劉道憐、各兵を將ひ、入りて建康を衛る。藩は豫州の刺史毅の從弟なり。毅、盧循入寇すと聞き、將に之を拒がんとす。

- 【三〇】石驢山。今の甘肅省甘涼道武威縣に在り。
- 【三一】淮上。南史には江上に作る。當にこれに従ふべし。蓋し裕、山陽に至るとは、已に淮を渡りし也。
- 【三二】青州兖州・并州は時に皆僑して江淮の間に在り。

而るに疾作る。既に瘳え、將に行かんすとす。劉裕、毅に書を遺りて曰はく、「吾、往に妖賊を撃つに習ひ、其の變態を曉る。賊、新に姦利を獲、其の鋒、輕んす可からず。今、船を修め、畢るに垂なんとす。當に弟と與に同じく擧ぐべし。克平の日、上流の任は、皆以て相委ねん」と。又、劉藩を遣はし、往きて諭して之を止む。毅怒り、藩に謂つて曰はく、「往に一時の功を以て相推せるのみ。汝、便ち、我真に劉裕に及ばすと謂ふか」と。書を地に投じ、舟師二萬を帥ひ、姑孰を發す。循が初めて入寇するや、徐道覆をして尋陽に向はしめ、循自ら將として湘中の諸郡を攻む。荊州の刺史劉道規、軍を遣はして逆へ戦ひ、長沙に敗る。循進みて巴陵に至り、將に江陵に向はんとす。徐道覆、毅將に至らんとすと聞き、馳せて・循に報せしめて曰はく、「毅の兵、甚だ盛なり。成敗の事、之を此に係く。宜しく力を并せて之を摧くべし。若し此に克捷せば、江陵は憂ふるに足らざるなり」と。循、即日、巴陵を發し、道覆と兵を合せて下る。五月戊午、毅、循と桑落洲に戦ふ。毅の兵大に敗れ、船を棄て、數百人を以て歩走す。餘衆、皆、循に虜にせらる。棄つる所の輜重山積す。初め循、尋陽に至り、裕已に還ると聞きたれども、猶ほ信せず。既に毅を破り、乃ち審問を得、其の黨と、相視て色を失ふ。循、退きて尋陽に還り、攻めて江陵を取り。

- 【三五】妖賊。孫泰、左道を以て衆を惑はす。孫恩・盧循は皆其の黨なり。故にこれを妖賊といふ。
- 【三六】姑孰。毅、時に豫州の刺史を以て姑孰に鎮す。
- 【三七】湘中の諸郡は漢の長沙・零桂の地なり。
- 【三八】桑落洲。江西省潯陽道九江縣にあり。
- 【三九】審問。詳細なる事實の報道。問は聞に通ず。



【四〇】二州に據り、以て朝廷に抗せんと欲す。道覆謂へらく、「宜しく勝に乗じて徑に進むべし」と。固く之を争ふ。循、猶豫すること累日、乃ち之に従ふ。己未、大赦す。裕、人を募りて兵と爲し、之を賞すること、京口にて義に赴けるの科と同じうす。民を發して、石頭城を治む。議者謂へらく、「宜しく兵を分ちて、諸の津要を守るべし」と。裕曰はく、「賊は衆く我は寡し。若し兵を分ちて屯守するときは、則ち人の虚實を測らん。且つ一處、利を失ふときは、則ち三軍の心を沮まん。今、衆を石頭に聚め、宜しきに隨つて應赴せば、既に彼をして以て多少を測る無からしめ、又、衆力に於て分れず。若し徒旅轉た集まらば、徐ろに更に之を論せんのみ」と。朝廷、劉毅敗れぬと聞き、人情恟懼す。時に北師始めて還り、將士、創病多く、建康の戰士、數千に盈たず。循、既に二鎮に克ち、戰士十餘萬、舟車、百里まで絶えず、樓船高さ十二丈。敗れて還る者、争うて其の彊盛を言ふ。孟昶・諸葛長民、乘輿を奉じて江を過ぎんと欲す。裕聽かず。初め何無忌・劉毅が南討するや、昶、其の必ず敗れんことを策る。已にして果して然り。是に至りて、又謂へらく、「裕、必ず循に抗する能はじ」と。衆頗る之を信ず。惟だ龍驤將軍東海の虞丘進、廷に昶等を折き、以て然らずと爲す。中兵參軍王仲德、裕に言つて曰はく、「明公は

【四〇】二州。荊州・江州。  
 【四一】京口にて義に赴けるの科。裕、兵を京口に起し、以て桓玄を討つ、義に赴くの人、酬賞せらるること甚だ重かりき。  
 【四二】二鎮。江州・豫州をいふ。  
 【四三】江を過ぐ云云。時に、江西にも江北にも、皆、城池の倚る可き無し。昶・長民、天子を奉じて江を過ぎんと欲すとも、東は廣陵に走り、西は歷陽に據るに過ぎざらんのみ。

命世の作輔、新に大功を建て、威、六合に震ふ。妖賊、虚に乗じて入寇すとも、既に凱還せりと聞き、自ら當に奔潰すべし。若し先づ自ら遁逃せば、則ち執、匹夫に同じ。匹夫の號令、何ぞ以て物を威さん。【四四】此の謀、若し立たば、請ふ此より辭せん」と。裕甚だ悦ぶ。昶、固く請うて、已まず。裕曰はく、「今、重鎮外に傾き、彊寇内に逼り、人情危駭し、固志有るもの莫し。若し一旦遷動せば、便ち自ら土崩瓦解せん。江北にも亦豈に至るを得可けんや。設令至るを得とも、日月を延ぶるに過ぎらんのみ。今、兵士、少しと雖も、自ら一戦するに足る。若し其れ克濟するときは、則ち臣主、休を同じうせん。苟くも厄運必ず至らば、我、當に戸を廟門に横たへて、其の由來身を以て國に許すの志を遂ぐべし。草間に竄伏し、苟くも存活を求むる能はざるなり。我が計、決せり。卿、復た言ふ勿かれ」と。昶、其の言の行はれざるを悲り、且つ必ず敗れんと以爲ひ、因つて死を請ふ。裕怒りて曰はく、「卿且く申ねて一戦せよ。死すること復た何を晩からん」と。昶、裕が終に其の言を用ひざるを知り、乃ち抗表して自ら陳して曰はく、「臣裕が北討するや、衆竝に【四五】同せず、唯だ臣のみ裕の行計を贊し、疆賊をして間に乘じ、社稷をして危逼ならしむるを致せるは、臣の罪なり。謹んで咎を引き、以て天下に謝す」と。封表し畢り、藥を仰ぎて死す。乙丑、盧循、淮口に至る。中外戒嚴す。琅邪王德

【四四】新に大功を建つ。燕を滅ぼせるをいふ。  
 【四五】此謀。遁逃の謀をいふ。  
 【四六】同。贊同なり。  
 【四七】事、前年に見ゆ。  
 【四八】封表。密封して上表する也。  
 【四九】淮口。秦淮の江に入るの口。



文、宮城の諸軍事を都督し、【五〇】中堂皇に屯し、劉裕、石頭に屯し、諸將、各屯守有り。裕の子義隆、始めて四歳、裕、諮議參軍劉粹をして、之を輔けて京口に鎮せしむ。粹は毅の族弟なり。裕、民の水に臨みて賊を望むを見、之を怪み、以て參軍張劭に問ふ。劭曰はく、「若し【五一】節鉞未だ反らざりせば、民、奔散するに之れ暇あらざりしならん。亦何ぞ能く觀望せんや。今、當に復た恐るる無かるべきのみ」と。裕、將佐に謂つて曰はく、「賊若し新亭より直ちに進まば、其の鋒、當る可からず。宜しく且く廻避すべし。勝負の事、未だ量る可からざらん。若し【五二】西岸に廻泊せば、此れ禽と成らんのみ」と。徐道覆、新亭より白石に至り、舟を焚きて上り、數道より裕を攻めんと請ふ。循、萬全を以て計と爲さんと欲し、道覆に謂つて曰はく、「大軍未だ至らざるに、孟昶、便ち風を望みて自裁せり。大勢を以て之を言へば、自ら當に日を計りて潰亂すべし。今、勝負を一朝に決し、【五三】乾没して利を求むるは、既に必ず克つの道に非ず、且つ士卒を殺傷せん。兵を案じて之を待つに如かず」と。道覆、循が疑多く決少きを以て、乃ち歎じて曰はく、「我、終に盧公に誤られん。事必ず成る無からん。我をして英雄の爲めに驅馳するを得しめば、天下は定むるに足らざるなり」と。裕、石頭城に登り、循の軍を望むに、初め、引きて新亭に向ふを見、左右を顧みて色を失ふ。既にして【五四】蔡洲に廻泊する

【五一】 皇。堂に四壁無きを皇といふ。  
 【五二】 節鉞。劉裕の軍をいふ。  
 【五三】 西岸。即ち蔡洲。  
 【五四】 乾没。微幸して利を得んとするをいふ。あらかじめ物を貯へ置き、時を待ちて利を得るを乾といひ、利を失ふを没といふ。  
 【五五】 蔡洲。石頭の西岸に在り。今の江蘇省金陵道江寧縣に在り。

や、乃ち悦ぶ。是に於て衆軍轉た集まる。裕、循が侵軼せんことを恐れ、虞丘進の計を用ひ、樹を伐りて石頭・淮口に柵し、越城を修治し、【五六】查浦・藥園・廷尉の三壘を築き、皆、兵を以て之を守る。劉毅、蠻音を經涉し、僅に能く自ら免る。從者飢る疲れ、死亡什に七八。丙寅、建康に至りて罪を待つ。裕、之を慰勉し、【五七】中外留事に知たらしむ。毅、自ら貶するを乞ふ。詔して、降して後將軍と爲す。魏の長孫嵩、漠北に至りて還る。柔然追うて之を【五八】牛川に圍む。壬申、魏主嗣、北して柔然を撃つ。柔然可汗社崘、之を聞きて遁走し、道に死す。其の子度拔、尙ほ幼なり。部衆、社崘の弟斛律を立てて、【五九】藟豆蓋可汗と號す。嗣、兵を引きて參合陂に還る。  
【六〇】盧循、兵を南岸に伏せ、老弱をして舟に乗りて白石に向はしめ、『衆を悉して白石より歩いて上る』と聲言す。劉裕、參軍沈林子・徐赤特を留めて南岸を成り、查浦を斷たしめ、戒めて、堅く守りて動く勿からしむ。裕及び劉毅、諸葛長民、北に出でて之を拒ぐ。林子曰はく、『妖賊の此の言、未だ必ずしも實有らず。宜しく深く之が防を爲すべし』と。裕曰はく、『石頭は城險にして、且つ淮柵甚だ固し。卿を留めて後に在らしめば、以て之を

【五〇】 查浦・藥園・廷尉。大江の南岸に在り。三壘、皆、淮口にあり。  
 【五六】 蠻音。西陽の上下羣蠻の居る地を蠻と稱し、其の音の民となり租稅征役に應ずるものを音といへるなり。  
 【五七】 中外留事に知たり。都督中外諸軍府留事に知たる也。  
 【五八】 牛川。今の山西省雁門道左雲縣に在り。  
 【五九】 藟豆蓋可汗。一本には藟苦蓋可汗に作る。魏書蠕蠕傳同じ。  
 【六〇】 南岸。秦淮口の南岸。



守るに足る」と。林子は、穆夫の子なり。庚辰、盧循、查浦を焚き、進みて張侯橋に至る。徐赤特將に之を撃たんとす。林子曰はく、「賊、白石に往くと。聲し、而して屢來りて戰を挑む。其の情、知る可し。吾、衆寡、敵せず。險を守りて以て大軍を待つに如かず」と。赤特從はず。遂に出で戰ふ。伏兵發る。赤特大に敗れ、單舸にて淮北に奔る。林子及び將軍劉鍾、柵に據りて力戰す。朱齡石、之を救ふ。賊乃ち退く。循、精兵を引き、大に上りて、丹陽郡に至る。裕、諸軍を帥る、馳せて石頭に還り、徐赤特を斬り、甲を解く。之を久しうして、乃ち出でて南塘に陳す。

六月、劉裕を以て太尉・中書監と爲し、黃鉞を加ふ。裕、黃鉞を受け、餘は固辭す。車騎中軍司馬庾悅を以て江州の刺史と爲す。悅は、準の子なり。

司馬國璠及び弟叔璠・叔道、秦に奔る。秦王興曰はく、「劉裕、方に桓玄を誅し、晉室を輔く。卿、何爲れぞ來れる」と。對へて曰はく、「裕、王室を削弱し、臣の宗族、自ら修立する者有れば、裕、輒ち之を除く。方に國患と爲らんこと、桓玄よりも甚だしからんのみ」と。興、國璠を以て揚州の刺史と爲し、叔道を交

州の刺史と爲す。

盧循、諸縣を寇掠し、得る所無し。徐道覆に謂つて曰はく、「師老いたり。尋陽に還り、力を并せて荊州を取り、天下の三分の二に據り、徐ろに更に建康と衡を争ふに如かざるのみ」と。秋七月庚申、循、蔡洲より、南して尋陽に還り、其の黨范崇民を留め、五千人を將ゐて、南陵に據らしむ。甲子、裕、輔國將軍王仲德・廣川の太守劉鍾・河間の内史蘭陵の蒯恩・中軍諮議參軍孟懷玉等をして、衆を帥ゐて循を追はしむ。

乙丑、魏主嗣、平城に還る。

西秦王乾歸、越質屈機等十餘部を討ち、其の衆二萬五千を降し、苑川に徙す。八月、乾歸、復た苑川に都す。

沮渠蒙遜、西涼を伐ち、西涼の世子歆を馬廟に敗り、其の將朱元虎を禽にして還る。涼公暉、銀二千斤・金二千兩を以て、元虎を贖ふ。蒙遜、之を歸す。遂に暉と盟を結びて還る。

劉裕、東府に還り、大に水軍を治め、建威將軍會稽の孫處・振武將軍沈田子を遣はし、衆三千を帥る、海道より番禺を襲はしむ。田子は林子の兄なり。衆皆以爲へらく、「海道は艱にして遠く、必ず

【六】 沈穆夫は吳興武康の人、隆安三年、孫恩、會稽に寇し、三吳響應す。穆夫、會稽に在り。恩、以て餘姚の令と爲す。劉牢之、恩を破るや、并せて穆夫を殺す。

【七】 聲。聲言する也。

【八】 淮北。秦淮の北岸。

【九】 丹陽郡。丹陽の尹の治所なり。今の即ち江蘇省金陵道江寧縣なり。

【十】 南塘。秦淮の南岸に在り。

【十一】 劉裕、車騎將軍たりしが、劉敬宣が蜀を征して利を失へるを以て、乞うて號を中軍將軍に降せり。故に車騎中軍二府、共に一司馬なり。

【十二】 準。庾亮の孫。

【十三】 南陵。宣城郡宣城縣の西に在り。今の安徽省蕪湖道貴池縣に在り。

【十四】 越質。鮮卑種なり。其酋を叱黎と曰ふ。叱黎の子を詰歸と曰ふ。孝武の太元十六年、乾歸に降る。二十一年、叛きて秦に降る。屈機は即ち詰歸なり。音譯の異同なり。

【十五】 馬廟。もと、馬祖を祭る、後世、因つて廟を立ててこれを祭る、故に其の地を名けて馬廟と爲す。今の甘肅省安肅道敦煌縣に在り。

【十六】 盧循退き、裕乃ち東府に還る。



至ることは難しと爲す。且つ見力を分撤するは、目前の急に非ず」と。裕從はず、處に敕して曰はく、「大軍、十二月の交、必ず妖虜を破らん。卿至らん時、先づ其の巢窟を傾け、彼をして走るに歸する所無からしめよ」と。

謙縱、侍中譙良等を遣はし、秦に入見せしめ、兵を請うて以て晉を伐つ。縦、桓謙を以て荊州の刺史と爲し、譙道福を梁州の刺史と爲し、衆二萬を帥ゐて荊州に寇せしむ。秦王興、前將軍苟林を遣はし、騎兵を帥ゐて之に會せしむ。江陵、盧循が東下せしより、建康の間を得ず、羣盜互に起る。荊州の刺史劉道規、司馬王鎮之を遣はし、天門の太守檀道濟・廣武將軍彭城の到彦之を帥ゐ、入りて建康を援けしむ。道濟は祇の弟なり。鎮之、尋陽に至り、苟林に破らる。盧循、之を聞き、林を以て南蠻校尉と爲し、兵を分ちて之に配し、勝に乗じて江陵を伐たしめ、「徐道覆、已に建康に克つ」と聲言す。桓謙、道に於て義舊を召募す。民、之に投ずる者、二萬人。謙、枝江に屯す。林、江津に屯す。二寇交逼る。江陵の士民、多く異心を懷く。道規乃ち將士を會し、之に告げて曰はく、「桓謙、今、近道に在り。聞く、諸の長者、頗る去就の計有り」と。吾が東來の文武、以て事を濟すに足る。若し去らんと欲する者は、本より相禁せず」と。因つて夜、

- 【七〇】見力。現在の兵力。
- 【七一】分撤。分配撤去なり。
- 【七二】天門。郡の名、今の湖南省武陵道石門縣治。
- 【七三】義舊。桓氏、世に荆楚に居り、舊恩結ぶ所の人士、義相忘れず、これを義舊と謂ふ。
- 【七四】枝江。縣、今の湖北省荆南道枝江縣。
- 【七五】東來の文武。道規が從へ來れる將佐兵士を謂ふ。

城門を開き、曉に達するまで閉ぢず。衆、咸、懼り服し、去る者有る莫し。雍州の刺史魯宗之、衆數千を帥ゐ、襄陽より江陵に赴く。或るひと謂ふ、「宗之は、情未だ測る可からず」と。道規、單馬にて之を迎ふ。宗之感悦す。道規、宗之をして居守せしめ、委ぬるに腹心を以てし、自ら諸軍を帥ゐて謙を攻む。諸將佐、皆曰はく、「今、遠く出でて謙を討つ。其の勝つこと必し難し。苟林、近く江津に在り、人の動靜を伺ふ。若し來りて城を攻めば、宗之未だ必ずしも能く固からじ。脱し蹉跌有らば、大事去りなん」と。道規曰はく、「苟林は、愚儒にして、它的奇計無し。吾去りて未だ遠かずと以ひ、必ず敢て城に向はじ。吾、今、謙を取るは、往きて至らば便ち克たん。沈疑の間に、已に自ら還返せん。謙敗れば、則ち林、膽を破らん。豈に來るを得るに暇あらんや。且つ宗之獨り守るとも、何爲れを數日を支へざらん」と。乃ち馳せ往きて謙を攻め、水陸齊しく進む。謙等、大に舟師を陳ね、兼ぬるに歩騎を以てし、枝江に戦ふ。檀道濟、先づ進みて陳を陷る。謙等大に敗る。謙、單舸にて苟林に奔る。道規追うて之を斬る。還りて涌口に至り、林を討つ。林走る。道規、諮議參軍臨淮の劉遵を遣はし、衆を帥ゐて之を追はしむ。初め謙、枝江に至るや、江陵の士民、皆、謙に書を與へ、城内の虚實を言ひ、内應を爲さんと欲す。是に至りて、檢して之を得たり。道規、悉く焚きて、視ず。衆、是に於て大に安んず。

- 【七六】沈疑。沈吟して決せざるなり。
- 【七七】涌口。涌水が江に通する口。今の湖北省荆南道江陵縣の東南に在り。



江州の刺史庾悅、鄱陽の太守虞丘進を以て前驅と爲し、屢、盧循の兵を破り、進みて豫章に據り、循の糧道を絶つ。九月、劉遵、苟林を巴陵に斬る。桓右綏、循が入寇するに因り、兵を洛口に起し、自ら荊州の刺史と號し、(八〇) 徵陽の令王天恩、自ら梁州の刺史と號し、襲うて西城に據る。梁州の刺史傅韶、其の子魏興の太守弘之を遣はし、右綏等を討ち、皆、之を斬る。桓氏遂に滅ぶ。韶は暢の孫なり。

西秦王乾歸、秦の略陽・南安・隴西の諸郡を攻め、皆之に克つ。民二萬五千戸を苑川及び枹罕に徙す。

甲寅、魏主珪を(八二) 盛樂の金陵に葬り、諡して(八三) 宣武と曰ひ、廟を烈祖と號す。

劉毅、固く、盧循を追討せんことを求む。長史王誕、密に劉裕に言つて曰はく、『毅既に喪敗せり。宜しく復た功を立てしむべからず』と。裕、之に従ふ。冬十月、裕、兖州の刺史劉藩・寧朔將軍檀韶・冠軍將軍劉敬宣等を帥る、南して盧循を撃つ。劉毅を以て太尉の留府を監せしめ、後事、皆、これに委ぬ。癸巳、裕、建康を發す。

徐道覆、衆三萬を率ゐて、江陵に趣き、(八四) 破家に奄至す。時に魯宗之、已に襄陽に還る。追う

【八〇】 洛口。今の陝西省漢中道洋縣にあり。  
 【八一】 徵陽。當に徵陽に作るべし。徵陽縣は今の湖北省荊南道建始縣。  
 【八二】 盛樂の金陵。今の綏遠特別區域歸綏縣。  
 【八三】 宋の高祖永初元年、魏、改めて珪に諡して道武皇帝と曰ふ。  
 【八四】 破家。江岸の東に在り。今の湖北省荊南道石首縣にあるか。

て召せども及ばず。人情大に震ふ。或は傳ふ、(八五) 循、已に京邑を平げ、道覆を遣はし、來りて刺史と爲す』と。江漢の士民、劉道規が書を焚くの恩に感じ、復た貳志無し。道規、劉遵をして別に遊軍と爲らしめ、自ら道覆を豫章口に拒ぐ。前驅、利を失ふ。遵、外より横に撃ち、大に之を破る。斬首萬餘級。水に赴きて死する者殆ど盡く。道覆、單舸にて走り、溢口に還る。初め道規、遵をして遊軍と爲らしむるや、衆咸以爲へらく、(八六) 彊敵、前に在り、唯だ衆の少きを患ふ。應に見力を分割して無用の地に置くべからず』と。道覆を破るに及びて、卒に遊軍の力を得たり。衆心乃ち服す。

鮮卑の僕渾羌の句豈・輸報・鄧若等、戸二萬を帥ゐて、西秦に降る。

王仲德等、劉裕の大軍且に至らんとすと聞き、進みて范崇民を南陵に攻む。崇民の戦艦、夾みて(八七) 西岸に屯す。十一月、劉鍾自行きて賊を覘

ふ。天霧ふる。賊、鉤して其の舸を得たり。鍾、因つて左右を帥ゐて、(八八) 艦戸を攻む。賊遽に戸を閉ちて之を拒ぐ。鍾乃ち徐ろに還り、仲德と共に崇民を攻む。崇民走る。

癸丑、益州の刺史鮑陋・卒す。譙道福、巴東を陷れ、守將(八九) 溫祥・時延祖を殺す。盧循の兵の、廣州を守る者、海道を以て(九〇) 虞と爲さず。庚戌、孫處、海に乗じて奄至す。會、大

に霧ふる。四面より之を攻め、即日、其の城を抜く。處、其の舊民を撫し、循の親黨を戮し、兵を勒

【八五】 西岸。一本に兩岸に作る。從ふ可し。宋書劉鍾傳同。船室に入る口。  
 【八六】 艦戸。舟人、之を馬門と謂ふ。船室に入る口。  
 【八七】 溫祥は、もと、巴東の太守。時延祖は、劉敬宣黃虎の退より、皆、巴東に屯す。



して謹み守り、沈田子等を分遣して、嶺表の諸郡を撃たしむ。

劉裕、雷池に軍す。盧循、揚聲す、「雷池を攻めず、當に流に乗じて徑に下るべし」と。裕、其の

戦はんと欲するを知り、十二月己卯、進んで大雷に軍す。庚辰、盧循、徐道覆、衆數萬を帥ゐ、江

を塞ぎて下る。前後、舳艫の際を見る莫し。裕、悉く輕艦を出し、衆軍を帥ゐ、力を齊しうして之を

撃つ。又、歩騎を分ちて西岸に屯し、先づ火具を備へしむ。裕、勁弩を以て循の軍を射る。風水の執に因りて、以て之に蹙る。循の艦、悉く西岸

に泊す。岸上の軍、火を投じて之を焚く。烟炎、天に漲る。循の兵大に

敗れ、走りて尋陽に還る。將に豫章に趣かんとす。乃ち力を悉して左

里を柵斷す。丙申、裕の軍、左里に至り、進むを得ず。裕、兵を磨きて

將に戦はんとす。執る所の磨竿折れ、幡、水に沈む。衆竝に怪しむ懼る。

裕笑つて曰はく、「往年、覆舟の戦にも、幡竿亦折れたり。今者復た然り。

賊必ず破れん」と。即ち柵を攻めて進む。循の兵、殊死して戦ふと雖も、禁むる能はず。循、單舸に

て走る。殺す所及び水に投じて死する者、凡そ萬餘人なり。其の降附を納れ、其の逼略を宥す。劉

藩、孟懷玉を遣はし、輕軍をもて之を追はしむ。循、散卒を收む。尙ほ數千人有り。徑に番禺に還

る。道覆走りて始興に保す。裕、建威將軍褚裕之を板して廣州の刺史を行はしむ。裕之は哀の曾

孫なり。裕、建康に還る。劉毅、劉穆之を惡み、毎に従容として裕と言ふ、「穆之の權太だ重し」と。

裕益之を親任す。

燕の廣川公萬泥・上谷公乳陳、自ら、宗室にして大功有りといひ、謂へらく當に入りて公輔と爲

るべしと。燕王跋、二藩の任重きを以て、久しうして徵せず。二人皆怨む。是の歲、乳陳、密に

人を遣はして、萬泥に告げて曰はく、「乳陳、至謀有り。願はくは叔父と與

に之を圖らんことを」と。萬泥、遂に白狼に奔り、乳陳と俱に叛す。跋、

汲郡公弘を遣はし、張興と與に、步騎二萬を將ゐて之を討たしむ。弘、先

づ使を遣はし、諭すに禍福を以てす。萬泥、降らんと欲す。乳陳、可かず。

興、弘に謂つて曰はく、「賊、明日、出でて戦はん。今夜、必ず來りて我が

營を驚かさん。宜しく之が備を爲すべし」と。弘乃ち密に令して、人ごとに草十束を課し、火を畜へ、

兵を伏せしめ、以て之を待つ。是の夜、乳陳果して壯士千餘人を遣はし、來りて營を斫る。衆火俱に

起り、伏兵邀へ撃ち、俘斬して遺す無し。萬泥、乳陳、懼れて出で降る。弘、皆、之を斬る。跋、范

陽公素弗を以て大司馬と爲し、改めて遼西公に封じ、弘を驃騎大將軍と爲し、改めて中山公に封す。

- 【八八】 雷池。今の安徽省安慶道望江縣に在り。
- 【八九】 大雷。地名。同上。
- 【九〇】 炎。焔なり。
- 【九一】 左里。今の江西省潯陽道都昌縣に在り。其地、章江の左に在るを以て、故に名く。
- 【九二】 覆舟の戦。桓玄を討ち、桓謙等と戦ひし時を謂ふ。
- 【九三】 哀。崇德太后の父。

- 【九四】 大功。慕容熙が死するや、萬泥・乳陳、皆、功有り。
- 【九五】 跋、萬泥を以て幽并二州の牧と爲し、肥如に鎮せしめ、乳陳を并青二州の牧と爲し、白狼に鎮せしむ。



卷の第一一十六

晉紀三十八

安皇帝辛

義熙七年、春正月己未、劉裕、建康に還る。

秦の廣平公弼、秦王興に寵有り、雍州の刺史と爲り、安定に鎮す。姜紀、弼に諂附し、弼に勸めて、興の左右に結び、以て入朝を求めしむ。興、弼を徵して、尙書令・侍中・大將軍と爲す、弼、遂に身を傾けて朝士に結納し、名勢を收采し、以て東宮を傾く。國人、之を惡む。會興、西北に叛亂多きを以て、重將に命じて之を鎮撫せしめんと欲す。隴東の太守郭播、弼をして出でて鎮せしめんと請ふ。興從はず。太常索稜を以て太尉と爲し、隴西の内史を領し、西秦を招撫せしむ。西秦王乾歸、使を遣はし、掠する所の守宰を送り、罪を謝し、降らんと請ふ。興、鴻臚を遣はし、乾

晉安皇帝義熙七年

【一】義熙七年。西紀四一二年なり。

【二】雍州の刺史。姚秦、嶺北の五郡を分ちて雍州の刺史を置き、安定に鎮せしむ。

【三】隴東。郡、涇陽・祖厲・撫夷の三縣を領す。郡を立つるの始を載せず。蓋し苻姚の置く所なり。

【四】掠する所の守宰。去年、南安・略陽・隴西の諸郡に克ちて得たる所の守宰を謂ふ。



歸を都督隴西嶺北雜胡諸軍事・征西大將軍・河州の牧・單于・河南王に拜し、太子熾磐を鎮西將軍・左賢王・平昌公と爲す。興、羣臣に命じて賢才を搜擧せしむ。右僕射梁喜曰はく、「臣、累りに詔を受く。而れども未だ其の人を得ず。世之れ才に乏しと謂ふ可し」と。興曰はく、「古より帝王の興るや、未だ嘗て相を昔人に取り將を將來に待たず、時に隨つて才に任じ、皆、能く治を致せり。卿、自ら識拔すること明かならず。豈に遠く四海を誣ふるを得んや」と。羣臣咸悦ぶ。

秦の姚詳、杏城に屯す。夏王勃勃の逼る所と爲り、南して大蘇に奔る。勃勃、平東將軍鹿奔干を遣はし、追うて之を斬り、盡く其の衆を俘にす。勃勃、南して安定を攻め、尙書楊佛嵩を、青石の北原に破り、其の衆四萬五千を降し、進みて東郷を攻め、之を下し、三千餘戸を貳城に徙す。秦の鎮北參軍王買德、夏に奔る。夏王勃勃、問ふに秦を滅ぼすの策を以てす。

- 【五】大蘇。今の陝西省榆林道宜君縣。
- 【六】青石。今の甘肅省涇原道涇川縣。
- 【七】買德。遂に夏の謀臣と爲る。

買德曰はく、「秦の徳、衰へたりと雖も、藩鎮猶ほ固し、願はくは且く力を蓄へて以て之を待て」と。勃勃、買德を以て軍師中郎將と爲す。秦王興、衛大將軍常山公顯を遣はして姚詳を迎ふ。及ばず。遂に杏城に屯す。

劉藩、孟懷玉等諸將を帥る、盧循を追うて、嶺表に至る。二月壬午、懷玉、始興に克ち、徐道覆を斬る。

河南王乾歸、鮮卑の僕渾部の三千餘戸を度堅城に徙し、子勅物を以て秦興の太守と爲し、以て之に鎮せしむ。

焦朗、猶ほ姑臧に據る。沮渠蒙遜、攻めて其の城を拔く。朗を執へ、而して之を宥す。其の弟と擊を以て秦州の刺史と爲し、姑臧に鎮せしむ。遂に南涼を伐ち、樂都を圍む。三旬にして、克たず。

南涼王儁檀、子安周を以て質と爲す。乃ち還る。

吐谷渾樹洛干、南涼を伐ち、南涼の太子虎臺を敗る。

南涼王儁檀、復た沮渠蒙遜を伐たんと欲す。邯川護軍孟愷諫めて曰はく、「蒙遜、新に姑臧を并せ、凶勢方に盛なり。攻む可からざるなり」と。

儁檀、從はず。五道より俱に進む。番禾・茗翟に至り、五千餘戸を掠めて還る。將軍屈右曰はく、「今既に利を獲たり。宜しく道を倍して師を旋し、早く險阨を度るべし。蒙遜は、善く兵を用ふ。若し輕軍猝かに至らば、大敵外に逼り、徙戸内に叛かん。此れ危道なり」と。衛尉伊力延曰はく、「彼は歩、我は騎、勢、相及ばじ。今、道を倍して歸らば、則ち弱きを示し、且つ資財を捐棄せん。計に非ざるなり」と。俄にして昏く霾り風ふき雨ふる。蒙遜の兵大に至る。儁檀敗走す。蒙遜進みて樂都を圍む。儁檀、城に嬰りて固守す。子染干を以て質と爲し、以て和を請ふ。蒙遜乃ち還る。

- 【八】僕渾が乾歸に降ること、前卷前年に見ゆ。
- 【九】度堅城。即ち乞伏が先に都せし所の度堅山の城なり。今の甘肅省蘭山道金縣に在り。乞伏乾歸、秦興郡を度堅山に置く。
- 【一〇】焦朗が姑臧に據ること、前卷前年に見ゆ。
- 【一一】邯川。今の甘肅省西寧道碾伯縣の東南に在り。



三月、劉裕始めて太尉・中書監を受く。劉穆之を以て太尉の司馬と爲し、陳郡殷景仁を（三）行參軍と爲す。裕、穆之に問うて曰はく、『孟昶の參佐、誰か我が府に入るに堪ふる者ぞ』と。穆之、（四）前の建威中兵參軍謝晦を擧ぐ。晦は安の兄據の曾孫なり。裕即ち命じて參軍と爲す。裕、嘗て囚を訊ぬ。其の旦、刑獄參軍、疾有り。晦を以て之に代らしむ。車中に于て、訊牒を一覽す。催促便ち下る。相府多事にして、獄繫（五）殷積す。晦、問に隨うて（六）酬辨し、曾て違謬無し。裕、是に由りて之を奇とす。即日、（七）刑獄賊曹に署す。晦、風姿美しく、言笑を善くし、博瞻にして多く通ず。裕深く賞愛を加ふ。

盧循、行くゆく兵を收めて、番禺に至り、遂に之を圍む。孫處、拒ぎ守ること二十餘日。沈田子、劉藩に言つて曰はく、『番禺は、城、險固なりと雖も、本、賊の巢穴なり。今、循、之を圍む。或は内變有らん。且つ（八）孫季高は、衆力寡弱なり。久しきを持する能はざらん。若し賊をして還りて廣州に據らしめば、凶勢復た振はん』と。夏四月、田子、兵を引きて番禺を救ひ、循を撃ち、之を破る。殺す所萬餘人。循走る。田子、處と共に之を追ふ。又、循を蒼梧・鬱林・寧浦に破る。會處病み、進む能はず。循、交州に奔る。初め九眞の太守李遜、亂を作す。交州

- 【一】 太尉云云。太尉を加ふること、前卷五年に見ゆ。中書監を加ふること、六年に見ゆ。
- 【二】 行參軍。權參軍又は參軍事取扱といふが如し。位、參軍事に下ること一等等なり。
- 【三】 孟昶、建威將軍と爲り、晦を辟して中兵參軍と爲す。
- 【四】 殷積、多く積る。
- 【五】 酬辨、答辯なり。
- 【六】 刑獄賊曹。刑獄は蓋し民曹と賊曹に分たる。賊曹は盜賊の事を掌どる。刑事といはんが如し。
- 【七】 孫季高。季高は孫處の字。

の刺史交趾の杜瑗、討ちて之を斬る。瑗、卒す。朝廷、其の子慧度を以て、交州の刺史と爲す。詔書未だ至らず。循襲うて合浦を破り、徑に交州に向ふ。慧度、州府の文武を帥る、循を石碕に拒ぎ、之を破る。循の餘衆、猶ほ三千人。李孫の餘黨李脫等、俚獠五千餘人を結集し、以て循に應ず。庚子、循、晨（一）龍編の南津に至る。慧度悉く家財を散じ、以て軍士を賞し、循と合戦し、（二）雉尾炬を擲ちて其の艦を焚き、歩兵を以て岸を夾んで之を射る。循の衆艦俱に然え、兵衆大に潰ゆ。循、免れざるを知り、先づ妻子を燒し、妓妾を召して問うて曰はく、『誰か能く我が死に従ふ者ぞ』と。多くは云ふ、『雀鼠すら生を貪る。死に就くは實に難し』と。或は云ふ、『官すら尙ほ當に死すべくば、某豈に生を願はんや』と。乃ち悉く諸の死を辭する者を殺し、因つて自ら水に投ず。慧度、其の尸を取りて之を斬り、其の父子及び李脫等を并せ、七首を函にし、建康に送る。

- 【一】 龍編。縣、交趾郡にあり。今の安南國交州府の東。
- 【二】 雉尾炬。草の一端を束ねて、鐵鍬を施し、草尾散開し、雉尾の如し、火を然し、以て敵に投ず。
- 【三】 官。盧循をさす。
- 【四】 知識。知人なり。

初め劉毅、京口に在り、貧困なり。（三）知識と與に東堂に射る。庾悅、司徒の右長史たり、後れて至りて其の射堂を奪ふ。衆人、皆、之を避く。毅、獨り去らず。悦、厨饌甚だ盛なれども、以て毅に及ばず。毅、悦に従つて子鵝の炙りものを求む。悦怒り、與へず。毅、是に由りて之を衝む。是に至りて、毅、江州を兼ね督するを求む。詔して、之を許す。因つて奏して稱すらく、『江州は内地なり。



民を治むるを以て職と爲す。當に軍府を置きて民力を彫耗すべからず。宜しく軍府を罷め、移りて豫章に鎮すべし。而して尋陽は蠻に接す。即ち州府の千兵以て郡戍を助く可し」と。是に於て、悦の都督將軍の官を解き、刺史を以て豫章に鎮せしむ。毅、親將趙恢を以て千兵を領し、尋陽を守らしむ。悦の府の文武三千、悉く毅の府に入る。符攝嚴峻なり。悦、忿懼し、豫章に至り、疽、背に發して卒す。

河南王乾歸、羌の句豈等の部衆五千餘戸を疊蘭城に徙し、兄の子阿柴を以て興國の太守と爲し、以て之に鎮せしむ。五月、復た子木奔干を以て武威の太守と爲し、曠岷城に鎮せしむ。

丁卯、魏主嗣、金陵に謁す。山陽侯奚斤、居守す。昌黎王慕容伯兒、反を謀る。己巳、奚斤、其の黨を并せて之を收へ斬る。

秋七月、燕王跋、太子永を以て大單子を領せしめ、四輔を置く。柔然可汗斛律、使を遣はして、馬三千匹を跋に獻じ、跋の女樂浪公主を娶らんことを求む。跋、羣臣に命じて之を議せしむ。遼西公素弗曰はく、「前世には、皆、宗女を以て六夷に妻はす。宜しく許すに妃嬪の女を以てすべし。樂浪公主は、宜しく非類に下降すべからず」と。跋曰はく、「朕方に殊俗を崇信

- 【一】 符攝。符を江州に下してこれを追攝するなり。
- 【二】 句豈が乾歸に降ること、前卷上前年に見ゆ。
- 【三】 疊蘭城。今の甘肅省蘭山道導河縣に在り。
- 【四】 曠岷城。四年、乞伏熾磐の築く所。今の甘肅道蘭山道阜蘭縣。
- 【五】 金陵。今の綏遠特別區域歸綏縣。
- 【六】 四輔。太子、大單子を領すること、劉漢に始まる。時に左右輔を置くのみ。跋、前輔後輔を増量す。これを四輔とす。

す。奈何ぞ之を欺かんや」と。乃ち樂浪公主を以て之に妻はす。跋、政事に勤め、農桑を勸課し、徭役を省き、賦斂を薄くし、守宰を遣はす毎に、必ず親ら引見し、政を爲すの要を問ひ、以て其の能を観る。燕人、之を悦ぶ。

河南王乾歸、平昌公熾磐及び中軍將軍審虔を遣はして南涼を伐たしむ。審虔は乾歸の子なり。八月、熾磐の兵、河を濟る。南涼王儁檀、太子虎臺を遣はし、嶺南に逆へ戦はしむ。南涼の兵敗る。牛馬十餘萬を虜にして還る。

沮渠蒙遜、輕騎を帥りて西涼を襲ふ。西涼公暠曰はく、「兵、戦はずして敵を敗る者有り。其の銳を挫けばなり。蒙遜、新に吾と盟ふ。而るに遽に來りて我を襲ふ。我、門を閉ぢ、與に戦はず、其の銳氣の竭くるを待ちて之を撃たば、克たざる蔑からん」と。之を頃くして、蒙遜、糧盡きて歸る。暠、世子歆を遣はし、騎七千を帥り、之を邀へ撃つ。蒙遜、大に敗る。其の將沮渠百年を獲たり。

河南王乾歸、秦の略陽の太守姚龍を柏陽堡に攻め、之に克つ。冬十一月、進みて南平の太守王憬を水洛城に攻め、又、之に克つ。民三千餘戸を譚郊に徙す。乞伏審虔を遣はし、衆二萬を帥り、譚郊に城かしむ。十二月、西羌の彭利髮、襲うて枹罕に據り、自ら大將軍・河州の牧と稱す。乾歸、

- 【一】 河。金城河なり。
- 【二】 新に盟ふ。事、前卷前年に見ゆ。
- 【三】 水洛城。今の甘肅省涇原道靜寧縣に在り。
- 【四】 譚郊。治城の西北に在り。今の甘肅省蘭山道導河縣に在り。



之を討ち、克たす。二十日、西表の道に、復た彭城に鎮す。是の歳、并州の刺史劉道憐、北徐州の刺史と爲り、移りて彭城に鎮す。

八年、春正月、河南王乾歸、復た彭利髮を討ち、奴葵谷に至る。利髮、衆を棄てて南に走る。乾歸、振威將軍乞伏公府を遣はし、追うて清水に至り、之を斬り、羌の戸一萬三千を收め、乞伏審虔を以て河州の刺史と爲し、枹罕に鎮せしめて還る。

二月丙子、吳興の太守孔靖を以て尙書右僕射と爲す。河南王乾歸、徙りて譚郊に都す。平昌公熾磐に命じて苑川に鎮せしむ。

夏四月、劉道規、疾を以て、歸るを求む。之を許す。道規、荊州に在る

こと累年、秋毫も犯すこと無し。歸るに及びて、府庫帷幕、儼然として舊の若し。隨身の甲士二人、席を舟中に遷す。道規、之を市に刑す。後將軍豫州の刺史劉毅を以て衛將軍・都督荆寧秦雍四州諸軍事・荊州の刺史と爲す。毅、左衛將軍劉敬宣に謂つて曰はく、「吾、西任を忝うす。卿を屈して長史

南蠻と爲さんと欲す。豈に輔けらるるの意有らんか」と。敬宣懼れ、以て太尉裕に告ぐ。裕笑つて曰はく、「但に老兄をして平安ならしめん。必ず過慮する無かれ」と。毅、性剛愎にして、自ら謂へら

く、建義の功、裕と相埒しと。深く自ら矜伐す。事を權りて裕を推すと雖も、而も心は服せず。方岳に居るに及びて、常に怏怏として志を得ず。裕、毎に柔にして之に順ふ。毅、驕縱滋々甚だし。嘗て云はく、「恨むらくは、劉・項に遇ひ・之と與に中原を争はざることを」と。桑落に敗るるに及びて、物情已に去るを知り、彌復た憤激す。裕は素より學はず。而して毅は頗る文雅に渉る。故に朝士の清望有る者、多く之に歸す。尙書僕射謝混・丹陽の尹郗僧施と與に、深く相憑結す。僧施は超

の從子なり。毅、既に上流に據り、陰に裕を圖るの志有り。交・廣の二州を兼ね督するを求む。裕、之を許す。毅、又、郗僧施を以て南蠻校尉と爲し、後軍司馬毛修之を南郡の太守と爲さんと奏す。裕、亦、之を許す。

劉穆之を以て僧施に代りて丹陽の尹と爲す。毅、表して、京口に至りて墓に辭するを求む。裕往きて之に倪塘に會ふ。寧遠將軍胡藩、裕に言つて曰はく、「公に、劉衛軍は終に能く公の下ならんと謂ふか」と。裕、默然たる

こと之を久しうして曰はく、「卿、何如と謂ふ。」藩曰はく、「公、百萬の衆を連れ、攻むれば必ず取り、戦へば必ず克つ。毅、此を以て公に服す。傳記を涉獵し一談一詠するに至りては、自ら許して以て雄豪と爲す。是を以て、搢紳、白面の士、輻湊して之に歸す。恐らくは終に公の下たらざらん。會に因りて之を取るに如かず」と。裕曰はく、「吾、毅と、俱に克復の功有り。其の過未だ彰れず。自ら

之を討ち、克たす。二十日、西表の道に、復た彭城に鎮す。是の歳、并州の刺史劉道憐、北徐州の刺史と爲り、移りて彭城に鎮す。

八年、春正月、河南王乾歸、復た彭利髮を討ち、奴葵谷に至る。利髮、衆を棄てて南に走る。乾歸、振威將軍乞伏公府を遣はし、追うて清水に至り、之を斬り、羌の戸一萬三千を收め、乞伏審虔を以て河州の刺史と爲し、枹罕に鎮せしめて還る。

二月丙子、吳興の太守孔靖を以て尙書右僕射と爲す。河南王乾歸、徙りて譚郊に都す。平昌公熾磐に命じて苑川に鎮せしむ。

夏四月、劉道規、疾を以て、歸るを求む。之を許す。道規、荊州に在る

こと累年、秋毫も犯すこと無し。歸るに及びて、府庫帷幕、儼然として舊の若し。隨身の甲士二人、席を舟中に遷す。道規、之を市に刑す。後將軍豫州の刺史劉毅を以て衛將軍・都督荆寧秦雍四州諸軍事・荊州の刺史と爲す。毅、左衛將軍劉敬宣に謂つて曰はく、「吾、西任を忝うす。卿を屈して長史

南蠻と爲さんと欲す。豈に輔けらるるの意有らんか」と。敬宣懼れ、以て太尉裕に告ぐ。裕笑つて曰はく、「但に老兄をして平安ならしめん。必ず過慮する無かれ」と。毅、性剛愎にして、自ら謂へら

く、建義の功、裕と相埒しと。深く自ら矜伐す。事を權りて裕を推すと雖も、而も心は服せず。方岳に居るに及びて、常に怏怏として志を得ず。裕、毎に柔にして之に順ふ。毅、驕縱滋々甚だし。嘗て云はく、「恨むらくは、劉・項に遇ひ・之と與に中原を争はざることを」と。桑落に敗るるに及びて、物情已に去るを知り、彌復た憤激す。裕は素より學はず。而して毅は頗る文雅に渉る。故に朝士の清望有る者、多く之に歸す。尙書僕射謝混・丹陽の尹郗僧施と與に、深く相憑結す。僧施は超

の從子なり。毅、既に上流に據り、陰に裕を圖るの志有り。交・廣の二州を兼ね督するを求む。裕、之を許す。毅、又、郗僧施を以て南蠻校尉と爲し、後軍司馬毛修之を南郡の太守と爲さんと奏す。裕、亦、之を許す。

劉穆之を以て僧施に代りて丹陽の尹と爲す。毅、表して、京口に至りて墓に辭するを求む。裕往きて之に倪塘に會ふ。寧遠將軍胡藩、裕に言つて曰はく、「公に、劉衛軍は終に能く公の下ならんと謂ふか」と。裕、默然たる

こと之を久しうして曰はく、「卿、何如と謂ふ。」藩曰はく、「公、百萬の衆を連れ、攻むれば必ず取り、戦へば必ず克つ。毅、此を以て公に服す。傳記を涉獵し一談一詠するに至りては、自ら許して以て雄豪と爲す。是を以て、搢紳、白面の士、輻湊して之に歸す。恐らくは終に公の下たらざらん。會に因りて之を取るに如かず」と。裕曰はく、「吾、毅と、俱に克復の功有り。其の過未だ彰れず。自ら

之を討ち、克たす。二十日、西表の道に、復た彭城に鎮す。是の歳、并州の刺史劉道憐、北徐州の刺史と爲り、移りて彭城に鎮す。

八年、春正月、河南王乾歸、復た彭利髮を討ち、奴葵谷に至る。利髮、衆を棄てて南に走る。乾歸、振威將軍乞伏公府を遣はし、追うて清水に至り、之を斬り、羌の戸一萬三千を收め、乞伏審虔を以て河州の刺史と爲し、枹罕に鎮せしめて還る。

二月丙子、吳興の太守孔靖を以て尙書右僕射と爲す。河南王乾歸、徙りて譚郊に都す。平昌公熾磐に命じて苑川に鎮せしむ。

夏四月、劉道規、疾を以て、歸るを求む。之を許す。道規、荊州に在る

こと累年、秋毫も犯すこと無し。歸るに及びて、府庫帷幕、儼然として舊の若し。隨身の甲士二人、席を舟中に遷す。道規、之を市に刑す。後將軍豫州の刺史劉毅を以て衛將軍・都督荆寧秦雍四州諸軍事・荊州の刺史と爲す。毅、左衛將軍劉敬宣に謂つて曰はく、「吾、西任を忝うす。卿を屈して長史

南蠻と爲さんと欲す。豈に輔けらるるの意有らんか」と。敬宣懼れ、以て太尉裕に告ぐ。裕笑つて曰はく、「但に老兄をして平安ならしめん。必ず過慮する無かれ」と。毅、性剛愎にして、自ら謂へら

く、建義の功、裕と相埒しと。深く自ら矜伐す。事を權りて裕を推すと雖も、而も心は服せず。方岳に居るに及びて、常に怏怏として志を得ず。裕、毎に柔にして之に順ふ。毅、驕縱滋々甚だし。嘗て云はく、「恨むらくは、劉・項に遇ひ・之と與に中原を争はざることを」と。桑落に敗るるに及びて、物情已に去るを知り、彌復た憤激す。裕は素より學はず。而して毅は頗る文雅に渉る。故に朝士の清望有る者、多く之に歸す。尙書僕射謝混・丹陽の尹郗僧施と與に、深く相憑結す。僧施は超

の從子なり。毅、既に上流に據り、陰に裕を圖るの志有り。交・廣の二州を兼ね督するを求む。裕、之を許す。毅、又、郗僧施を以て南蠻校尉と爲し、後軍司馬毛修之を南郡の太守と爲さんと奏す。裕、亦、之を許す。

劉穆之を以て僧施に代りて丹陽の尹と爲す。毅、表して、京口に至りて墓に辭するを求む。裕往きて之に倪塘に會ふ。寧遠將軍胡藩、裕に言つて曰はく、「公に、劉衛軍は終に能く公の下ならんと謂ふか」と。裕、默然たる

こと之を久しうして曰はく、「卿、何如と謂ふ。」藩曰はく、「公、百萬の衆を連れ、攻むれば必ず取り、戦へば必ず克つ。毅、此を以て公に服す。傳記を涉獵し一談一詠するに至りては、自ら許して以て雄豪と爲す。是を以て、搢紳、白面の士、輻湊して之に歸す。恐らくは終に公の下たらざらん。會に因りて之を取るに如かず」と。裕曰はく、「吾、毅と、俱に克復の功有り。其の過未だ彰れず。自ら

- 【一】 奴葵谷。今の甘肅省西寧道循化縣にあり。
- 【二】 赤水。地名、今の甘肅省西寧道貴德縣にあり。
- 【三】 長史南蠻。南蠻校尉府の長史。

- 【四】 劉項。劉邦・項羽。
- 【五】 桑落に敗る。事、前卷六年に見ゆ。
- 【六】 物情。人望をいふ。
- 【七】 劉衛軍。毅、衛將軍たり。故にいふ。
- 【八】 白面。年若く經驗乏しきをいふ。



相圖る可からざるなり」と。

乞伏熾磐、南涼の三河の太守吳陰を、白土に攻め、之に克ち、乞伏出累を以て之に代らしむ。

六月、乞伏公府、河南王乾歸を弑し、并せて其の諸子十餘人を殺し、走りて大夏に保す。平昌公

熾磐、其の弟廣武將軍智達・揚武將軍木奕干を遣はし、騎三千を帥ゐて

之を討たしむ。其の弟曇達を以て、鎮京將軍と爲し、譚郊に鎮せしめ、

驍騎將軍婁機をして苑川に鎮せしむ。熾磐、文武及び民二萬餘戸を帥ゐて

枹罕に遷る。秦人多く秦王興に勸む、「亂に乗じて熾磐を取れ」と。興曰

はく、「人の喪を伐つは、禮に非ざるなり」と。夏王勃勃、熾磐を攻めんと

欲す。軍師中郎將王買德、諫めて曰はく、「熾磐は、吾の與國なり。今、

喪亂に遭ふ。吾、恤む能はず、又、衆力を恃みて之を伐つは、匹夫すら猶

ほ且つ爲すを恥づ。況んや萬乗をや」と。勃勃乃ち止む。

閏月庚子、南郡の烈武公劉道規・卒す。

秋七月己巳朔、魏主嗣、東巡し、四廂大將・十二小將を置く。山陽侯斤、

右丞相を行はしむ。庚寅、嗣、濡源に至り、西北の諸部落を巡る。

乞伏智達等、撃ちて乞伏公府を大夏に破る。公府、壘蘭城に奔り、其の弟阿柴に就く。智達等、

【九】白土。今の甘肅省西寧道西寧縣の東南。

【一〇】乞伏公府。國仁の子なり。立つを得ざるを以て、故に弑逆を行ふ。

【一一】鎮京將軍。乞伏、譚郊に都し、自らこれを京師と謂ふ。故に鎮京將軍を置く。

【一二】山陽侯。奚斤、山陽侯に封ぜらる。

【一三】元城侯。拓跋屈、元城侯に封ぜらる。

【一四】出巡して還るなり。

【一五】益壽。混の小字。

攻めて之を拔き、阿柴父子五人を斬る。公府、曠嶺の南山に奔る。追うて之を獲たり。其の四子を并せ、之を譚郊に輶にす。八月、乞伏熾磐、自ら大將軍・河南王と稱す。大赦し、永康と改元す。乾歸を枹罕に葬り、諡して武元と曰ひ、廟を高祖と號す。

皇后王氏崩す。

庚戌、魏主嗣、平城に還る。

九月、河南王熾磐、尙書令武始の翟勅を以て相國と爲し、侍中太子詹事趙景を御史大夫と爲し、尙

書令僕・尙書六卿・侍中等の官を罷む。

癸酉、僖皇后を休平陵に葬る。

劉毅、江陵に至り、多く守宰を變易す。輒ち豫州の文武・江州の兵力萬餘

人を割き、以て自ら隨ふ。會、毅、疾篤し。郗僧施等、毅死せば其の黨の危からんことを恐れ、乃ち

毅に勸めて、從弟兗州の刺史藩を以て自ら副とせんことを請はしむ。太尉裕、僞りて之を許す。藩、

廣陵より入朝す。己卯、裕、詔書を以て毅を罪狀して云はく、「藩及び謝混と、共に不軌を謀る」と。

藩及び混を收へて死を賜ふ。初め混、劉毅と欵昵す。混の從兄澹、常に以て憂と爲し、漸く之と疎な

り。弟璞及び從子瞻に謂つて曰はく、「益壽の此の性、終に當に家を破るべし」と。澹は安の孫な

り。庚辰、詔して大赦す。前の會稽の内史司馬休之を以て、都督荆雍梁秦寧益六州諸軍事・荊州の



刺史と爲し、北徐州の刺史劉道憐を兗青二州の刺史と爲し、京口に鎮せしめ、豫州の刺史諸葛長民をして太尉の留府の事を監せしむ。裕、長民を疑ひ、獨り任ずるを難り、乃ち劉穆之に建武將軍を加へ、佐吏を置き、資力を配給し、以て之を防ぐ。壬午、裕、諸軍を帥ゐて建康を發す。參軍王鎮惡、百舸を給して前驅と爲らんと請ふ。丙申、姑孰に至る。鎮惡を以て振武將軍と爲し、龍驤將軍蒯恩と與に、百舸を將ゐて前發せしむ。裕、之を戒めて曰はく、「若し賊撃つ可くば、之を撃て。不可ならば、其の船艦を燒き、留まりて水際に屯し、以て我を待て」と。是に於て鎮惡、晝夜兼行し、揚聲して言はく、「劉兗州上る」と。冬十月己未、鎮惡、豫章口に至る。江陵城を去ること二十里。船を捨てて歩いて上る。蒯恩の軍、前に居り、鎮惡、之に次ぐ。舸には一二人を留め、舸に對する岸上に、六七旗を立て、旗下に鼓を置き、留むる所の人に語ぐ、「我が將に城に至らんとするを計りて、便ち鼓嚴せよ」と。後に大軍有る狀の若くせしむ。又、人を分遣して、江津の船艦を燒かしむ。鎮惡、徑に前みて城を襲はんとし、前軍の士に語ぐ、「問ふ者有らば、但劉兗州至る」と云へ」と。津戍及び民間、皆、晏然として疑はず。未だ城に至らざること五六里にして、毅の要將朱顯之が江津に出でんと欲するに逢ふ、「劉兗州何くにか在る」と問ふ。軍士曰はく、「後に在り」と。顯之、軍後に至るに、藩を見ずして、軍人の、彭排、戦具を

【二六】 鼓嚴。軍鼓をたたくことなり。

【二七】 劉兗州。劉藩なり。

【二八】 要將。親む所の將の、兵要を掌る者。

【二九】 彭排。軍器。楯の一種。鋒矢を打ぐものなり。

擔ふを見る。江津を望むに、船艦已に燒かれ、鼓嚴の聲、甚だ盛なり。藩の上るに非ざるを知り、便ち馬を躍らして馳せ去り、毅に告げ、行くゆく令して諸城門を閉さしむ。鎮惡も亦馳せて門に進む。未だ關を下すに及ばず。軍人因つて城に入るを得たり。衛軍長史謝純、入りて毅に參承す。出でて、兵至ると聞く。左右、車を引きて歸らんと欲す。純、之を叱して曰はく、「我は人の吏なり。逃れて將に安くにかんとする」と。馳せ還りて府に入る。純は安の兄據の孫なり。鎮惡、城内の兵と鬪ひ、且つ其の金城を攻む。食時より、中晡に至る。城内の人敗れ散す。鎮惡、其の金城を穴ちて入り、人を遣はし、詔及び赦文并に裕の手書を以て毅に示す。毅、皆燒きて視ず。司馬毛修之等と、士卒を督して力戦す。城内の人、猶ほ未だ裕が自ら來るを信せず。軍士の毅に従つて東より來る者は、臺軍と、多く中表の親戚なり。且つ鬪ひ且つ語る。裕が自ら來るを知り、人情離れ駭く。夜に逮びて、聽事の前兵、皆、散す。毅の勇將趙蔡を斬る。毅の左右の兵、猶ほ東西閣を閉ちて拒ぎ戦ふ。鎮惡、關中自ら相傷犯せんことを慮り、乃ち軍を引き、出でて金城を圍み、其の南面を開く。毅、南に伏兵有らんことを慮り、夜半、左右三百許の人を帥ゐ、北門を開きて突き出づ。毛修之、謝純に謂つて曰はく、「君但だ僕に隨つて去れ」と。純、從は

【一〇】 參承。僚佐が府公を省するを、參承と謂ふ。

【一一】 金城。本丸なり。城内の牙城は、晉宋の時、これを金城といふ。

【一二】 中晡。申の時なり。今の午後四時頃。

【一三】 中表の親戚。外戚の親類なり。

【一四】 自ら相傷犯す。同志討ちするをいふ。



す。人に殺さる。毅、夜、牛牧佛寺に投ず。初め、桓蔚の敗るるや、走りて牛牧寺の僧昌に投ず。昌、之を保藏す。毅、昌を殺す。是に至りて、寺僧、之を拒みて曰はく、「昔、亡師、桓蔚を容れ、劉衛軍に殺されたり。今、實に敢て異人を容れず」と。毅、歎じて曰はく、「法を爲りて自ら弊るること、一に此に至る」と。遂に縊れて死す。明日、居人、以て告ぐ。乃ち首を市に斬る。子姪を并せて皆誅に伏す。毅の兄模、襄陽に奔る。魯宗之、斬りて之を送る。初め毅の季父鎮之、京口に閉居し、辟召に應せず。常て毅及び藩に謂つて曰はく、「汝が輩、才器は以て志を得るに足る。但だ久しからざらんことを恐るるのみ。我、爾に就きて財位を求めず、亦、爾に同じく罪累をも受けじ」と。毅、藩が導從して門に到るを見る毎に、輒ち之を詬る。毅甚だ敬畏し、未だ宅に至らざること數百歩にして、悉く儀衛を屏け、白衣數人と俱に進む。毅が死するに及びて、太尉裕、奏して鎮之を徵し、散騎常侍・光祿大夫と爲す。固辭して・至らず。

仇池公楊盛、秦に叛き、祁山を侵擾す。秦王興、建威將軍趙現を遣はして前鋒と爲し、立節將軍姚伯壽をして之に繼がしめ、前將軍姚恢をして、鶯峽に出でしめ、秦州の刺史姚嵩をして、羊頭峽に出でしめ、右衛將軍胡翼度をして、汧城に出でしめ、以て盛を討つ。興、雍より之に赴き、

【一】牛牧寺。江陵城の北二十里に在り。  
 【二】桓蔚の敗。事、一百十四卷元年に見ゆ。  
 【三】法を爲りて云云。秦の商鞅、自身の立てたる法律によりて、身を亡すに至れり。其時歎じて曰く、嗟乎、法を爲りて自ら敗る、一に此に至るか。  
 【四】導從。導は先導者。從は從者。  
 【五】白衣。無位無官の人。  
 【六】楊盛。義熙元年、秦に降る、今復た叛く。  
 【七】鶯峽。今の甘肅省渭川道成縣の北。  
 【八】羊頭峽。今の甘肅省渭川道秦安縣に在り。  
 【九】隴口。隴道の口。今の甘肅省渭川道兩當縣に在り。  
 【十】表聞。上表して奏聞する也。  
 【十一】秦の雍州は嶺北の五郡を統べ、安定に治す。  
 【十二】亢。吭と通ず。のど。

諸將と隴口に會す。天水の太守王松舒、嵩に言つて曰はく、「先帝、神略、方無く、徐洛生、英武を以て命を佐け、再び仇池に入りしが、功無くして還れり。楊氏の智勇能く全くするに非ざるなり。直だ地勢險固なればなるのみ。今、趙現の衆、使君の威を以て、之を先朝に準すれば、實に未だ成功を見ず。使君具に形便を悉す。何ぞ表聞せざる」と。嵩從はず。盛、衆を帥ゐ、琨と相持す。伯壽、畏懦にして進まず。琨、衆寡、敵せず、盛に敗らる。興、伯壽を斬りて還る。興、楊佛嵩を以て、雍州の刺史と爲し、嶺北の見兵を帥ゐ、以て夏を撃たしむ。行くこと數日、興、羣臣に謂つて曰はく、「佛嵩、敵を見る毎に、勇、自ら制せず。吾、常に其の兵を節し、五千人に過ぎざらしむ。今、將ゐる所既に多し。敵に遇はば必ず敗れん。行くこと已に遠し。之を追ふとも及ぶ無けん。將に之を若何せんとする」と。佛嵩、夏王勃勃と戦ひ、果して敗れ、勃勃に執へらる。亢を絶ちて死す。

秦、昭儀齊氏を立てて后と爲す。  
 沮渠蒙遜、姑臧に遷る。

十一月己卯、太尉裕、江陵に至り、郗僧施を殺す。初め毛修之、劉毅の僚佐たりと雖も、素より自



ら裕に結ぶ。故に裕、特に之を宥す。王鎮惡に爵漢壽子を賜ふ。裕、毅の府の諮議參軍申永に問うて曰はく、「今日、何を施して可ならん」と。永曰はく、「其の宿釁を除き、其の惠澤を倍し、門次を貫叙し、才能を顯擢せよ。此の如きのみ」と。裕、之を納れ、書を下して、租を寛にし調を省き、役を節し刑を原し、名士を禮辟す。荆人、之を悦ぶ。

諸葛長民、驕縱貪侈にして、爲す所不法多く、百姓の患と爲る。常に太尉裕が之を按せんことを懼る。劉毅が誅せらるるに及びて、長民、所親に謂つて曰はく、「昔年、彭越を醢にし、今年、韓信を殺す。禍其れ至らん」と。乃ち人を屏げ、劉穆之に問うて曰はく、「悠悠の言、皆云ふ、「太尉我と平かならず」と。何を以てか此に至れる」と。穆之曰はく、「公、流に沂りて遠征し、老母稚子を以て節下に委ぬ。若し一豪も盡さざらば、豈に此の如くなる容けんや」と。長民、意乃ち小しく安んず。長民の弟輔國大將軍黎民、長民に説きて曰はく、「劉氏の亡ぶるは、亦、諸葛氏の懼なり。宜しく裕が未だ還らざるに因りて之を圖るべし」と。長民、猶豫して未だ發せず。既にして歎じて曰はく、「貧賤なれば常に富貴を思ひ、富貴なれば必ず危機を履む。今日、丹徒の布

【三七】 門次を貫叙す。魏晉以來、率れ門地の高下を以て、人を用ふるの次第と爲す。貫叙は、次を以てこれを叙づること錢を緡に貫くが若くする也。

【三八】 悠悠の言。世間の風評をいふ。

【三九】 公。劉裕をさす。

【四〇】 節下。長民をさす。

【四一】 若し云云。一豪は一毫なり。若し少ししても不平の念あらんには、劉公、老母稚子を節下に任せて遠征すること、爲すまじき管なりとの意。

【四二】 丹徒の布衣。長民は琅邪の陽都の人にして、丹徒に僑居せり。

【四三】 盤龍。劉毅の小子。

【四四】 三州七郡。敬宣、北より還り、晉陵の太守を拜し、江州に遷り、尋陽に鎮し、郡事を兼ね領し、徵されて宣城の内史を拜し、襄城の太守を領し、鎮蠻護軍・安豐の太守・梁國の内史に遷り、又、青州の刺史に遷り、尋いで冀州に改めらる。

【四五】 阿壽。敬宣、字は萬壽。故に裕、これを稱して阿壽といふ。

【四六】 判。決する也。決定する也。

【四七】 左里云云。盧循を破りて還りし時をいふ。

【四八】 脫爾。輕脱にして還り、嚴備を爲さざるを謂ふ。

【四九】 垂眊。愛顧する也。

衣と爲らんと欲すとも、豈に得可けんや」と。因つて冀州の刺史劉敬宣に書を遣りて曰はく、「盤龍は、狼戾專恣にして、自ら夷滅を取る。異端將に盡きんとし、世路方に夷かならんとす。富貴の事、相與に之を共にせん」と。敬宣、報じて曰はく、「下官、義熙より以來、三州・七郡を忝うし、常に、福過ぎて災の生せんことを懼れ、盈を避けて損に居らんことを思ふ。富貴の旨は、敢て當る所に非ず」と。且つ(シテ)書を以て裕に呈せしむ。裕曰はく、「阿壽、故に我に負かずと爲すなり」と。劉穆之、長民が變を爲さんことを憂へ、人を屏げ、太尉の行參軍東海の何承天に問うて曰はく、「公の今の行は濟らんや否や」と。承天曰はく、「荆州は、時に判せざるを憂へず。別に一慮有るのみ。公、昔年、左里より還り、石頭に入るや、甚だ脱爾たりき。今、還るや、宜しく重慎を加ふべし」と。穆之曰はく、「君に非ざれば、此の言を聞かず」と。裕、江陵に在り。輔國將軍王誕、裕に白し、先づ下らんことを求む。裕曰はく、「諸葛長民、自ら疑ふ心有るに似たり。卿詎ぞ宜しく便ち去るべき」と。誕曰はく、「長民、我が公の垂眊を蒙るを知る。今、輕身にして單り下らば、必ず當に以て虞無しと爲すべし。乃ち以て少しく



其の意を安んず可からんのみ」と。裕笑つて曰はく、「卿の勇は賁育に過ぐ」と。乃ち先づ還るを聽す。  
沮渠蒙遜、河西王の位に即く。大赦し、玄始と改元し、官僚を置き、涼王光が三河王と爲る  
故事の如くす。

太尉裕、蜀を伐たんと謀り、元帥を擇びて、其の人を難んず。西陽の太守朱齡石が既に武幹有り又  
吏職に練れたるを以て、之を用ひんと欲す。衆皆以爲へらく、「齡石は資名  
尙は輕し。重任に當り難からん」と。裕從はず。十二月、齡石を以て益州  
の刺史と爲し、寧朔將軍臧熹・河間の太守劉恩・下邳の太守劉鍾等を帥み、  
蜀を伐たしめ、大軍の半ば二萬人を分ち、以て之に配す。熹は裕の妻の弟  
にして、位、齡石の右に居り、亦焉に隸す。裕、齡石と、密に進取を謀り  
て曰はく、「劉敬宣、往年、黃虎に出で、功無くして退けり。賊、我今  
應に外水より往くべしと謂ひ、而して、我當に其の不意に出でて、猶ほ内水より來るべしと料らん。  
此の如くならば、(賊)必ず重兵を以て涪城を守り、以て内道に備へん。若し(我)黃虎に向はば、正に其  
の計に墮ちん。今、大衆を以て、外水より成都を取り、疑兵、内水より出でば、此れ敵を制するの奇  
(策)なり」と。而して此の聲先づ馳せば賊(我軍)虛實を審かにせんことを慮り、別に函書有り、封じ  
て齡石に付し、函邊に署して曰はく、「白帝に至らば乃ち開け」と。諸軍、進むと雖も、未だ處分の

【五〇】 沮渠蒙遜。臨松の盧水の  
胡人なり。其先は匈奴の左沮  
渠たり。遂に官を以て氏と爲  
す。  
【五一】 三河王の事。一百七卷孝  
武太元十四年に見ゆ。  
【五二】 劉敬宣云云。事、一百十  
四卷四年に見ゆ。

由る所を知らず。毛修之、固く・行かんと請ふ。裕、修之が蜀に至らば、必ず誅殺する所多く、士  
人、毛氏と嫌有れば、亦當に死を以て自ら固むべきを恐れ、許さず。

【五三】 荆州の十郡を分ちて湘州を置く。

太尉裕に太傅・揚州の牧を加ふ。

丁巳、魏主嗣、北巡して長城に至りて還る。

九年、春二月庚戌、魏主嗣、高柳川に如く。甲寅、宮に還る。

太尉裕、江陵より東に還る。駱驛として輜重を遣り、兼行して下らしむ。  
前に至日を刻す。毎に淹留して進まず。諸葛長民、公卿と與に、頻日、  
新亭に奉候すれば、輒ち其の期に差ふ。乙丑晦、裕、輕舟にて徑に進み、  
潛に東府に入る。三月丙寅朔旦、長民、之を聞き、驚き趨りて門に至る。  
裕、壯士丁昨を幔中に伏せ、長民を引き、人を却けて問語す。凡そ平生  
盡さざる所の者、皆、之に及ぶ。長民甚だ悦ぶ。丁昨、幔後より出で、  
座に於て之を拉殺す。尸を輿にして廷尉に付す。其の弟黎民を收ふ。黎民、素より驍勇なり、格鬪  
して死す。并せて其の季弟大司馬參軍幼民・從弟寧朔將軍秀之を殺す。

【五三】 土人毛氏と嫌有り。毛氏  
の家、蜀人の滅ぼす所と爲れ  
るを以てなり。  
【五四】 荆州の十郡云云。成帝咸  
和三年、湘州を省きて荆州に  
入る。今復た置く。  
【五五】 長城。秦の築く所の萬里  
の長城なり。  
【一】 高柳川。今の山西省雁門  
道陽高縣。  
【二】 至日を刻す。到着すべき  
日を定むるなり。  
【三】 劉穆之・何承天の慮る所  
の者、已に胸中に了たり。  
【四】 幔。幕なり。



庚午、秦王興、使を遣はして魏に至らしめ、好を修む。

太尉裕、上表して曰はく、「大司馬溫、民に定本無きを以て、治を傷ること深しと爲し、庚戌、土斷して以て其の業を一にす。時に財阜く國豊なりしは、實に此に由れり。茲より今に迄るまで、漸く用て頽弛す。請ふ前制を申ねん」と。是に於て、界に依りて土斷す。唯だ徐兗青の三州の晉陵に居る者は、斷の例に在らず。諸の流寓の郡縣、併省する所多し。戊寅、裕に豫州の刺史を加ふ。裕、固く太傅・州牧を讓る。

林邑の范胡達、九眞に寇す。杜慧度、撃ちて之を斬る。

河南王熾磐、鎮東將軍曇達・平東將軍王松壽を遣はし、兵を將ゐて、東のがた休官・權小郎・呂破胡を白石川に撃たしむ。大に之を破り、其の男女萬餘口を虜にす。進みて白石城に據る。顯親・休官・權小成・呂奴迦等二萬餘戸、白阮に據り、服せず。曇達、攻めて之を斬る。隴右の休官悉く降る。秦の太尉索稜、隴西を以て熾磐に降る。熾磐、稜を以て太傅と爲す。

夏王勃勃、大赦し、鳳翔と改元す。叱干阿利を以て將作大匠を領せしめ、嶺北の夷夏十萬人を發し、都城を朔方水の北、黑水の南に築く。

勃勃曰はく、「朕方に天下を統一し、萬邦に君臨す。宜しく新城を名けて統萬と曰ふべし」と。阿利、性巧にして殘忍、土を蒸して城を築き、錐入ること一寸なれば、即ち作者を殺し、而して并せて之を築く。勃勃、以て忠と爲し、之に委任す。凡そ兵器を造り、成りて之を呈すれば、工人、必ず死する者有り。甲を射て、入らざれば則ち弓人を斬り、入れば則ち甲匠を斬る。又、銅を鑄て、一大鼓・飛廉・翁仲・銅駝・龍虎の屬を爲り、飾るに黃金を以てし、宮殿の前に列ぬ。凡そ工匠を殺すこと數千。是に由りて、器物、皆、精利なり。勃勃、自ら謂へらく、其の祖、母の姓に從つて、劉と爲せるは、禮に非ざるなり。古人は、氏族、常無しと。乃ち姓を赫連氏と改む。帝王は天に係りて子たり。其の徽赫なること天と連なるを言ふなり。其の正統に非ざる者は、皆、鐵伐を以て氏と爲す。其の剛銳なること鐵の如く、皆人を伐つに堪ふるを言ふなり。

夏四月乙卯、魏主嗣、西巡し、鄭兵將軍奚斤、鴻飛將軍尉古眞、都將閭大肥等に命じて、越勤部を跋那山に撃たしむ。大肥は柔然の人なり。

河南王熾磐、安北將軍烏地延、冠軍將軍翟紹を遣はし、吐谷渾の別統句旁を泣勤川に撃たしむ。

- 【一】 劉、漢高祖、宗女を以て烏蘭木倫河。
- 【二】 黑水、これはオルドスの
- 【三】 朔方水、奢延水ともいふ。今の甘肅省榆林道を流れて黄河に入る無定河なり。
- 【四】 顯親、休官、權小成、呂奴迦等二萬餘戸、白阮に據り、服せず。曇達、攻めて之を斬る。隴右の休官悉く降る。
- 【五】 庚戌の制は一百一卷哀帝興寧二年に見ゆ。
- 【六】 徐兗青三州の都督は、率ね管陵に治す、故に土を以て斷じ難し。
- 【七】 白石川、白阮。今の甘肅省蘭山道導河縣にあり。
- 【八】 七年、秦、索稜をして遼西を守り、以て乞伏を招撫せしむ。
- 【九】 朔方水、奢延水ともいふ。今の甘肅省榆林道を流れて黄河に入る無定河なり。
- 【一〇】 黑水、これはオルドスの烏蘭木倫河。
- 【一一】 劉、漢高祖、宗女を以て

- 【一】 單于冒頓に妻はし、約して兄弟と爲る。故に其の子孫、姓劉氏を冒せり。
- 【二】 鐵伐、勃勃の父衛辰は、本、鐵弗氏なり。故に其正統に非ざる者を改めて鐵伐氏と爲す。
- 【三】 鄭兵、北史には都兵に作る。
- 【四】 鴻飛將軍、拓跋氏の創置する所。
- 【五】 越勤、北史太宗宗紀には越勤に作る。
- 【六】 跋那山、蓋し廣壽郡の塞外に在り。
- 【七】 別統、別帥といはんが如し。別に部落を統ぶる者。



大に之を破る。

河西王蒙遜、子政德を立てて世子と爲し、鎮衛大將軍・錄尚書事を加ふ。

南涼王儁檀、河西王蒙遜を伐つ。蒙遜、之を〔一〕若厚塢に敗り、又、之を若涼に敗る。因つて進みて

樂都を圍む。二旬にして克たず。南涼の湟河の太守文支、郡を以て蒙遜に降る。蒙遜、文支を以て廣武

の太守と爲す。蒙遜、復た南涼を伐つ。儁檀、太尉俱延を以て質と爲す。

乃ち還る。蒙遜、西して若翟に如き、冠軍將軍伏恩を遣はし、騎一萬を

將ゐて〔二〕卑和・烏啼の二部を襲はしむ。大に之を破り、二千餘落を俘にし

て還る。蒙遜、新臺に寝ぬ。閩人王懷祖、蒙遜を撃ち、足を傷つく。其の

妻孟氏、禽へて之を斬る。蒙遜の母車氏・卒す。

五月乙亥、魏主嗣、雲中の舊宮に如く。丙子、大赦す。西河の胡張外

等、衆を聚めて盜を爲す。〔三〕乙卯、嗣、會稽公長樂の劉絜等を遣はし、

西河に屯し、之を招討せしむ。

六月、嗣、五原に如く。

朱齡石等、白帝に至り、〔三〕函書を發く。曰はく、「衆軍は、悉く外水より成都を取れ。臧熹は、中

〔一〕 處厚塢・若涼・共に今の甘肅省西寧道碾伯縣に在り。  
〔二〕 卑和・烏啼。羌種の部落なり。  
〔三〕 乙卯。己卯の誤ならん。  
〔四〕 函書云云。前年十二月、劉裕、進軍に際し、封書を齡石に附して、白帝に至りて開けと命ぜしなり。

水より廣漢を取れ。老弱は、高懸十餘に乗り、内水より黃虎に向へ」と。是に於て諸軍、道を倍し

て兼行す。譙縱、果して譙道福に命じて、重兵を將ゐて涪城に鎮せしめ、以て内水に備ふ。齡石、平

模に至る。成都を去ること二百里。縱、秦州の刺史侯暉、尚書僕射譙詵を遣はし、衆萬餘を帥ゐて平

模に屯し、岸を夾みて城を築き、以て之を拒がしむ。齡石、劉鍾に謂つて曰はく、「今、天時盛に熱く、

而して賊、兵を嚴し險を固む。之を攻むとも、未だ必ずしも抜く可からず、祇だ疲困を増さんのみ。

且く銳を養ひ兵を息め、以て其の隙を伺はんと欲す。何如」と。鍾曰はく、「然らず。前に揚聲して言

はく、「大衆、内水に向ふ」と。譙道福、敢て涪城を捨てず。今、重軍猝に至り、其の不意に出で、侯

暉の徒、已に膽を破れり。賊の兵を阻み險を守る者、是れ其れ懼れて敢て

戦はざらん。其の〔三〕兇思するに因り、銳を盡して之を攻めば、其の執必

ず克たん。平模に克つの後、自ら、鼓行して進む可からん。成都、必ず・守

る能はざらん。若し兵を緩にして相守らば、彼將に人の虚實を知らんと

す。涪の軍忽ち來り、力を并せて我を拒がん。人情既に安く、良將又集まらん。此れ戰を求むと

も獲ず、軍食、資無く、二萬餘人、悉く蜀の子虜と爲らん」と。齡石、之に従ふ。諸將、水北の城は

地險に兵多きを以て、先づ其の南城を攻めんと欲す。齡石曰はく、「今、南城を屠るとも、以て北を破

るに足らじ。若し銳を盡して以て北城を抜かば、則ち南城は、靡かすして自ら散せん」と。秋七月、

齡石、諸軍を帥ゐて、急に北城を攻め、之に克ち、侯暉・譙詵を斬る。兵を引き、廻りて南城に趣く。

〔一〕 平模。今の四川省建昌道彭山縣に在り。  
〔二〕 兇思。恟懼なり。思は懼の古字。



南城自ら潰ゆ。齡石、船を捨てて歩いて進む。譙縱の大將譙撫之、〔二四〕牛脾に屯し、譙小苟、〔二五〕打鼻を塞ぐ。臧熹、撫之を撃ち、之を斬る。小苟、之を聞き、亦潰ゆ。是に於て、縦の諸營屯、風を望みて、相次いで奔り潰ゆ。戊辰、縦、成都を棄てて出で走る。尙書令馬耽、府庫を封じ、以て晉の師を待つ。壬申、齡石、成都に入る。縦の同祖の親を誅す。餘は皆按堵し、其の業に復せしむ。縦、成都を出で、先づ墓に辭す。其の女曰はく、「走るとも必ず免れざらん。祇だ辱を取らんのみ。等しく死せば、先人の墓に死せんこと、可なり」と。縦従はず。譙道福、平模守られずと聞き、涪より、兵を引ゐて入り赴く。縦往きて之に投ず。道福、縦を見、怒りて曰はく、「大丈夫、此の如き功業有り。而るに之を棄て、將に安くに歸せんとするか。人、誰か死せざらん。何ぞ怯なるの甚だしきや」と。因つて縦に投ずるに劍を以てす。其の馬鞍に中る。縦、乃ち去り、自ら縊れて死す。巴西の人王志、其の首を斬り、以て齡石に送る。道福、其の衆に謂つて曰はく、「蜀の存亡、實に我に係り、譙王に在らず。今、我在り、猶ほ一戦するに足る」と。衆皆許諾す。道福、盡く金帛を散じ、以て衆に賜ふ。衆、之を受けて走る。道福、獠中に逃る。巴の民杜瑾執へて之を送る。〔二六〕軍門に斬る。齡石、馬耽を越嶲に徙す。歌、其の徒に謂つて曰はく、「朱侯、我を京師に送らず、〔二七〕口を滅せんと欲するなり。吾必ず免れざらん」と。

〔二四〕 牛脾。縣。今の四川省西川道簡陽縣。

〔二五〕 打鼻。山の名、今の西川省建昌道彭山縣にあり。

〔二六〕 義熙元年、譙縱、蜀に據り、九年にして滅ぶ。

〔二七〕 口を滅せんと欲す。齡石多く庫物を取り、耽を殺して以て口を滅するを謂ふ。

らんと。乃ち盥洗して臥し、繩を引きて死す。須臾にして、齡石の使至り、其の尸を戮す。詔して、齡石を以て監梁秦州六郡諸軍事に進め、爵豊城縣侯を賜ふ。

魏の奚斤等、越勳を拔那山の西に破り、二萬餘家を大寧に徙す。

河西の胡曹龍等、部衆二萬人を擁し、來りて蒲子に入る。張外、之に降り、龍を推して大單于と爲す。

丙戌、魏主嗣、定襄の大洛城に如く。

河南王熾磐、吐谷渾支旁を長柳川に撃ち、旁及び其の民五千餘戸を虜にして還る。

八月癸卯、魏主嗣、平城に還る。

曹龍、降を魏に請ひ、張外を執へ送る。之を斬る。

丁丑、魏主嗣、豺山宮に如く。癸未、還る。

九月、再び太尉裕に命じて、太傅・揚州の牧と爲す。〔二八〕固辭す。

河南王熾磐、吐谷渾の別統掘達を渴渾川に撃ち、大に之を破り、男女二萬三千を虜にす。冬十月、掘達、其餘衆を帥ゐて熾磐に降る。

〔二九〕吐京の胡、離石の胡出以眷と與に、魏に叛く。魏主嗣、元城侯屈に命じて、會稽公劉縉・永安侯

〔二八〕 大寧。今の直隸省口北道宣化縣。

〔二九〕 蒲子。今の山西省河東道隰縣。

〔三〇〕 定襄郡に賚縣あり。

〔三一〕 長柳川。青海の附近。

〔三二〕 吐京。今の山西省河東道石樓縣附近をいふ。その地に據れる胡なり。



魏勤を督し、以て之を討たしむ。丁巳、出以眷、夏兵を引き、契を邀へ撃ち、之を禽にし、以て夏に獻す。勤・戦死す。嗣、屈が二將を亡ふを以て、之を誅せんと欲す。既にして之を赦し、并州の刺史を攝せしむ。屈、州に到り、酒を縦にして事を廢す。嗣、其の前後の罪惡を積み、檻車をもて徵還し、之を斬る。

十一月、魏主嗣、使を遣はし、昏を秦に請ふ。秦王興、之を許す。

是の歲、敦煌の索邈を以て梁州の刺史と爲す。符宣乃ち仇池に還る。初め邈、漢川に寓居し、別駕姜顯と隙有り。凡そ十五年にして、邈、漢川に鎮す。顯乃ち肉袒して迎候す。邈、慍る色無く、之を待つこと彌厚し。(邈)退きて人に謂つて曰はく、「我、昔、此に寓し、志を失ふこと多年なりき。若し姜顯を讐とせば、懼るる者少からじ。但だ之を服せば自ら佳し。何ぞ必ずしも志を逞しうせん」と。是に於て、闔境、之を聞き、皆悦ふ。

【三】符宣が漢中に入る事、一百十四卷元年に見ゆ。

十年、春正月辛酉、魏・大赦し、神瑞と改元す。

辛巳、魏主嗣、繁時に如く。二月戊戌、平城に還る。

夏王勃勃、魏の河東の蒲子を侵す。

庚戌、魏主嗣、豺山宮に如く。

魏の并州の刺史婁伏連、夏の置く所の吐京護軍及び其の守兵を襲殺す。

司馬休之、江陵に在り、頗る江漢の民心を得たり。(三)子譙王文思、建康に在り、性凶暴にして、好みて輕俠に通ず。太尉裕、之を惡む。三月、有司、文思を奏す、「擅に國吏を捶殺す」と。詔して、其の黨を誅し、而して文思を宥す。休之、上疏して罪を謝し、所任を解かれんことを請ふ。許さず。

裕、文思を執へて休之に送り、自ら訓厲せしむ。意には休之が之を殺さんことを欲す。休之、但だ表して文思を廢し、并せて裕に書を與へて陳謝するのみ。裕、是に由りて、悦ばず。江州の刺史孟懷玉を以て、豫州の六郡を兼ね督せしめ、以て之に備ふ。

夏五月辛酉、魏主嗣、平城に還る。

秦の後將軍斂成、叛羌を討ち、羌に敗らる。罪を懼れ、夏に出奔す。

秦王興、疾有り。妖賊李弘、氏仇常と與に、貳城に反す。興、疾を興して往きて之を討ち、常を斬り、弘を執へて還る。

秦の左將軍姚文宗、太子泓に寵有り。廣平公弼、之を惡み、「文宗、怨言有り」と誣ふ。秦王興怒り、文宗に死を賜ふ。是に於て、羣臣、弼を畏れて目を側つ。弼、興に言ふに、従はざる者無し。親む所の天水の尹冲を以て、給事黃門侍郎と爲し、唐盛を治書侍御史と爲す。興の左右、機要を掌る

【一】去年、夏、拓跋屈を破り、因つて守兵を吐京に置く。  
【二】文思は休之の長子なり。譙王尙之、桓玄の難に死す。帝、正に反り、文思を以て國を嗣がしむ。  
【三】六郡。宣城・襄城・淮南・廬江・安豐・歷陽なり。



者、皆、其の黨なり。右僕射梁喜・侍中任謙・京兆の尹尹昭、問を承け興に言つて曰はく、「父子の  
 際、人の言ひ難き所なり。然れども君臣の義は、父子よりも薄からず。故に臣等、默然たるを得ず。  
 廣平公弼、潜に嫡を奪ふの志有り。陛下、之を寵すること太だ過ぎ、其の威權を假す。傾險無頼  
 の徒、輻湊して之に附く。道路、皆言はく、「陛下、將に廢立の計有らんとす」と。信に之れ有るか  
 と。興曰はく、「豈に此れ有らんや」と。喜等曰はく、「苟くも之れ無くば、則ち陛下、弼を愛するは、  
 適之に禍する所以なり。願はくは其の左右を去り、其の威權を損せよ。此の如くせば、特に弼を  
 安んずるのみに非ず、乃ち宗廟社稷を安んずる所以なり」と。興應へず。  
 大司農竇温・司徒の左長史王弼、皆、密疏して興に勸む、「弼を立てて太子  
 と爲せ」と。興、從はずと雖も、亦、責めざるなり。興、疾篤し。弼、潜に  
 衆數千人を聚め、亂を作すを謀る。姚裕、使を遣はし、弼の逆狀を以て、諸兄の藩鎮に在る者に告  
 ぐ。是に於て姚懿、兵を蒲阪に治し、鎮東將軍豫州の牧洗、兵を洛陽に治し、平西將軍譙、兵を雍  
 に治し、皆、長安に赴きて弼を討たんと欲す。會、興、疾瘳え、羣臣を見る。征虜將軍劉羌、泣き  
 て以て興に告げ、梁喜・尹昭、弼を誅せんと請ふ。且つ曰はく、「苟くも陛下、弼を殺すに忍びずんば、  
 亦當に其の權任を奪ふべし」と。興、已むを得ずして、弼の尙書令を免じ、將軍公を以て第に還ら  
 しむ。懿等、各、兵を罷む。懿・洗・譙、姚宣と、皆入朝し、裕をして入りて興に白さしめ、見えんこ

【四】懿・洗・皆、興の子なり。  
 【五】將軍公。弼は大將軍と爲り、廣平公に封ぜらる。

とを求む。興曰はく、「汝等、正に弼の事を論せんと欲するのみ。吾已に之を知れり」と。裕曰はく、  
 『弼、苟くも論ず可き有らば、陛下の宜しく垂聽すべき所なり。若し懿等の言、是に非ずば、便ち當  
 に之を刑辟に寘くべし。奈何ぞ逆め之を拒まん』と。是に於て、懿等を證議堂に引見す。宣、流涕  
 して極言す。興曰はく、「吾自ら之を處せん。汝が曹の愛ふる所に非ず」と。撫軍東曹屬姜虬・上疏し  
 て曰はく、「廣平公弼、釁成り逆著はる。道路皆之を知る。昔、文王の化は、寡妻に刑し、今、聖朝  
 の亂は、愛子より起る。含忍掩蔽せんと欲すと雖も、而も逆黨扇惑して、  
 已ます。弼の亂心、何に由りてか革まる可き。宜しく凶徒を斥散し、以て  
 禍端を絶つべし」と。興、虬の表を以て梁喜に示して曰はく、「天下の人、  
 皆、吾が兒を以て口實と爲す。將に何を以て之を處せんとする」と。喜  
 曰はく、「信に虬の言の如し。陛下、宜しく早く裁決すべし」と。興、默然  
 たり。

【六】詩大雅思齊に曰はく、寡妻に刑し、兄弟に至ると。  
 【七】口實。常に口を去らざるを謂ふ。

【八】唾契汗。乙弗國に契翰の一部有り、吐谷渾の北に在り。

唾契汗・乙弗等の部、皆、南涼に叛く。南涼王儁檀、之を討たんと欲す。邯川の護軍孟愷諫めて  
 曰はく、「今、連年饑饉し、南は熾磐に逼り、北は蒙遜に逼り、百姓安んぜず。遠征して、克つと雖も、  
 必ず後患有らん。熾磐と盟を結び、糴を通じ、雜部を慰撫し、食を足らせ兵を繕ひ、時を俟つて動くに如  
 かず」と。儁檀從はず。太子虎臺に謂つて曰はく、「蒙遜近ごろ去り、猝に來る能はざらん。旦夕慮



る所は、唯だ熾磐に在り。然れども熾磐は兵少く、禦ぎ易し。汝謹んで樂都を守れ。吾、一月を過ぎずして、必ず還らん」と。乃ち騎七千を帥ゐて、乙弗を襲ひ、大に之を破り、馬牛羊四十餘萬を獲たり。河南王熾磐、之を聞き、樂都を襲はんと欲す。羣臣咸以て不可と爲す。太府の主簿焦襄曰はく、「儻、近患を顧みずして、遠利を貪る。我、今、之を伐ち、其の西路を絶ち、還り救ふを得ざらしめば、則ち虎臺獨り窮城を守り、坐ながら禽にす可きなり。此れ天亡ぼすの時、必ず失ふ可からず」と。熾磐、之に従ひ、歩騎二萬を帥ゐて樂都を襲ふ。虎臺、城に憑りて拒守す。熾磐、四面より之を攻む。南涼の撫軍從事中郎尉肅、虎臺に言つて曰はく、「外城は廣大にして、守り難し。殿下、國人を聚めて内城を守るに若かず。肅等、晋人を帥ゐて外に拒ぎ戦はば、捷たざる有り」と雖も、猶ほ「自ら存するに足らん」と。虎臺曰はく、「熾磐は、小賊、旦夕當に走るべし。卿何ぞ過慮することの深き」と。虎臺、晋人の異心有るを疑ひ、悉く豪望の謀勇有る者を召し、之を内に閉づ。孟愷泣きて曰はく、「熾磐、虚に乗じて内に侮る。國家、累卵よりも危し。愷等、進みては恩に報いんと欲し、退きては妻子を顧み、人死を救さんと思ふ。而るに殿下乃ち之を疑ふこと是の如きか」と。虎臺曰はく、「吾、豈に

- 【九】樂都。今の甘肅省西寧道碾伯縣。
- 【一〇】近患。蒙遜と熾磐とをなす。
- 【一一】遠利。乙弗を謂ふ。
- 【一二】西路。樂都の西路。此れ儻が乙弗より樂都に還るの路なり。
- 【一三】國人。鮮卑の秃髮の種落を謂ふ。
- 【一四】夷人、中國の人を謂つて晋人と爲す。
- 【一五】豪望。豪族にして名望ある者。

君の忠篤を知らざらんや。餘人の脱しくは虚表を生せんことを懼れ、君等を以て之を安んずるのみ」と。  
 一、一夕、城潰ゆ。熾磐、樂都に入る。平遠將軍捷虔を遣はし、騎五千を帥ゐて儻を追はしむ。鎮南將軍謙屯を以て、都督河右諸軍事・涼州の刺史と爲し、樂都に鎮せしめ、秃髮赴單を西平の太守と爲し、西平に鎮せしめ、趙恢を以て廣武の太守と爲し、廣武に鎮せしめ、曜武將軍王基を晋興の太守と爲し、浩亶に鎮せしめ、虎臺及び其の文武百姓萬餘戸を枹罕に徙す。赴單は烏孤の子なり。  
 河間の人格匡、燕王跋に言つて曰はく、「陛下、遼碣に龍飛し、舊邦の族黨、首を朝陽に傾け、日を以て歳と爲す。請ふ往きて之を迎へん」と。跋曰はく、「道路數千里、復た異國を隔つ。如何ぞ致す可けん」と。匡曰はく、「章武は海に臨み、舟楫、通す可し。遼西の臨渝に出づること、難しと爲さざるなり」と。跋、之を許し、匡を以て游擊將軍・中書侍郎と爲し、資を厚くして之を遣はす。匡、跋の從兄買・從弟睹と與に、長樂より、五千餘戸を帥ゐて和龍に歸る。契丹・庫莫奚、皆、燕に降る。跋、其の大人を署し、歸善王と爲す。跋の弟丕、亂を避けて高句麗に在り。跋、之を召し、以て左

- 【一六】一、一夕。晋書の西晉載記及び南涼載記には、一句に作る。
- 【一七】捷虔。謙屯は、皆、乞伏種なり。
- 【一八】舊邦の族黨云云。其族黨の、長樂に在る者、首を傾けて東を望み、迎ふる者の來らんとす。
- 【一九】章武云云。跋の祖先は、長樂信都の人。而して章武郡は、晋、漢の勃海を分ちて置く所なり。信都より章武に至れば、以て海に浮びて遼西に至る可し。
- 【二〇】臨渝。縣、今の奉天省遼瀋道錦縣の西に在り。
- 【二一】長樂。今の直隸省保定道冀縣。



僕射と爲し、常山公に封す。

柔然可汗斛律、將に女を燕に嫁せんとす。斛律の兄の子步鹿眞、斛律に謂つて曰はく、『幼女、遠く嫁して憂思せん。請ふ大臣樹黎等の女を以て媵と爲せ』と。斛律許さず。步鹿眞出でて、樹黎等に謂つて曰はく、『斛律、汝の女を以て媵と爲し、遠く它國に適かしめんと欲す』と。樹黎恐れ、步鹿眞と與に謀り、勇士をして、夜、斛律の穹廬の後に伏せしめ、其の出づるを伺つて之を執へ、女と與に皆燕に送り、步鹿眞を立てて可汗と爲し、而して(樹黎)之に相たり。初め(三)樹黎が高車に徙るや、高車の人叱洛侯、之が郷導を爲し、以て諸部を併す。社論、之を徳とし、以て大人と爲す。步鹿眞、社論の子社拔と、共に叱洛侯の家に至り、其の少妻に淫す。妻、步鹿眞に告げて曰はく、『叱洛侯、大檀を奉じて主と爲さんと欲す』と。大檀とは社論の季父僕渾の子なり。別部を領して西境に鎮し、素より衆心を得たり。步鹿眞、歸りて兵を發し、叱洛侯を圍む。叱洛侯、自殺す。遂に兵を引ゐて大檀を襲ふ。大檀逆へ撃ちて之を破り、步鹿眞及び社拔を執へて之を殺し、自立して可汗と爲り、牟汗紇升蓋可汗と號す。斛律、和龍に至る。燕王跋、斛律に爵上谷侯を賜ひ、之を遼東に館し、待つに客禮を以てし、其の女を納れて昭儀と爲す。斛律、上書し、其の國に還らんと請ふ。跋曰はく、『今、國を棄つること萬里、又、内應無し。若し重兵を以て相送らば、則ち饋運繼ぎ難く、兵少からば則ち功を成すに足らじ。如何ぞ還る可き』と。斛律固く請

【三】社論が高車に徙る。事、一百十二卷元興元年に見ゆ。

うて曰はく、『重兵を煩はさず、願はくは三百騎を給せよ。送りて敕勒に至らば、國人必ず欣然とし、て來り迎へん』と。跋乃ち單于の前輔萬陵を遣はし、騎三百を帥ゐて之を送らしむ。陵、遠役を憚り、(四)黒山に至り、斛律を殺して還る。大檀も亦使を遣はし、馬三千匹・羊萬口を燕に獻す。六月、泰山の太守劉研等は、流民七千餘家を帥ゐ、河西の胡會劉遮等は、部落萬餘家を帥ゐ、皆魏に降る。

戊申、魏主嗣、豺山宮に如く。丁亥、平城に還る。樂都の潰ゆるや、南涼の安西將軍樊尼、西平より、奔りて南涼王儁檀に告ぐ。儁檀、其の衆に謂つて曰はく、『今、妻子、皆、熾磐の虜にする所と爲る。退くとも歸る所無し。卿等能く吾と與に乙弗の資に藉り、契汗を取り、以て妻子を贖はんか』と。乃ち兵を引き西す。衆多く逃げ還る。儁檀、鎮北將軍段苟を遣はして之を追はしむ。苟も亦還らず。是に於て、將士皆散す。唯だ樊尼と、中軍將軍紇勃、後軍將軍洛肱、散騎侍郎陰利鹿とのみ、去らず。儁檀曰はく、『蒙遜・熾磐、昔、皆質を吾に委ねたり。今にして之に歸するは、亦鄙しからずや。四海の廣き、身を容るる所無し。何ぞ其れ痛ましきや。其の聚まりて同じく死せんよりは、分れて或は全きに若かず。』樊尼は吾が長兄の子、宗部の寄る所なり。吾が衆の・北に在る者、戶、一萬に垂なんとす。蒙

【三】黒山。今の綏遠和林格爾縣の北に在り。

【四】蒙遜・熾磐云云。蒙遜が利鹿孤に臣と稱する事、一百十二卷隆安五年に見ゆ。熾磐父子が利鹿孤に歸する事、一百一十卷四年に見ゆ。

【五】樊尼。烏孤の子なり。



遜、方に士民を招懷し、亡を存し絶を繼ぐ。汝、其れ之に従へ。紇勃・洛肱、亦、尼と俱に行け。吾年老いたり。適く所容れられず。寧ろ妻子を見て死せん」と。遂に熾磐に歸す。唯だ陰利鹿のみ之に隨ふ。僂檀、利鹿に謂つて曰はく、「吾が親屬、皆、散ず。卿何ぞ獨り留まる」と。利鹿曰はく、「臣が老母、家に在り、歸るを思はざるに非ず。然れども質を委ねて臣と爲る。忠孝の道、以て兩つながら全くし難し。臣、不才にして、陛下の爲めに泣血して救を鄰國に求むる能はず、敢て左右を離れんや」と。僂檀、歎じて曰はく、「人を知るは固に未だ易からず。大臣・親戚、皆、我を棄てて去る。今日、忠義、終始、虧けざる者は、唯だ卿一人のみ」と。僂檀の諸城、皆、熾磐に降る。獨り尉賢政、浩臺に屯し、固守して下らず。熾磐、人を遣はして之に謂つて曰はく、「樂都已に潰え、卿の妻子、皆、吾が所に在り。獨り一城を守り、將に何を爲さんとするか」と。賢政曰はく、「涼王の厚恩を受け、國の藩屏と爲る。樂都已に陥り、妻子禽と爲り、先づ歸すれば賞を獲、後れて順へば誅を受くると雖も、然れども、主上の存亡を知らず、未だ敢て命に歸せず。妻子は小事なり。豈に心を動かすに足らんや。若し一時の利を貪り、委付の重きを忘れれば、大王も亦安んぞ之を用ひん」と。熾磐乃ち虎臺を遣はし、手書を以て之を諭す。賢政曰はく、「汝、儲副と爲り、節を盡す能はず、人に面縛し、父を棄て君を忘れ、萬世の業を墮る。賢政は義士なり、豈に汝に效はんや」と。僂檀が左南に至るを聞き、乃ち降る。熾磐、僂檀

【三】 主上。僂檀を謂ふ。

【四】 左南。城は今の甘肅省西寧道碾伯縣に在り。

檀至ると聞き、使を遣はして郊迎し、待つに上賓の禮を以てす。秋七月、熾磐、僂檀を以て驃騎大將軍と爲し、爵左南公を賜ふ。南涼の文武、才に依りて銓叙す。歲餘にして、熾磐、人をして僂檀を燒せしむ。左右、之を解かんと請ふ。僂檀曰はく、「吾が病は、豈に宜しく療すべけんや」と。遂に死す。諡して景王と曰ふ。虎臺も亦熾磐の殺す所と爲る。僂檀の子保周・賀・俱延の子覆龍・利鹿孤の孫副周・烏孤の孫承鉢、皆、河西王蒙遜に奔る。之を久しうして、又、魏に奔る。魏、保周を以て張掖王と爲し、覆龍を酒泉公と爲し、賀を西平公、副周を永平公、承鉢を昌松公と爲す。魏主嗣、賀の才を愛し、謂つて曰はく、「卿の先は、朕と源を同じうす」と。姓を源氏と賜ふ。

八月戊子、魏主嗣、馬邑侯陋孫を遣はして秦に使せしむ。辛丑、謁者于什門を遣はして燕に使し、悦力延をして柔然に使せしむ。于什門、和龍に至り、肩て入り見えずして曰はく、「大魏皇帝、詔有り、須く馮王出でて受くべし。然る後敢て入らん」と。燕王跋、人をして牽逼せしめて、入らしむ。什門、跋を見て拜せず。跋、人をして其の項を按へしむ。什門曰はく、「馮王、詔を拜受せば、吾自ら賓主を以て敬を致さん。何を苦みて逼らるるや」と。跋怒り、什門を留めて遣らず。什門數、之を衆辱す。左右、之を殺さんと請ふ。跋曰はく、「彼各、其の主の爲めにするのみ」と。乃ち什門を幽執し、之を降さんと欲す。什門、終に降ら

【二】 銓叙。銓考叙任。才能を量りて官に叙する也。

【三】 秃髮烏孤より僂檀に至るまで三世十九年にして滅ぶ。



す。之を久しうして、衣冠弊壞して略ぼ盡き、蟻蝨流溢す。跋、之に衣冠を遺る。什門、皆、受けず。魏主嗣、博士王諒を以て、平南參軍と爲し、平南將軍相州の刺史尉太眞の書を以て太尉裕と相聞せしむ。太眞は古眞の弟なり。

九月丁巳朔、日、之を食する有り。

冬十月、河南王熾磐、復た秦王と稱し、百官を置く。

燕王跋、夏と連和す。夏王勃勃、御史中丞烏洛孤を遣はし、燕に如きて

盟に泣ましむ。

十一月壬午、魏主嗣、使者を遣はし、諸州を巡行し、守宰の資財を校閲

し、家の齎す所に非ざれば、悉く簿して賊と爲す。

西秦王熾磐、(三二)妃禿髮氏を立てて后と爲す。

十二月丙戌朔、柔然可汗大檀、魏を侵す。丙申、魏主嗣、北して之を撃つ。大檀走る。奚斤等を遣

はして之を追ふ。大雪に遇ふ。士卒凍死し、及び指を墮す者、什に二三。

河内の人司馬順宰、自ら晉王と稱す。魏人、之を討ち、克たず。

燕の遼西公素弗・卒す。燕王跋、葬るに比ぶまでに、七たび之に臨む。

是の歳、司馬國璠兄弟、衆數百を聚め、潛に(三三)淮を渡り、夜、廣陵城に入る。青州の刺史檀祗、

【三〇】秦王と稱す。熾磐、位を嗣ぎ、自ら河南王と稱せしが、今、南涼を并せ、復た秦王と稱す。

【三一】妃。禿髮の女なり。

【三二】北徐州の界より淮を渡りしなり。

廣陵の相を領す。國璠の兵、直に聽事に上る。祗驚き出で、將に之を禦がんとす。射傷を被りて入り、左右に謂つて曰はく、「賊、闇に乗じて入るを得、我が不備を掩はんと欲す。但だ五鼓を撃たば、彼、曉を懼れて必ず走らん」と。左右、其の言の如くす。(三四)國璠の兵果して走る。

【三四】國璠が淮を擾ること、是に至りて十年。

魏の博士祭酒崔浩、魏主嗣の爲めに、易及び洪範を講ず。嗣因つて浩に天文術數を問ふ。浩、占決して驗多し。是に由りて寵有り。凡そ軍國の密謀、皆、之に預る。

夏王勃勃、夫人梁氏を立てて王后と爲し、子瓚を太子と爲し、子延を封じて陽平公と爲し、昌を太原公と爲し、倫を酒泉公と爲し、定を平原公と爲し、滿を河南公と爲し、安を中山公と爲す。



卷の第一一十七

晉紀三十九

安皇帝壬

義熙十一年、春正月丙辰、魏主嗣、平城に還る。

太尉裕、司馬休之の次子文寶、兄の子文祖を收へ、並びに死を賜ひ、兵を發して之を撃つ。詔して、裕に黃鉞を加へ、荊州の刺史を領せしむ。庚午、大赦す。

丁丑、吏部尚書謝裕を以て尚書左僕射と爲す。

辛巳、太尉裕、建康を發す。中軍將軍劉道憐を以て留府の事を監せしめ、劉穆之をして右僕射を兼ねしむ。事、大小と無く、皆、穆之に決す。又、

高陽の内史劉鍾を以て石頭の戍の事を領し、冶亭に屯せしむ。休之の府司馬張裕、南平の太守檀範之、之を聞き、皆逃げて建康に歸る。裕は、邵の兄なり。雍州の刺史魯宗

之、自ら太尉裕に容れられざるを疑ひ、其の子竟陵の太守軌と與に、兵を起し、休之に應ず。二月、



休之・上表して、裕を罪狀し、兵を勸して之を拒ぐ。裕、密書して休之の府録事參軍南陽の韓延之を招く。延之、復書して曰はく、「親しく戎馬を帥ゐて遠く西畿を履むを承はる。闔境の士庶、惶駭せざるもの莫し。」(何トナレバ、師出ヅルノ、師出ヅルノ、師出ヅルノ、師出ヅルノ)疏を辱し、譙王の前事を以てするを知り、良に歎息を増す。司馬平西、國を體して忠貞に、歎懷、物を待つ。公が匡復の勳有り、家國頼を蒙るを以て、徳を推し誠を委ね、事毎に詢仰す。譙王、往に微事を以て効せられたるすら、猶ほ自ら表して位を遜れり。況んや大過を以てせられて、而も當に嘿然たるべけんや。前に已に表奏して之を廢す。盡きざる所の者は命のみ。推寄して相與すること、正に當に此の如くなるべし。而るに遽に兵甲を興す。所謂(一〇)之に罪を加へんと欲せば、其れ辭無からんや。劉裕足下、海内の人、誰か足下の此の心を見ざらん。而るに、復た、國士を欺誑せんと欲す。來示に云ふ、(一一)「懷に處き物を期する、自ら由來有り」と。今、人の君を伐ち、人に略はしむるに利を以てす。眞に、懷に處き物を期する。自ら由來有る者と謂ふ可けんや。劉藩、閩閩の門に死し、(一二)諸葛、左右の手に斃れ、(一三)甘言、方伯を託き、之を襲ふに輕兵を以てし、遂に、

- 【五】 平西。休之、平西將軍たり、故にこれを稱す。
- 【六】 歎懷。誠實なるこころ。
- 【七】 詢仰。諮詢仰望。
- 【八】 譙王云云。事、前卷前年に見ゆ。
- 【九】 推寄。赤心を推して人の腹中に置くを謂ふなり。
- 【一〇】 之云云。左傳に見ゆ。晉の大夫里克の言。
- 【一一】 懷に處き。晉書宗室傳には「懷を虚しうし」に作る。是なるに似たり。下同じ。
- 【一二】 劉藩の事、前卷八年に見ゆ。
- 【一三】 諸葛の事、九年に見ゆ。
- 【一四】 甘言云云。劉毅を襲ふにいふ。事、前卷八年に見ゆ。

闔外に自ら信するの諸侯無からしめ、是を以て算を得たりと爲す。良に恥づ可きなり。貴府の將佐及び朝廷の賢徳、命を寄せ日を過す。吾誠に鄙劣なれども、嘗て道を君子に聞けり。平西の至徳を以て、寧ぞ命を授くるの臣無かる可けんや。必ず未だ自ら虎口に投じ、迹を(一五)郗僧施の徒に比する能はざることを、明かなり。假令天、喪亂を長じ、(一六)九流渾濁せば、當に(一七)臧洪と與に、地下に遊ぶべし。復た多言せず」と、裕書を視て歎息し、以て將佐に示して曰はく、「人に事ふるは、當に此の如くなるべし」と。延之、裕の父名は翹字は顯宗なるを以て、乃ち其の字を更へて顯宗と曰ひ、其の子に名づけて翹と曰ひ、以て劉氏に臣たらざるを示す。

- 【一五】 郗僧施の事、前卷八年に見ゆ。
- 【一六】 九流。九つの學派の意。即ち儒家者流、道家者流、法家者流、陰陽家者流、名家者流、墨家者流、從橫家者流、雜家者流、農家者流。九流渾濁すとは、道德學藝の壞亂するをいふ。
- 【一七】 臧洪の事、六十卷漢の獻帝興平二年に見ゆ。
- 【一八】 三連。今の湖北省襄陽道京山縣か。
- 【一九】 江夏口。今の湖北省荊南道公安縣に在り。

瑯邪の太守劉朗、二千餘家を帥ゐて魏に降る。庚子、河西の胡劉雲等、數萬戸を帥ゐて魏に降る。太尉裕、參軍檀道濟・朱超石をして、歩騎を將ゐて、襄陽に出でしむ。超石は齡石の弟なり。江夏の太守劉虔之、兵を將ゐて(二〇)三連に屯す。橋を立て糧を聚め、以て道濟等を待つ。積日、至らず。魯軌、襲うて虔之を撃ち、之を殺す。裕、其の婿振威將軍東海の徐達之をして、參軍蒯恩・王允之・沈淵子を統べて前鋒と爲り、江夏口に出でしむ。達之



等、魯軌と破冢に戦ふ。兵敗れ、遠之允之淵子、皆死す。獨り蒯恩のみ、兵を勸して動かす。軌、勝に乗じて之を力攻す。克つ能はず。乃ち退く。淵子は林子の兄なり。裕、馬頭に軍す。遠之死せりと聞き、怒ること甚だし。三月壬午、諸將を帥て江を濟る。魯軌、司馬文思、休之の兵四萬を將りて、峭岸に臨みて陳を置く。軍士、能く登る者無し。裕、自ら甲を被り、登らんと欲す。諸將諫むれども、従はず。怒ること愈甚だし。太尉主簿謝晦、前みて裕を抱持す。裕、劍を抜き晦を指して曰はく、『我、卿を斬らん』と。晦曰はく、『天下、晦無かる可し、公無かる可からず』と。建武將軍胡藩、遊兵を領して江津に在り。裕、藩を呼んで、登らしむ。藩、疑色有り。裕、左右に命じて、録め來らしめ、之を斬らんと欲す。藩顧みて曰はく、『正に賊を撃たんと欲す。教を奉ずることを得ず』と。乃ち刀頭を以て岸を穿ち、劣に足指を容れ、之に騰りて上る。之に隨ふ者稍く多し。既に岸に登り、直ちに前みて力戦す。休之の兵、當る能はず、稍く引き却く。裕の兵、因りて之に乗ず。休之の兵大に潰ゆ。遂に江陵に克つ。休之、宗之、俱に北げ走る。軌、石城に留まる。裕、閬中侯下邳の趙倫之、太尉の參軍沈林子に命じて之を攻めしめ、武陵の内史王鎮惡を遣はし、舟師を以て休之等を追はしむ。羣盜數百有り。夜、冶亭を襲ふ。京師震駭す。劉鍾討ちて之を平ぐ。

秦の廣平公弼、姚宣を秦王興に請す。宣の司馬權丕、長安に至る。興、

【一】馬頭。大江の南に在り。北は江陵の江津成に對す。

【二】此れ裕が所謂晦は頗る機變を識る者なり。

【三】錄。收むるなり。

【四】姚宣云云。去年、宣、入

責むるに輔導する能はざるを以てし、將に之を誅せんとす。丕懼れ、宣の罪惡を誣ひ、以て自ら免かるるを求む。興怒り、使を遣はして、杏城に就き、宣を收へて獄に下さしめ、弼に命じて、三萬人を將りて秦州に鎮せしむ。尹昭曰はく、『廣平公、皇太子と平かならず。今、疆兵を外に握る。陛下、一旦、不諱ならば、社稷必ず危からん。』小を忍びざれば大謀を亂るとは、陛下の謂なり』と。興従はず。

夏王勃勃、秦の杏城を攻め、之を抜き、守將姚達を執へ、士卒二萬人を阮にす。秦王興、北地に如く。廣平公弼及び輔國將軍斂曼鬼を遣はして新平に向はしむ。興、長安に還る。

朝して、弼の罪を力言せり。故に弼これを銜みて誣せしなり。

【二】小を忍びざれば大謀を亂る。論語衛靈公篇に見ゆ。孔子の言。

【三】勒姐嶺。今の甘肅省西寧道西寧縣に在り。

【四】順宰が兵を起す事、前卷二年に見ゆ。

河西王蒙遜、西秦の廣武郡を攻め、之を抜き。西秦王熾磐、將軍乞伏魁尼寅を遣はし、蒙遜を浩亶に邀へしむ。蒙遜、擊ちて之を斬る。又、將軍折斐等を遣はし、騎一萬を帥る。勒姐嶺に據らしむ。蒙遜、擊ちて之を禽にす。

河西の饑胡、上黨に相聚まり、胡人白亞栗斯を推して單于と爲し、建平と改元し、司馬順宰を以て謀主と爲し、魏の河内に寇す。夏四月、魏主嗣、公孫表等五將に命じて之を討たしむ。青冀二州の刺史劉敬宣の參軍司馬道賜は、宗室の疏屬なり。太尉裕が司馬休之を攻むるを聞き、道



賜、〔三七〕同府辟閻道秀・左右の小將王猛子と與に、敬宣を殺し・廣固に據り・以て休之に應せんと謀る。乙卯、敬宣、道秀を召し、人を屏けて語る。左右悉く戸より出づ。猛子・遂巡して後に在り、敬宣の備身刀を取り、敬宣を殺す。文武の佐吏、即時に道賜等を討ち、皆、之を斬る。

己卯、魏主嗣、北巡す。

西秦王熾磐の子、元基、長安より逃げ歸る。熾磐、以て尙書左僕射と爲す。

五月丁亥、魏主嗣、大甯に如く。

趙倫之・沈休之、魯軌を石城に破る。司馬休之・魯宗之、之を救へども及ばず。遂に軌と與に襄陽に奔る。宗之の參軍李應之、門を閉ちて・納れず。

甲午、休之・宗之・軌及び譙王文思、〔三〇〕新蔡王道賜・梁州の刺史馬敬・南陽の太守魯範、俱に秦に奔る。宗之、素より士民の心を得たり、争うて之が衛

送を爲して境を出づ。王鎮惡等、之を追ひ、境を盡して還る。初め休之等、救を秦・魏に求む。秦の征虜將軍姚成王及び司馬國璠、兵を引きて南陽に至る。魏の長孫嵩、河東に至り、休之等敗れぬと聞き、皆引き還る。休之、長安に至る。秦王興、以て揚州の刺史と爲し、襄陽を侵擾せしむ。侍御史唐盛、興に言つて曰はく、『符讖の文に據るに、司馬氏、當に復た河洛を得べし。今、休之をして兵を

〔三七〕 同府。道賜、道秀と與に、敬宣の僚屬たり。故に同府と曰ふ。

〔三〇〕 備身刀。護身刀。元基。蓋し熾磐が秦に入りて以て朝するに従ひ、因つて長安に留まりしならん。

〔三一〕 此れ又、一の司馬道賜なり。新蔡王是、武陵王暉の事を以て廢せらる。後、道賜を以て爵を襲がしむ。

外に擅にせしむるは、猶ほ魚を淵に縱つがごとし。如か乎高爵厚禮を以て之を京師に留めんには一と。興曰はく、『昔、文王、卒に〔三一〕姜里を免れ、高祖、〔三二〕鴻門に斃れず。苟くも天命の在る所は、誰か能く之に違はん。脱し符讖の言の如くんば、之を留むるは、適害を爲すに足らん』と。遂に之を遣る。

詔して、太尉裕に太傅・揚州の牧を加へ、劍履して殿に上り、入朝して趨らず、贊拜するに名いはざらしむ。兖青二州の刺史劉道憐を以て、都督荆湘益秦寧梁雍七州諸軍事・驃騎將軍・荊州の刺史と爲す。道憐、貪鄙にして才能無し。裕、中軍の長史晉陵の太守謝方明を以て、驃騎の長史・南郡の相と爲す。道憐の府中の衆事、皆、決を方明に諮ふ。方明は、〔三三〕冲の子なり。

益州の刺史朱齡石、使を遣はして河西王蒙遜に詣らしめ、諭すに朝廷の威徳を以てす。蒙遜、舍人黃迅を遣はして齡石に詣らしめ、且つ上表して言はく、『伏して聞く、車騎將軍裕、中原を清めんと欲すと。願はくは右翼と爲り、戎虜を驅除せん』と。夏王勃勃、御史中丞烏洛孤を遣はし、蒙遜と盟を結ぶ。蒙遜、其の弟湟河の太守漢平を遣はし、蒞みて夏に盟はしむ。

西秦王熾磐、衆三萬を率ゐて湟河を襲ふ。沮渠漢平、之を拒ぎ、司馬隗仁を遣はし、夜出でて熾磐

〔三一〕 姜里。殷紂、周の文王を姜里に囚ふ。既にしてこれを釋せり。

〔三二〕 鴻門。九卷漢の高祖元年に見ゆ。

〔三三〕 謝冲は奕の從子。方明は裕の從兄弟なり。



を撃たしめ、之を破る。熾磐將に引き去らんとす。漢平の長史焦昶・將軍段景、潜に熾磐を召す。熾磐復た之を攻む。昶・景因つて漢平に説きて出で降らしむ。仁、壯士百餘を勸して、南門樓に據る。三日、下らず。力屈し、熾磐に禽へらる。熾磐、之を斬らんと欲す。散騎常侍 武威の段暉諫めて曰はく、「仁、難に臨みて、死を畏れず、忠臣なり。宜しく之を宥して以て君に事ふるを厲ますべし」と。乃ち之を囚ふ。熾磐、左衛將軍匹達を以て湟河の太守と爲し、乙弗窟乾を撃ち、其の三千餘戸を降して歸る。尙書右僕射出連虔を以て都督 嶺北諸軍事・涼州の刺史と爲し、涼州の刺史謙屯を以て、鎮軍大將軍・河州の牧と爲す。隗仁、西秦に在ること五年。段暉、又、之が爲めに請ふ。熾磐、之を免し、姑臧に還らしむ。

戊午、魏主嗣、行きて濡源に如く。遂に上谷・涿鹿・廣甯に至る。

秋七月癸未、平城に還る。

西秦王熾磐、秦州の刺史曇達を以て尙書令と爲し、光祿勳王松壽を秦州の刺史と爲す。

辛亥晦、日、之を食する有り。

八月甲子、太尉裕、建康に還る。太傅・州牧を固辭し、其餘は命を受く。豫章公の世子義符を以て兗州の刺史と爲す。

丁未、謝裕・卒す。劉穆之を以て左僕射と爲す。

九月己亥、大赦す。

魏、比歲霜旱し、雲・代の民、多く饑死す。太史令王亮・蘇坦、魏主

嗣に言つて曰はく、「讖書を案ずるに、魏、當に鄴に都すべし。豐樂なるを得可し」と。嗣、以て羣臣に問ふ。博士祭酒崔浩・特進京兆の周澹曰はく、「都を鄴に遷すは、以て今年の饑を救ふ可きも、久長の計に非ざるなり。

山東の人、國家の 廣漢の地に居るを以て、其の民畜渥り無しと謂ひ、號して牛毛の衆と曰ふ。今、兵を留めて 舊都を守り、家を分ちて南に徙らば、諸州の地に滿つる能はず。郡縣に參居し、情見え事露れ、恐らくは四方皆輕侮の心有らん。且つ百姓、便ならず、水土疾疫、死傷する者必ず多からん。又、舊都の守兵既に少くば、屈丐・柔然、將に窺竄の必有らんとす。國を擧げて來らば、雲中・平城必ず危からん。朝廷、恒代千里の險を隔て、以て赴き救ひ難し。此れ則ち 聲實俱に損するなり。今、北方に居れば、假令山東に變有りとも、我が輕騎南下し、林薄の間に 布護せんに、孰か能く其の多少を知らん。百姓、塵を望みて懾服せん。此れ國家の 諸夏を威制する所以なり。來春草生じ、 渾酪將に出でんとし、兼ぬるに菜果を以てす。

【三六】 比歲。連年。

【三七】 雲代。雲中・代郡の地。

【三八】 廣漢。北史の崔浩の傳に「廣漢に作る。當にこれに従ふべし。廣漢は廣大なり。」

【三九】 舊都。平城を謂ふ。

【四〇】 恒代千里の險。恒山より代に至るまでに、飛狐の口・倒馬の關・夏屋・黃昌・五廻の險有り。

【四一】 聲實。名と實と。

【四二】 薄。草の叢生するを薄といふ。

【四三】 布護。猶ほ布露といふがことし。流散なり。

【四四】 渾酪。渾は乳汁なり、こにては馬乳をいふ。渾酪は乳をかためたるもの。



秋熟に及ぶを得ば、則ち事濟らん」と。嗣曰はく、「今、倉廩空しく竭き、既に以て來秋を待つ無し。若し來秋又饑るば、將に之を若何せんとする」と。對へて曰はく、「宜しく饑貧の戸を簡び、食に山東に就かしむべし。若し來秋復た饑るば、當に更に之を圖るべし。但だ、方今、都を遷す可からざるのみ」と。嗣悦びて曰はく、「唯だ二人、朕が意と同じ」と。乃ち國人の尤も貧しき者を簡び、山東の三州に詣りて食に就かしむ。左部尙書代の人周幾を遣はし、衆を帥ゐて魯口に鎮せしめ、以て之を安集す。嗣躬づから籍田を耕し、且つ有司に命じて、農桑を勸課せしむ。

【四三】 山東の三州。定、相、冀。

【四六】 魏初め四方四維に八部大人を置き、東西南北左右前後を分ち、後、又、八部尙書を置く。

【四七】 龍尾堡。今の陝西省關中道岐山縣に在り。

【四八】 藥動く。藥の中毒なり。

夏の赫連建、兵を將ゐて秦を撃ち、平涼の太守姚軍都を執へ、遂に新平に入る。廣平公弼、與に龍尾堡に戰ひ、之を禽にす。秦王興、藥動く。廣平公弼、疾と稱して、朝せず、兵を第に聚む。興、之を聞きて怒り、弼の黨唐盛・孫玄等を收へ、之を殺す。太子泓請うて曰はく、「臣不肖にして、兄弟を糾諧する能はずして、此に至らしむ。皆臣の罪なり。若し臣死して國家安からば、願はくは臣に死を賜へ。若し陛下、臣を殺すに忍びずんば、乞ふ退きて藩に就かん」と。興、惻然として之を憫む。姚讚・梁喜・尹昭・斂曼鬼を召し、之と與に謀り、弼を囚へ、將に之を殺さんとし、黨興を窮治す。泓、流涕して固く請ふ。乃ち其の黨を并せて之を赦す。泓、弼を待つこと初

めの如く、忿恨の色無し。

魏の太史、奏すらく、「熒惑、匏瓜の中に在り。忽ち亡れて、在る所を知らず。法に於て、當に危亡の國に入るべし。先づ童謠・妖言を爲し、然る後、其の禍罰を行はん」と。魏主嗣、名儒十餘人を召し、太史と與に熒惑の詣る所を議せしむ。崔浩對へて曰はく、「春秋左氏傳を按ずるに、神、辛に降る。其の至るの日を以て、其の物を推知す。庚午の夕、辛未の朝、天に陰雲有りき。熒惑の亡れしは、當に二日に在るべし。庚と午とは、皆秦を主とる。辛は西夷と爲す。今、姚興、長安に據る。熒惑必ず秦に入りしならん」と。衆皆怒りて曰はく、「天上の失星、人間安んぞ詣る所を知らん」と。浩笑つて應へず。後八十餘日にして、熒惑、東井に出で、留まり守りて、句己し、之を久しうして乃ち去る。秦大に旱し、昆明池竭く。童謠・詛言し、國人、安んぜず。一歳を間てて秦亡ぶ。衆乃ち浩の精妙に服す。

冬十月壬子、秦王興、散騎常侍姚敞等をして、其の女西平公主を魏に送らしむ。魏主嗣、後の禮を以て之を納る。金人を鑄たれども成らず。乃

【四九】 匏瓜。星座の名。

【五〇】 法。推占の法を謂ふ。

【五一】 春秋左氏傳云云。浩は蓋し春秋左氏傳に因るならん。外傳に曰く、周の惠王十五年、神有り辛に降る。王、内史過に問ふ。對へて曰はく、其れ丹朱ならんかと。王曰はく、其れ誰か之を受けんと。對へて曰はく、魏の土に在らんと。王曰はく、魏は其れ幾何ぞと。對へて曰はく、昔、堯、民に臨むに五を以てす。若し是に由りて之を觀るときは、五年に過ぎざらんと。十九年、晉、魏を取らんと。

【五二】 辛。庚辛は西方なり。故に西夷と爲す。

【五三】 句己。去つて復た來るなり。環繞して行くこと鉤の如く、



ち以て夫人と爲す。而して寵遇甚だ厚し。

辛酉、魏主嗣、沮洳城に如く。癸亥、平城に還る。十一月丁亥、復た豺山宮に如く。庚子、還る。

西秦王熾磐、襄武侯曇達等を遣はし、騎一萬を將ゐて、南羌の彌姐康薄を赤水に擊ち、之を降す。王孟保を以て略陽の太守と爲し、赤水に鎮せしむ。

燕の尙書令孫護の弟伯仁、昌黎の尹と爲る。其の弟叱支乙拔と、皆、才勇有り、燕王跋が兵を起すに從ひ、功有り、開府を求めたれども得ず、怨言有り。跋、皆、之を殺す。護を開府儀同三司・錄尙書事に進め、以て其の心を慰む。護、怏怏として悦ばず。跋、之を酖殺す。遼東の太守務銀提、自ら以へらく、功有りと。出でて邊郡と爲り、怨望し、外叛を謀る。跋、亦、之を殺す。

林邑、交州に寇す。州將、擊ちて之を敗る。

十二年、泰正月、甲申、魏主嗣、豺山宮に如く。戊子、平城に還る。

太尉裕に兖州の刺史・都督南秦州を加へ、凡て二十二州を都督せしむ。世子義符を以て豫州の刺史と爲す。

秦王興、魯宗之をして兵を將ゐて襄陽に寇せしむ。未だ至らずして卒す。其の子軌、兵を引ゐて入寇す。雍州の刺史趙倫之、擊ちて之を敗る。

西秦王熾磐、秦の洮陽公彭利和を洮川に攻む。沮渠蒙遜、石泉を攻め、以て之を救ふ。熾磐、沓中に至り、引き還る。二月、熾磐、襄武侯曇達を遣はして石泉を救ふ。蒙遜も亦引き去る。蒙遜遂に熾磐と和親を結ぶ。

秦王興、華陰に如き、太子泓をして國を監し、入りて西宮に居らしむ。興、疾篤く。長安に還る。黃門侍郎尹冲、泓が出で迎ふるに因りて之を殺さんと謀る。興至る。泓將に出で迎へんとす。宮臣諫めて曰はく、「主上、疾篤く、姦臣、側に在り。殿下、今出では、進みては主上に見ゆるを得ず、退きては不測の禍有らん」と。泓曰はく、「臣子、君父の疾篤きを聞き、而も端居して出でずんば、何を以てか自ら安んせん」と。對へて曰はく、「身を全くして以て社稷を安んずるは、孝の大なる者なり」と。泓乃ち止む。尙書姚沙彌、尹冲に謂つて曰はく、「太子、出で迎へず。宜しく乘輿を奉じて廣平公の第

又、己の字を成すをいふ。句は鉤と通ず。

【五四】 金人云。魏、嗣を立て后を立てるに、皆、金人を鑄て以てこれを卜す。

【五五】 沮洳城。沮洳は下濕の地なり。此城、下濕の地に在るを以て此の名あるならん。

【五六】 赤水。今の甘肅省蘭山道隴西縣にあり。

【五七】 兵を起す。慕容熙を殺す時を謂ふ。事、一百十四卷三年に見ゆ。

【一】 二十二州。徐、南徐、豫、南豫、兖、南兖、青、冀、幽、并、司、鄆、荆、江、湘、雍、梁、益、寧、交、廣、南秦なり。

【二】 熾磐が秃髮氏を滅ぼししより、蒙遜と鄰敵と爲り、歳歳兵を交ふ。今乃ち和を結ぶ。

【三】 西宮。太子、東宮に居る。西宮は秦王の居る所なり。

【四】 宮臣。凡そ東宮の官屬は、皆、宮臣と曰ふ。

【五】 姦臣。尹冲等をいふ。



に幸すべし。宿衛の將士、乘輿の在る所を聞かば、自ら當に來り集まるべし。太子、誰と與に守らんや。且つ吾が屬、廣平公の故を以て、已に名を逆節に陷る。將に何の所にか自ら容れんとす。今、乘輿を奉じて以て事を擧げ、乃ち大順に杖らば、惟だ廣平の禍を救ふのみならず、吾が屬の前罪、亦盡く雪がんと。冲、輿の死生未だ知る可からざるを以て、輿に隨つて宮に入り亂を作さんと欲し、沙彌の言を用ひず。輿、宮に入り、太子泓に命じて、尙書の事を録せしめ、東平公、紹及び右衛將軍胡翼度をして、兵を禁中に典り、内外を防制せしめ、殿中上將軍斂曼鬼を遣はし、弼の第中の甲仗に收め、之を武庫に内る。輿、疾轉た篤し。其の妹、南安長公主、疾を問ふ。應へず。幼子耕兒、出でて其の兄南陽公愔に告げて曰はく、「上已に崩せり。宜しく速かに計を決すべし」と。愔即ち尹冲と與に、甲士を帥りて端門を攻む。斂曼鬼、胡翼度等、兵を勸し、門を閉ぢて拒ぎ戰ふ。愔等、壯士を遣はして門に登り、屋に緣りて入らしむ。馬道に及ぶ。泓、疾に侍し、諮議堂に在り。太子の右衛率姚和都、東宮の兵を率ゐ、入りて馬道の南に屯す。愔等、進むを得ず。遂に端門を燒く。輿、疾を力めて前殿に臨み、弼に死を賜ふ。禁兵、輿を見て、喜躍し、争ひ進みて賊に赴く。賊衆驚き擾る。和都、東宮の兵を以て、後より之を撃つ。愔、大に敗る。愔、驪山に逃る。其の黨建康公呂隆、雍に奔る。尹冲及び弟、泓、來奔す。輿、東平公紹及び姚讚、梁喜、尹昭、斂曼鬼を引

【六】 紹、輿の弟なり。

【七】 殿中上將軍。晉、殿中將軍を置く。姚秦、復た殿中上將軍有り。殿中の諸主帥を統ぶ。

きて内寢に入り、遺詔を受けて、政を輔けしむ。明日、輿卒す。泓、秘して、喪を發せず。南陽公愔及び呂隆、大將軍尹元等を捕へ、皆之を誅す。乃ち喪を發し、皇帝の位に即く。大赦し、永和と改元す。泓、齊公恢に命じて、安定の太守呂超を殺さしむ。恢、猶豫すること之を久しうして、乃ち之を殺す。泓、恢が貳心有るを疑ふ。恢、是に由りて懼れ、陰に兵を聚め、亂を作さんと謀る。泓、輿を偶陵に葬る。諡して文桓皇帝と曰ひ、廟を高祖と號す。初め輿、李閔、羌三千戸を安定に徙す。輿卒するや、羌會党容・叛す。泓、撫軍將軍姚讚を遣はし、討ちて之を降す。其の會豪を長安に徙し、餘は李閔に遣り還す。北地の太守毛雍、趙氏塢に據りて以て叛く。東平公紹、討ちて之を禽にす。時に姚宣、李閔に鎮す。參軍韋宗、毛雍叛せりと聞き、宣に説きて曰はく、「主上新に立ち、威徳未だ著れず。國家の難、未だ量る可からざるなり。殿下、深慮を爲さざる可からず。刑望は險要なり。宜しく徙りて之に據るべし。此れ霸王の資なり」と。

【八】 輿卒す。年五十一。

【九】 泓、字は元子、輿の長子なり。

【一〇】 隆、超は兄弟なり、皆、弱に黨す。齊公恢、時に安定に鎮す。

【一一】 趙氏塢。今の陝西省關中道鞏縣に在り。孝武の太元九年、秦王堅、後秦を撃ち、屯する所の地。

【一二】 刑望。今の陝西省關中道大荔縣に在り。

宣、之に従ふ。戸三萬八千を帥る、李閔を棄て、南して刑望に保す。諸羌、東平公紹、進み討ちて之を破る。宣、紹に詣りて罪に歸す。紹、之を殺す。二月、太尉裕に中外大都督を加ふ。裕、戒嚴し、將に秦を伐たんとす。詔して、裕に領司豫二州刺



史を加へ、其の世子義符を以て徐兗二州の刺史と爲す。琅邪王德文、(三)戎路を啓行し、山陵を脩敬せんと請ふ。詔して、之を許す。

夏四月壬子、魏・大赦し、秦常と改元す。

西秦の襄武侯曇達等、秦の秦州の刺史姚艾を上邽に撃ち、之を破り、其の民五千餘戸を枹罕に徙す。

五月癸巳、太尉裕に領、北雍州刺史を加ふ。

六月丁巳、魏主嗣・北巡す。

并州の胡數萬落、秦に叛きて平陽に入り、匈奴の曹弘を推して大單于と爲し、立義將軍姚成都を匈奴堡に攻む。征東將軍姚懿、蒲坂より之を討ち、弘を執へて長安に送り、其の豪右萬五千落を雍州に徙す。

氏王楊盛、秦の祁山を攻め、之を抜き、進みて秦州に逼る。秦の後將軍姚平、之を救ふ。盛、兵を引き退く。平、上邽の守將姚嵩と與に、之を追ふ。夏王勃勃、騎四萬を帥ゐて上邽を襲ふ。未だ至らざるに、嵩、盛と竹嶺に戦ひ、敗れて死す。勃勃、上邽を攻む。二旬にして之に克ち、秦州の刺史姚軍都及び將士五千餘人を殺し、因つて其の城を毀り、進みて陰密

を攻む。又秦の將姚・良子及び將士萬餘人を殺し、其の子昌を以て雍州の刺史と爲し、陰密に鎮せしむ。征北將軍姚恢、安定を棄て、奔りて長安に還る。安定の人胡儼等、戸五萬を帥ゐ、城に據りて夏に降る。勃勃、鎮東將軍羊苟兒をして、鮮卑五千を將ゐて、安定に鎮せしめ、進みて秦の鎮西將軍姚謙を雍城に攻む。謙、鎮を委て長安に奔る。勃勃、雍に據り、進みて郿城を掠む。秦の東平公紹及び征虜將軍尹昭等、步騎五萬を將ゐて、之を撃つ。勃勃退きて安定に趨る。胡儼、門を閉ぢて之を拒ぎ、羊苟兒及び將ゐる所の鮮卑を殺し、復た安定を以て秦に降る。紹進みて勃勃を馬鞍阪に撃ち、之を破り、追うて朝那に至り、及ばずして還る。勃勃、杏城に歸る。楊盛復た兄の子倦を遣はして秦を撃たしむ。陳倉に至る。秦の斂曼嵬、撃ちて之を却く。夏王勃勃、復た兄の子提を遣はし、南して泄陽を侵さしむ。秦の車騎將軍姚裕等、撃ちて之を却く。

涼の司馬索承明・上書し、涼公暲に、河西王蒙遜を伐たんことを勸む。暲、引見して之に謂つて曰はく、「蒙遜、百姓の患を爲すこと、孤豈に之を忘れんや。勢力未だ除く能はざるを願ふのみ。卿、必ず禽にするの策有らば、當に孤の爲めに之を陳ぶべし。直だ大言を唱へて、孤をして東討せしむるは、此れ石虎は小豎なり。宜しく諸を市朝に肆すべし」と言ふ者と何ぞ異ならんや」と。承明慙ち懼れて退く。

【三】戎路。大なる事。王者の事をいふ。

【四】啓行。出發すること。

【五】北雍州。晉初め雍州を長安に置く、永嘉の亂、劉石に没す。苻秦の亂、雍州の流民、南して樊沔に出づ。孝武、始めて襄陽に於て雍州を僑立す。

今、裕、長安を取らんと欲す。故に北雍州の刺史を領す。襄陽の雍州とは別なり。

【六】曹弘。匈奴の右賢王曹叡の子寅の孫。

【七】匈奴堡。匈奴の種落相率ゐて保聚するの地、因つて以て名と爲す。今の山西省河東道臨汾縣に在り。

【八】秦の雍州は安定に治す。

【九】竹嶺。今の甘肅省渭川道天水縣の西南に在り。

【一〇】陰密。今の陝西省涇原道靈臺縣。

【一】馬鞍阪。今の甘肅省涇原道涇川縣に在り。

【二】泄陽。晉書載記には、池陽に作る。當にこれに従ふべし。今の陝西省關中道三原縣。

【三】石虎。石勒の從子。



秋七月、魏主嗣、大に牛川に獵し、殷繁水に臨みて還る。戊戌、平城に至る。

八月丙午、大赦す。

寧州、琥珀枕を太尉裕に獻す。裕、琥珀は金創を治するを以て、之を得て大に喜び、命じて碎擣し、北征の將士に分賜す。裕、世子義符を以て中軍將軍と爲し、太尉の留府の事を監せしむ。劉穆之を左僕射と爲し、監軍・中軍二府の軍司を領し、入りて東府に居り、内外を總攝せしむ。太尉の左司馬東海の徐羨之を以て、穆之の副と爲し、左將軍朱齡石をして殿省を守衛し、徐州の刺史劉懷慎をして、京師を守衛せしめ、揚州の別駕從事史張裕を、留州事に任す。懷慎は懷敬の弟なり。劉穆之、内は朝政を總べ、外は軍旅に供し、決斷、流るるが如く、事、擁滞無し。賓客輻湊し、求訴すること百端、内外の諮稟、階に盈ち室に滿つ。目に辭訟を覽、手に牋書に答へ、耳に聽受を行ひ、口竝に酬應し、相參涉せず、悉く皆瞻舉す。又、賓客を喜み、言談賞笑し、日を彌りて倦む無し。裁に閒暇有れば、手自ら書を寫し、尋覽校定す。性奢豪にして、食は必ず方丈、且に輒ち十人の饌を爲り、未だ嘗て獨り餐はず。嘗て裕に白して曰はく、「穆之は、家、本、貧賤にして、

- 【一】 殷繁水、今の直隸省口北道懷來縣の北に在り。
- 【二】 碎擣。つきくだく。
- 【三】 監軍。義符が太尉の留府の事を監するを謂ふ。
- 【四】 留州事に任す。揚州の留後の事に任する也。
- 【五】 擁滞。壅滞。ふさがりとどこぼること。
- 【六】 諮稟。諮詢稟申。
- 【七】 相參涉せず。混雜せざる也。
- 【八】 瞻舉。瞻は足る也。十分に事を處置するをいふ。
- 【九】 方丈。孟子の所謂食前方丈なり。珍珠佳肴を列ぬること一丈四方。
- 【一〇】 瞻生。生活をたらす物なり。即ち衣食住等をいふ。
- 【一一】 約損。簡約損減。
- 【一二】 尊業。劉裕が已成の功業をいふ。
- 【一三】 鉅野。澤の名、今の山東省濟寧道鉅野縣の北に在り。
- 【一四】 掩討。敵の不意を討つこと。
- 【一五】 軍首たり。秦を伐つ諸軍の首たるをいふ。

く闕けたり。叨りに忝うしてより以來、毎に約損を存すと雖も、而も朝夕の須ふる所、微しく過豊と爲す。此より外、一毫も、以て公に負かず」と。中軍の諮議參軍張邵、裕に言つて曰はく、「人生は危脆なり。必ず當に遠く慮るべし。穆之、若し不幸に邂逅せば、誰か之に代る可き。尊業此の如し。苟くも不諱有らば、處分せんこと云何」と。裕曰はく、「此れ自ら穆之及び卿に委ねんのみ」と。丁巳、裕、建康を發す。龍驤將軍王鎮惡・冠軍將軍檀道濟を遣はし、歩軍を將ゐて、淮淝より許洛に向はしめ、新野の太守朱超石・寧朔將軍胡藩をして陽城に趨かしめ、振武將軍沈田子・建威將軍傅弘之をして武關に趨かしめ、建武將軍沈林子・彭城の内史劉遵考をして、水軍を將ゐて石門に出で、汴より河に入らしめ、冀州の刺史王仲德を以て前鋒の諸軍を督し、鉅野を開きて河に入らしむ。遵考は裕の族弟なり。劉穆之、王鎮惡に謂つて曰はく、「公、今、卿に委ぬるに秦を伐つのを以てす。卿其れ之を勉めよ」と。鎮惡曰はく、「吾、關中に克たずんば、誓つて復た江を濟らじ」と。裕既に行く。青州の刺史檀祗、廣陵より、輒ち衆を率ゐて途中に至り、亡命を掩討す。劉穆之、祗が變を爲さんことを恐れ、議して、軍を遣らんと欲す。時に檀韶、江州の刺史たり。張邵曰はく、「今、韶、中流に據り、道濟、軍首た



り。若し相疑ふの跡有らば、則ち大府立ちどころに危からん。逆め遣はして慰勞し以て其の意を觀るに如かず。必ず患無からん」と。穆之乃ち止む。

初め魏主嗣、公孫表をして白亞栗斯を討たしめて曰はく、「必ず先づ秦の洛陽の成將と相聞し、河の南岸に備へしめ、然る後之を撃て」と。表未だ至らざるに、胡人、白亞栗斯を廢し、更に劉虎を立てて率善王と爲せり。表以へらく胡人内自ら攜貳す、勢必ず敗散せんと。遂に秦將に告げずして之を撃つ。大に虎に敗られ、士卒死傷すること甚だ衆し。嗣、羣臣に謀りて曰はく、「胡叛きて年を踰え、之を討ちて克たず。其の衆繁多にして、患を爲すこと日に深からん。今、盛秋なり。復た兵を發して民の農務を妨ぐ可からず。將に之を若何せん」と。白馬侯崔宏曰はく、「胡の衆、多しと雖も、健將の之を御するもの無し。終に大患を成す能はざらん。表等の諸軍、足らずと爲さず、但だ法令整はず、處分宜しきを失し、以て敗を致せるのみ。大將の素より威望有る者を得、數百騎を將ゐ、往きて表の軍を攝せば、克たざる無からん。相州の刺史叔孫建、前に并州に在り、胡魏の畏服する所と爲り、諸將、及ぶもの莫し。遣はす可きなり」と。嗣、之に従ひ、建を以て中領軍と爲し、表等を督して虎を討たしむ。九月戊午、大に之を破る。斬首萬餘級。虎及び司馬順宰、皆、死す。其の衆十萬餘口を俘にす。

【三五】大府。太尉の留府を謂ふ。其の實は建康をさす。  
【四〇】公孫表をして云云。前年に見ゆ。

太尉裕、彭城に至る。領徐州刺史を加へらる。太原王玄謨を以て從事史と爲す。初め王廩の敗るるや、沙門曇永、其の幼子華を匿し、衣襖を提げしめて自ら隨ふ。津邏、之を疑ふ。曇永、華を呵して曰はく、「奴子、何ぞ速かに行かざる」と。之を極つこと數十、是に由りて免るを得たり。赦に遇うて吳に還る。其の父の存亡測られざるを以て、布衣蔬食、交游を絶ち、仕へざること十餘年。裕、華の賢なるを聞き、之を用ひんと欲し、乃ち廩の喪を發し、華をして服を制せしむ。服闋り、辟して徐州の主簿と爲す。王鎮惡・檀道濟、秦の境に入り、向ふ所皆捷つ。秦の將王苟生、漆丘を以て鎮惡に降る。徐州の刺史姚掌、項城を以て道濟に降る。諸屯守、皆、風を望みて款附す。惟だ新蔡の太守董遵、下らず。道濟攻めて其の城を拔き、遵を執へて之を殺し、進みて許昌に克ち、秦の潁川の太守姚垣及び大將楊業を獲たり。沈林子、汴より河に入る。襄邑の人董神虎、衆千餘人を聚め、來り降る。太尉裕、板して參軍と爲す。林子、神虎と共に、倉垣を攻め、之に克つ。秦の兗州の刺史韋華降る。神虎擅に襄邑に還る。林子、之を殺す。秦の東平公紹、秦主泓に言つて曰はく、「晉の兵、已に許昌を過ぎ、安定孤遠にして、以て救衛し難し。宜しく其の

【四一】從事史。徐州の從事史。裕、徐州を領し、玄謨を以て徐州の從事史と爲せるなり。  
【四二】王廩の敗。一百九卷隆安元年に見ゆ。  
【四三】衣襖。きものを包む風呂敷。  
【四四】津邏。渡し場の邏卒。めて以て文帝に遣る。  
【四五】漆丘。今の河南省開封道商邱縣に在り。  
【四六】款附。まごころを致して附き従ふ。  
【四七】新蔡。郡の名、今の河南省汝陽道新蔡縣の地。

晉安皇帝義熙十二年



鎮戸を遷し、内、京畿を實すべし。精兵十萬を得可し。晉夏交、侵すと雖も、猶ほ國を亡ぼさざらん。然らずして、晉、豫州を攻め、夏、安定を攻めば、將に之を若何せんとする。事機已に至れり。宜しく速決に在るべし」と。左僕射梁喜曰はく、「齊公恢、威名有り、嶺北の憚る所と爲る。鎮人、已に勃勃と深仇なり。理、應に守死して貳無かるべし。勃勃、終に、安定を越えて遠く京畿に寇する能はじ。若し安定無くば、虜馬必ず鄆に至らん。今、關中の兵は、以て晉を拒ぐに足る。豫め自ら損削するを爲す無きなり」と。泓、之に従ふ。吏部郎懿横、密に泓に言つて曰はく、「恢は、廣平の難に於て、陛下に忠勳有り。陛下龍飛して統を紹ぎしより、未だ殊賞の以て其の意に答ふる有らず。今、外は則ち之を死地に置き、内は則ち朝權に豫らず。安定の人、自ら孤危にして寇に逼るを以て、南遷を思ふ者、十室にして九なり。若し恢、精兵數萬を擁し、鼓行して京師に向はば、社稷の累と爲らざるを得んや。宜しく徵して朝廷に還し、以て其の心を慰むべし」と。泓曰はく、「恢若し不逞の心を懷かば、之を徵するは、適、禍を速かにする所以なるのみ」と。又、從はず。王仲德の水軍、河に入り、將に滑臺に逼らんとす。魏の兗州の刺史尉建、畏懦にして、衆を帥ぬ城を棄て、北して河を渡る。仲德、滑臺に入り、宣言して曰はく、「晉、本、布帛七萬匹を以て道を魏に假らんと欲す。謂はざりき、魏の守將、城を棄てて遷に去らん」とは」と。魏主嗣、之を聞き、叔孫建、公孫表を遣はし、河内より枋頭に向はしむ。因つて兵を引きて河を濟り、尉建を城下に斬り、戸を河に投ず。仲德の軍人を呼び、問ふに侵寇の狀を以てす。仲德、司馬竺和之をして對へて曰はしむ、「劉太尉、王征虜をして、河より洛に入り、山陵を清掃せしむるのみ。敢て魏に寇を爲すに非ざるなり。魏の守將、自ら滑臺を棄てて去れり。王征虜、空城を借りて以て兵を息む。行くゆく當に西引すべし。晉、魏の好に於て廢すること無きなり。何ぞ必ずしも旗を揚げ鼓を鳴らし、以て威を耀かさんや」と。嗣、建をして以て太尉裕に問はしむ。裕、遜辭して之に謝して曰はく、「洛陽は晉の舊都なり。而るに羌、之に據れり。晉、山陵を修復せんと欲すること久し。諸桓の宗族、司馬休之、國璠兄弟、魯宗之父子は、皆晉の蠹なり。而るに羌、之を收め、以て晉の患を爲せり。今、晉、將に之を伐たんとし、道を魏に假らんと欲す。敢て不利を爲すに非ざるなり」と。魏の河内の鎮將于栗磾、勇名有り、壘を河上に築き、以て「侵軼に備ふ。裕、書を以て之に與へ、題して「黑稍公麾下と曰ふ。栗磾、好みて黑稍を操り、以て自ら標す。故に裕、此を以て之に目く。魏因つて栗磾を拜して黑稍將軍と爲す。

【四九】鎮戸。姚襄の興るや、安定を以て根本と爲し、後、關中を得、安定を以て重鎮と爲し、民を徙して以てこれを實す。これを鎮戸といふ。

【五〇】鎮人云云。鎮兵、常に勃勃と決戦し、父兄弟の仇あるを謂ふ。

冬十月壬戌、魏主嗣、豺山宮に如く。

晉安皇帝義熙十二年

諸桓云云。義熙元年、桓謙等、秦に奔り、六年入寇せり。十一年、司馬休之、魯宗之等、秦に奔る。秦、兵を將ゐて襄陽を擾さしむ。六年、司馬國璠等、秦に奔る。數、衆を帥めて邊を擾す。

【五一】侵軼。なかし突く。

【五二】黑稍。くるき柄のほこ。稍は長さ一丈八尺にして、馬上に用ふるもの。



初め燕の將庫儻官斌、魏に降り、既にして復た叛きて燕に歸る。魏主嗣、驍騎將軍延普を遣はし、濡水を渡り、斌を撃ち、之を斬る。遂に燕の幽州の刺史庫儻官昌、征北將軍庫儻官提を攻め、皆、之を斬る。

秦の陽城・滎陽の二城、皆、降る。晉の兵進みて成臯に至る。秦の征南將軍陳留公洸、洛陽に鎮し、使を遣はして救を長安に求む。秦主泓、越騎校尉閻生を遣はし、騎三千を帥めて之を救はしむ。武衛將軍姚益男、步卒一萬を將めて洛陽を助守し、又、并州の牧姚懿を遣はし、南して、陝津に屯し、之が聲援を爲さしむ。寧朔將軍趙玄、洸に言つて曰はく、『今、晉寇益、深く、人情駭動し、衆寡、敵せず。若し出で戦うて、捷たずんば、則ち大事去りなん。宜しく諸戎の兵を攝め、固く金墪を守り、以て西師の救を待つべし。金墪下らずんば、晉、必ず、敢て我を越えて西せざらん。是れ我戦はずして、坐ながら其の弊を收むるなり』と。司馬姚禹、陰に檀道濟と通じ、主簿閻恢・楊虔は、皆、禹の黨なり。共に玄を嫉み、洸に言つて曰はく、『殿下、英武の略を以て、任を方面に受け、今、城に嬰りて弱を示さば、朝廷の責むる所と爲る無きを得んや』と。洸、以て然りと爲す。乃ち趙玄を遣はし、兵千餘を將め、南して、柏谷塢を守らしめ、廣武將軍石無諱をして東して鞏城に成せしむ。玄泣きて洸に謂つて曰はく、『玄、三帝の重恩を受け、守る所正に死有るのみ。但だ明公、忠臣の

【四】 陝津。今の河南省河洛道 陝縣にある黄河の渡津。  
【五】 柏谷塢。今の河南省河洛道靈寶縣に在り。  
【六】 三帝。襄・興・泓をいふ。

言を用ひずして、姦人の誤る所と爲る。後必ず之を悔いん』と。既にして成臯・虎牢、皆來り降る。檀道濟等、長驅して進む。無諱、石關に至り、犇り還る。龍驤の司馬榮陽の毛德祖、玄と柏谷に戦ふ。玄、兵敗れ、十餘創を被り、地に據りて大呼す。玄の司馬蹇鑿、刃を冒し、玄を抱きて泣く。玄曰はく、『吾が創已に重し。君宜しく速かに去るべし』と。鑿曰はく、『將軍濟はずんば、鑿去りて安にかゆ之かん』と。之と與に皆死す。姚禹、城を踰えて道濟に犇る。甲子、道濟進みて洛陽に逼る。丙寅、洸出で降る。道濟、秦人四千餘人を獲たり。議者、盡く之を阮にして以て京觀と爲さんと欲す。道濟曰はく、『罪を伐ち民を弔ふこと、正に今日に在り』と。皆釋して之を遣る。是に於て、夷夏感悅し、之に歸する者甚だ衆し。閻生・姚益男、未だ至らず、洛陽已に没すと聞き、敢て進まず。己丑、詔して、兼司空高密王恢之を遣はし、五陵を修調し、守衛を置かしむ。太尉裕、冠軍將軍毛脩之を以て、河南・河内二郡の太守と爲し、司州の事を行ひ、洛陽に成せしむ。

【七】 京觀。尸を積み土を其上に封するをいふ。  
【八】 五陵。宣帝の高原陵。景帝の峻平陵、文帝の崇陽陵、武帝の峻陽陵、惠帝の太陽陵なり。

西秦王熾磐、秦州の刺史王松壽をして馬頭に鎮せしめ、以て秦の上邽に逼る。

十一月甲戌、魏主嗣、平城に還る。太尉裕、左長史王弘を遣はして、建康に還り、朝廷に諷して、九錫を求めしむ。時に劉穆之、留任



を掌る。而して旨は北より來る。穆之、是に由りて愧ぢ懼れ、病を發す。弘は 珣の子なり。十二月壬申、詔して、裕を以て相國と爲し、百揆を總べ、揚州の牧とし、十郡に封じ、宋公と爲し、九錫の禮を備へ、位、諸侯王の上に在らしむ。征西將軍・司豫北徐雍四州の刺史を領すること、故の如し。裕、辭して・受けず。

西秦王熾磐、使を遣はし、太尉裕に詣り、秦を撃ちて以て自ら効さんことを求む。裕、熾磐を平西將軍・河南公に拜す。

秦の姚懿の司馬孫暢、懿に説きて、長安を襲ひ、東平公紹を誅し、秦王泓を廢して之に代らしめんとす。懿、以て然りと爲し、乃ち穀を散じ、以て

河北の夷夏に賜ひ、私恩を樹ゑんと欲す。左常侍張敞・侍郎左雅諫めて曰はく、『殿下、母弟を以て方面に居り、安危休戚、國と之を同じうす。今、

吳寇、内に侵し、(六〇) 四州傾没し、(六一) 西虜、邊を擾し、秦涼覆敗し、朝廷の危きこと、累卵の如き有り。穀は國の本なり。而るに殿下、故無くして之を散じ、虚しく、國儲を損

す。將に之を若何せんとする』と。懿怒りて之を答殺す。泓、之を聞き、東平公紹を召し、密に之と與に謀る。紹曰はく、『懿、性識鄙淺にして、物に従つて推移す。此の謀を造す者は、必ず孫暢ならん。但だ使を馳せて暢を徵し、撫軍將軍譚を遣はして陝城に據らしめ、臣は潼關に向つて、諸軍の節度を

【五九】 王珣始め桓温に重んぜられ、後、孝武の親任する所と爲る。

【六〇】 四州。秦の徐・兗・豫・荆の四州。

【六一】 西虜云云。赫連勃勃、上邦に克ち、沮渠蒙遜・姑臧に入るを謂ふ。

【六二】 國儲。國家の貯蓄。

爲さん。若し暢、詔を奉じて至らば、臣、當に懿を遣はし、河東の見兵を帥み、共に晉の師を禦ぐべし。若し詔命を受けずんば、便ち其の罪を聲して之を討つべし』と。泓曰はく、『叔父の言は、社稷の計なり』と。乃ち姚讚及び冠軍將軍司馬國璠・建義將軍地玄を遣はして陝津に屯し、武衛將軍姚驢をして潼關に屯せしむ。懿遂に兵を擧げて帝と稱し、檄を州郡に傳へ、匈奴堡の穀を運びて以て 鎮人に給せんと欲す。寧東將軍姚成都、之を拒ぐ。懿、辭を卑うして之を誘ひ、佩刀を送りて誓と爲す。成都、從はず。懿、驍騎將軍王國を遣はし、甲士數百を帥めて成都を攻めしむ。成都、撃ちて之を禽にし使を遣はして懿を讓めて曰はく、『明公、至親を以て重任に當り、國危きも救ふ能はず、而して更に非望を圖る。』(六四) 三祖の靈、其れ背て明公を佑けんや。成都、將に義兵を糾合し、往きて明公に河上に見えんとするのみ』と。是に於て、檄を諸城に傳へ、諭すに逆順を以てし、兵を徵し食を調し、以て懿を討つ。懿も亦、諸城の兵を發す。應ずる者有る莫し。惟だ臨晉の數千戸のみ懿に應ず。成都、兵を引きて河を濟り、臨晉の叛者を撃ち、之を破る。鎮人安定の郭純等、兵を起して懿を圍む。東平公紹、蒲阪に入り、懿を執へ、孫暢等を誅す。

【三】 鎮人。懿、蒲阪に鎮して領する所の衆なり。

【六四】 三祖。姚弋仲の廟を始祖、襄の廟を太祖、興の廟を高祖と號す。いはゆる三祖なり。

【六五】 叔孫俊、嗣の立つや、叔孫俊、功有り。事、一百一十五卷四年に見ゆ。

是の歳、魏の衛將軍安城の孝元王 叔孫俊卒す。魏主嗣、甚だ之を惜み、其の妻桓氏に謂つ



て曰はく、『生きて其の榮を同じうす。能く没して其の威を同じうせんか』と。桓氏乃ち縊れ、而して

附す。

丁零の翟猛雀、吏民を驅掠し、白澗山に入りて亂を爲す。魏の内都大官河内の張蒲、冀州の刺史

長孫道生と與に之を討つ。道生は嵩の從子なり。道生、兵を進めて猛雀を撃たんと欲す。蒲曰はく、

『吏民は、亂を爲すを樂しむに非ず、猛雀に迫脅せられしのみ。今、分別

せず、并せて之を撃たば、善に返らんと欲すと雖も、其の道、由無く、必

ず心を同じうし力を協せ、險に據りて以て官軍を拒がん。未だ猝に平げ易

からざるなり。如かず。先づ使を遣はし、之に諭すに、猛雀と謀を同じうせざる者は皆坐せざるを

以てせんには。則ち必ず喜んで離散せん』と。道生、之に従ふ。降る者數千家。舊業に復せしむ。猛

雀、其の黨百餘人と與に出で走る。蒲等追うて猛雀の首を斬る。左部尙書周幾、餘黨を窮討し、悉く

之を誅す。

【六六】 附。合葬する也。

【六七】 白澗山。今の山西省河東道陽城縣にあり。

卷の第一一十八

晉紀四十

安 皇 帝 癸

義熙十三年、春正月甲戌朔、日、之を食する有り。

秦主泓、百官を前殿に朝會す。内外危迫するを以て、君臣相泣く。征

北將軍齊公恢、安定の鎮戸三萬八千を帥る、廬舍を焚き、北雍州より長

安に趨き、自ら大都督、建義大將軍と稱し、檄を州郡に移し、君側の惡を

除かんと欲す。揚威將軍姜紀、衆を帥めて之に歸す。建節將軍彭完都、

陰密を棄て、犇りて長安に還る。恢、新支に至る。姜紀、恢に説きて曰は

く、『國家の重將・大兵は、皆、東方に在り、京師は空虚なり。公、亟かに輕

兵を引いて之を襲はば、必ず克たん』と。恢從はず。南して郿城を攻む。

鎮西將軍姚誼、恢に敗らる。長安大に震ふ。泓、使を馳せて東平公紹を徵し、姚裕及び輔國將

【一】 義熙十三年。西紀四一七年。

【二】 内外危迫。内は則ち兄弟、難を構へ、外は晉夏に迫らるるをいふ。

【三】 秦、嶺北の五郡を分ち、北雍州と爲す。安定に鎮す。

【四】 姚誼。去年、雍を棄てて東に奔り、遂に郿に屯す。



軍胡翼度を遣はして、灃西に屯せしむ。扶風の太守姚儒等、皆、恢に降る。東平公紹、諸軍を引きて西に還り、恢と靈臺に相持す。姚讚、寧朔將軍尹雅を留めて、弘農の太守と爲し、潼關を守らしめ、亦、兵を引きて還る。恢の衆、諸軍の四より集まるを見、皆、懼るる心有り。其の將齊黃等、大軍に詣りて降る。恢、兵を進めて紹に逼る。讚、後より之を撃つ。恢の兵大に敗る。恢及び其の三弟を殺す。泓、之を哭して慟す。葬るに公の禮を以てす。

太尉裕、水軍を引きて彭城を發し、其の子彭城公義隆を留めて彭城に鎮せしむ。詔して、義隆を以て監徐兗青冀四州諸軍事、徐州の刺史と爲す。

涼公暉、疾に寝ね、長史宋繇に遺命して曰はく、「吾死するの後の、世子は猶ほ卿の子のごときなり。善く之を訓導せよ」と。二月、暉卒す。官屬、世子歆を奉じて大都督・大將軍・涼公と爲し、涼州の牧を領せしむ。大赦し、嘉興と改元す。歆の母天水の尹氏を尊びて太后と爲す。宋繇を以て三府の事を録せしむ。暉に諡して武昭王と曰ひ、廟を太祖と號す。

西秦の安東將軍木奔干、吐谷渾の樹洛干を撃ち、其の弟阿柴を堯杆川に破り、五千餘口を俘にして還る。樹洛干、走りて白蘭山に保す。慙憤して疾を發す。將に卒せんとし、阿柴に謂つて曰はく、「一吾が子拾虔、幼弱なり。今、大事を以て汝に付す」と。樹洛干卒す。阿柴立ち、自ら驃騎將軍・沙州の刺史と稱し、樹洛干に諡して武王と曰ふ。阿柴、稍く兵を用ひ、其の傍の小種を侵併し、地・方數千里、遂に疆國と爲る。

河西王蒙遜、其の將を遣はして、烏啼部を襲ひ、大に之を破り、又、卑和部を撃ち、之を降す。王鎮惡、軍を澠池に進め、毛德祖を遣はして、尹雅を蠡吾城に襲ひ、之を禽にす。雅、守者を殺して逃ぐ。鎮惡、兵を引ゐて徑に前み、潼關に抵る。檀道濟・沈林子、陝北より河を渡り、襄邑堡を抜く。秦の河北の太守薛帛、河東に犇る。又、秦の并州の刺史尹昭を蒲阪に攻め、克たず。別將、匈奴堡を攻め、姚成都の敗る所と爲る。辛酉、滎陽の守將傅洪、虎牢を以て魏に降る。秦主泓、東平公紹を以て、太宰・大將軍・都督中外諸軍事と爲し、黃鉞を假し、改めて魯公に封じ、武衛將軍姚鸞等步騎五萬を督して潼關を守らしむ。又、別將姚驢を遣はし、蒲阪を救はしむ。沈林子、檀道濟に謂つて曰はく、「薄阪は、城堅く兵多し。猝に抜く可からず。之を攻めば衆を傷らん。之を守らば日を引かん。王鎮惡、潼關に在り、勢孤にして力弱し。如かじ、鎮惡と勢を合せ力を并せ、以て潼關を争はんには。若し之を得ば、尹昭は、攻めずして自ら潰えん」と。道濟、之に従ふ。三

- 【五】灃、當に灃に作るべし。今の陝西省關中道にあり。渭水に入る。
- 【六】靈臺、今の陝西省關中道長安縣に在り。
- 【七】三府、大都督大將軍府・涼公府・州牧府なり。
- 【八】堯杆川、青海の畔にあり。
- 【九】白蘭山、青海の西南に在り。

- 【一】烏啼、虜は張掖の刪丹縣（今の甘肅省甘肅道山丹縣）金山の西に居る。
- 【二】卑和、青海畔に居る羌の一族。
- 【三】蠡吾城、今の河南省河洛道澠池縣に在り。宋書王鎮惡傳には蠡城とあり。
- 【四】襄邑堡、今の山西省河東道苗城縣に在り。



月、道濟・林子、潼關に至る。秦の魯公紹、兵を引ひて出で戦ふ。道濟・林子、奮撃して、大に之を破り、斬獲、千を以て數ふ。紹退きて、定城に屯し、險に據り拒守す。諸將に謂つて曰はく、「道濟等、兵力多からず、懸軍深く入る。壁を堅くして以て繼援を待つに過ぎず。吾、軍を分ち、其の糧道を絶たば、坐ながら禽にす可きなり」と。乃ち姚鸞を遣はして、大路に屯し、以て道濟の糧道を絶たしむ。鸞、尹雅を遣はし、兵を將ひて、晉と關南に戦はしむ。(雅) 晉の兵の獲る所と爲る。將に之を殺さんとす。雅曰はく、「雅、前日已に當に死すべかりしを、幸に脱るを得て今に至れり。死は固より甘心す。然れども夷夏、殊なりと雖も、君臣の義は一なり。晉、大義を以て師を行るに、獨り秦をして守節の臣有らしめざるか」と。乃ち之を免す。丙子夜、沈林子、銳卒を將ひて、鸞の營を襲ひ、鸞を斬り、其の士卒數千人を殺す。紹、又、東平公讚を遣はして河上に屯し、以て水道を斷たしむ。沈林子、之を撃つ。讚、敗れ、走りて定城に還る。薛彤、河曲に據りて來り降る。太尉裕、水軍を將ひて、淮泗より清河に入り、將に河に、沂りて西上せんとし、先づ使を遣はして道を魏に假る。秦主泓も亦、使を遣はして救を魏に請ふ。魏主嗣、羣臣をして之を議せしむ。皆曰はく、「潼關は天險なり。劉裕、水軍を以て之を攻

【一】定城。今の陝西省關中道臨潼縣に在り。  
 【二】大路。河南の渑池より、西して關に入るに、南北の兩路あり。南路は回溪阪に由り、漢より以前は、皆、これに由る。曹操、南路の險なるを惡み、更に北路を開く。遂に北路を以て大路と爲す。  
 【三】關南。潼關の南なり。  
 【四】河曲。河水、蒲阪より南して潼關に至り、激して東流す。蒲阪と河北との間を河曲と謂ふ。

むるは、甚だ難し。若し岸に登りて北侵せば、其の勢、便易なり。裕、秦を伐つと聲言すれども、其の志、測り難し。且つ秦は、婚姻の國なり。救はざる可からざるなり。宜しく兵を發して河の上流を斷ち、西するを得しむる勿かるべし」と。博士祭酒崔浩曰はく、「裕、秦を圖ること久し。今、姚興・死し、子泓・懦弱にして、國に内難多し。裕、其の危きに乘じて之を伐つ。其の志、必ず取らんとす。若し其の上流を遏めば、裕の心忿戾し、必ず岸に上りて北侵せん。是れ我、秦に代りて敵を受くるなり。今、柔然、邊に寇し、民食又乏し。若し復た裕と敵と爲らば、兵を發して南に赴くときは、則ち北寇愈々深く、北を救ふときは、則ち南州復た危からん。良計に非ざるなり。若かず、之に水道を假し、裕の西上を聽し、然る後兵を屯して以て其の東を塞がんには、裕をして克捷せしめば、必ず我の道を假したるを徳とせん。捷たずとも、吾、秦を救ふの名を失はじ。此れ策の得たる者なり、且つ南北、俗を異にす。借ひ國家をして恒山以南を棄てしむとも、裕、必ず、吳越の兵を以て吾と河北の地を爭守する能はじ。安んぞ能く吾が患と爲らんや。夫れ國の計を爲す者は、惟だ社稷を是れ利せんとす。豈に一女子を顧みんや」と。議者猶ほ曰はく、「裕、西して關に入るときは、則ち吾が其の後を斷ち、腹背に敵を受けんことを恐れん。北上するときは、則ち姚氏必ず關を出でて我を助けじ。其の勢、必ず、西するを聲して實は北するなり」と。嗣乃ち司徒長孫嵩を以て山東の諸軍

【一】婚姻の國。秦の女、魏に歸ぐこと、前卷十一年に見ゆ。  
 【二】南州。魏の南境なる相州の瀕河の諸郡を指す。



事を督せしめ、又、振威將軍娥清・冀州の刺史阿薄干を遣はし、步騎十萬を將ゐて、河の北岸に屯せしむ。庚辰、裕、軍を引きて河に入る。左將軍向彌を以て北青州の刺史と爲し、留まりて、礪礪に成せしむ。初め裕、王鎮惡等に命ず、「若し洛陽に克たば、大軍の到るを須ちて俱に進め」と。鎮惡等、利に乗じて徑に潼關に趨き、秦の兵の拒ぐ所と爲り、前むを得ず。之を久しうして食に乏しく、衆心疑懼し、或は輜重を棄てて還りて大軍に赴かんと欲す。沈林子、劔を按じて怒りて曰はく、「相公、志、六合を清めんとす。今、許洛已に定まり、關右將に平がんとす。事の濟否は、前鋒に繫る。奈何ぞ勝に乗ずるの氣を沮み、成るに垂なんとするの功を棄てんや。且つ大軍尙ほ遠く、賊衆方に盛なり。還るを求めんと欲すと雖も、豈に得可けんや。下官、命を授けて、顧みず。今日の事は、當に自ら將軍の爲めに之を辨すべし。未だ知らず、二三の君子、將に何の面ありて以て相公の旗鼓を見んとするか」と。鎮惡等、使を遣はし、馳せて裕に告げ、糧援を遣はさんことを求む。裕、使者を呼び、舫の北戸を開き、河上の魏軍を指し、以て之に示して曰はく、「我語りて、進む勿かれと令せり。今、輕佻にして深く入る。岸上此の如し。何に由りて軍を遣るを得ん」と。鎮惡乃ち親ら弘農に至り、百姓に説諭す。百姓競うて義祖を送る。軍食復た振ふ。魏人、數千騎を以て河に緣ひ、裕の軍に隨つて西行す。軍人、南岸に於て、(三三)百丈を牽く。

- 【一〇】礪礪。今の山東省東臨道在平縣。
- 【一一】相公。劉裕をいふ。
- 【一二】舫。大舟なり。
- 【一三】百丈。船を挽くに用ふるもの。南人は麻繩を用ひ、北人は竹を以てこれを爲る。

風水迅急なり。北岸に漂渡する者有れば、輒ち魏人の殺略する所と爲る。裕、軍を遣はして之を撃つ。裁に岸に登れば則ち走り、退けば則ち復た來る。夏四月、裕、白直隊主丁昨を遣はし、仗士七百人、車百乘を帥ゐて、北岸に渡り、水を去ること百餘歩にして、(二五)却月陣を爲り、(二六)河を抱き、車ごとに七仗士を置き、事畢れば、(二七)白眊を豎てしむ。魏人、其の意を解せず。皆未だ動かす。裕、先づ寧朔將軍朱超石に命じて戒嚴せしむ。白眊既に擧がる。超石、二千人を帥ゐ、馳せ往きて之に赴く。大弩百張を齎らし、一車に二十人を益し、(二八)彭排を轅上に設く。魏人、營陣の既に立てるを見、乃ち進みて之を圍む。長孫嵩、三萬騎を帥ゐて之を助く。四面より肉薄して營を攻む。弩、制する能はず。時に超石、別に大鎚及び(二九)稍千餘張を齎らし、乃ち稍を斷ちて長さ三四尺とし、鎚を以て之を鎚ち、一稍ごとに輒ち三四人を洞貫す、魏の兵、當る能はず、一時に犇り潰え、死者相積む。陳に臨みて阿薄干を斬る。魏人退きて、(三〇)畔城に還る。超石、寧朔將軍胡藩・寧遠將軍劉榮祖を帥ゐ、追撃し、又之を破る。殺獲すること千計。魏主嗣、之を聞き、乃ち崔浩の言を用ひざりしを恨む。秦の魯公紹、長史姚洽・寧朔將軍安鸞・護軍姚墨螽・河東の太守唐小方を遣はし、衆三千を帥ゐ、河北の九原に屯し、河を阻して固と爲さしめ、(三一)以て檀道濟の糧援を絶

- 【二五】却月陣。半圓形の陣。
- 【二六】白眊。白き羽毛の飾。
- 【二七】彭排。盾の一種なり。
- 【二八】稍。長さほこ。槊と同じ。
- 【二九】畔城。今の山東省東臨道聊城縣に在り。
- 【三〇】紹。以て弘農諸縣の糧援を絶たんと欲するなり。



たんと欲す。沈林子、邀へ撃ちて之を破り、洽・墨蠡・小方を斬り、殺獲して殆ど盡く。林子因つて太尉裕に啓して曰はく、「紹、氣、關中を蓋へども、今、兵、外に屈し、國、内に危し。其の凶命先づ盡き、以て 齊斧に膏するを得ざらんことを恐るのみ」と。紹、洽等が敗死せるを聞き、憤恚して疾を發し、血を嘔き、兵を以て東平公讚に屬し、而して卒す。讚既に紹に代り、衆力猶ほ盛なり。兵を引ききて林子を襲ふ。林子復た撃ちて之を破る。太尉裕、洛陽に至り、城塹を行視し、毛脩之の完葺の功を嘉し、衣服玩好直二千萬を賜ふ。

丁巳、魏主嗣、高柳に如く。壬戌、平城に還る。

河西王蒙遜・大赦す。張掖の太守沮渠廣宗を遣はし、詐り降り、以て涼公歆を誘ふ。歆、兵を發して之に應ず。蒙遜、兵三萬を將ゐて 蓼泉に伏す。歆、之を覺り、兵を引ききて還る。蒙遜、之を追ふ。歆、與に 解支澗に戦ひ、大に之を破る。斬首七千餘級。蒙遜、建康に城き、戍を置きて還る。

五月乙未、齊郡の太守王懿、魏に降り、上書して言はく、「劉裕、洛に在り。宜しく兵を發して其の歸路を絶つべし。戦はずして克つ可からん」と。魏主嗣、之を善しとす。崔浩、講に侍して前に在り。嗣、之に問うて曰はく、「劉裕、姚泓を伐つ。果して能く克たんか」と。對へて曰はく、「之に克

【三〇】 齊斧。齊は齋なり、凡そ出軍するときには、齋戒して廟に入り、而して斧鉞を受く。一説には、征伐の斧なり、以て天下を整齊するの義なりと曰ふ。  
 【三一】 蓼泉。今の甘肅省安肅道高臺縣に在り。  
 【三二】 解支澗。晉書本紀には鮮支澗に作る。宋書氏胡傳には西支間に作る。

たんと。嗣曰はく、「何が故ぞ」と。對へて曰はく、「昔、姚興、好みて虚名を事とし、而して實用少し。子泓、懦にして病多く、兄弟乖争す。裕、其の危きに乘じ、兵精に將勇なり。何が故に克たざらん」と。嗣曰はく、「裕の才は、慕容垂に何如一」と。對へて曰はく、「之に勝れり。垂は父兄の資に藉り、舊業を修復し、國人、之に歸すること、夜蟲の・火に就くが若し。倚仗を加ふること少くして、以て功を立て易し。劉裕は寒微より奮起し、尺土を階とせず、桓玄を討滅し、晉室を興復し、北は 慕容超を禽にし、南は 盧循を梟し、向ふ所前無し。其の才の・人に過ぐるに非ずんば、安んぞ能く是の如くならんや」と。嗣曰はく、「裕既に關に入り、進退する能はず。我、精騎を以て、直に彭城・壽春を擣かば、裕將に之を若何せんとする」と。對へて曰はく、「今、西に 屈丐有り、北に柔然有り、國際を窺伺す。陛下、既に親しく六師を御す可からず。精兵有りと雖も、未だ良將を睹ず。長孫嵩は、國を治むるに長ずれども、兵を用ふるに短なり。劉裕の敵に非ざるなり。兵を興して遠く攻むとも、未だ其の利を見ざらん。如かず、且く安靜にして以て之を待たんには。裕、秦に克ちて歸らば、必ず其の主を篡はん。關中は、華戎雜錯して、風俗勁悍なり。裕、荆揚の化を以て之を函秦に施さんと欲するは、此れ、衣を解きて火を包み・羅を張り

【三三】 兄弟乖争。弼・懿・恢、皆泓と國を争へるをいふ。  
 【三四】 倚仗。よりかかりたる所の者。  
 【三五】 桓玄を討滅す。一百一十五卷元興三年に見ゆ。  
 【三六】 慕容超を禽にす。一百一十五卷五年六年に見ゆ。  
 【三七】 盧循を梟す。六年七年に見ゆ。  
 【三八】 屈丐。明元・赫連勃勃の名を改めて屈丐と曰ふ。



て虎を捕ふるに異なる無し。兵を留めて之を守ると雖も、人情未だ洽からず、趨尙同じからず。適寇敵の資と爲すに足らんのみ。願はくは陛下、兵を按じて民を息め、以て其の變を觀よ。秦の地、終に國家の有と爲り、坐して守る可きなり」と。嗣笑つて曰はく、「卿、之を料ること審かなり」と。浩曰はく、「臣嘗て私に近世の將相の臣を論せり。王猛が國を治むるが若きは、苻堅の管仲なり。慕容恪が幼主を輔くるは、慕容暉の霍光なり。劉裕が禍亂を平ぐるは、司馬德宗の曹操なり」と。嗣曰はく、「屈丐は何如」と。浩曰はく、「屈丐は、國破れ家覆り、孤子たる一身にして、姚氏に寄食し、其の封殖を受けながら、恩に疇い義に報ゆるを思はずして、時に乘じ利を徵め、一方を盜有し、怨を四鄰に結ぶ。擻豎たる小人、能く暴を一時に縦にすと雖も、終に當に人の吞食する所と爲るべきのみ」と。嗣、大に悦び、語りて夜半に至り、浩に御標醪十觚・水精鹽一兩を賜うて曰はく、「朕、卿の言を味ふに、此の鹽酒の如し。故に卿と共に其の美を饗けんと欲す」と。然れども猶ほ長孫嵩・叔孫建に命じ、各精兵を簡び、裕の西に過ぐるを伺ひ、成阜より河を濟り、南して彭沛を侵し、若し時に過ぎずんば、則ち兵を引きて之に隨はしむ。

- 【四〇】 事、一百一十四卷三年に見ゆ。
- 【四一】 怨を四鄰に結ぶ。魏・秦・涼と怨を構ふるを謂ふ。
- 【四二】 擻豎。擻起して自ら豎立するをいふ。
- 【四三】 標醪。青白色の濁酒。
- 【四四】 觚。飲器。一觚は三升を受く。
- 【四五】 水精鹽。水精の如き透明なる鹽。
- 【四六】 彭沛。彭城・沛郡。

魏主嗣、西巡して雲中に至り、遂に河を濟りて大漠に敗す。

魏、天地四方の六部大人を置き、諸公を以て之と爲す。

秋七月、太尉裕、陝に至り、沈田子・傅弘之、武關に入る。秦の成將、皆、城を委てて走る。田子等、進みて青泥に屯す。秦主泓、給事黃門侍郎姚和都をして、嶢柳に屯せしめ、以て之を拒ぐ。

西秦の相國翟勅・卒す。八月、尙書令曇達を以て左丞相と爲し、左僕射元基を右丞相と爲し、御史大夫麴景を尙書令と爲し、侍中翟紹を左僕射と爲す。

太尉裕、闕郷に至り、沈田子等、將に嶢柳を攻めんとす。秦主泓、自ら將として以て裕の軍を禦がんと欲す。田子等が其の後を襲はんことを恐れ、先づ田子等を撃ち滅ぼして然る後國を傾けて東に出でんと欲し、乃ち步騎數萬を帥り、青泥に奄至す。田子、本、疑兵を爲し、領する所裁に千餘人。泓至ると聞き、之を撃たんと欲す。傅弘之、衆寡・敵せざるを以て、之を止む。田子曰はく、「兵は奇を用ふるを貴ぶ。必ずしも衆に在らず。且つ今衆寡相懸たり、勢、兩立せず。若し彼、圍を結んで既に固からば、則ち我、逃るる所無からん。如かず、其の始めて至りて營陳未だ立たざるに乗じ、先づ之に薄らんには。以て功有る可し」と。遂に所領を帥りて先づ進む。弘之、之に繼ぐ。秦の兵、合圍すること數重。田子、士卒を撫慰して曰はく、「諸君、險を

- 【四七】 諸公とは、時に公位に居る者及び位從公なる者を謂ふなり。
- 【四八】 青泥。今の陝西省關中道商縣に在り。
- 【四九】 嶢柳。今の陝西省關中道藍田縣に在り。

晉安皇帝義熙十三年



冒して遠く來れるは、正に今日の戰を求むるなり。死生、一に決す。封侯の業、此に於て在り」と。  
 士卒皆踴躍鼓譟し、短兵を執りて奮撃す。秦の兵大に敗る。斬馘萬餘級、其の乘輿服御の物を得たり。秦主泓、犇りて灊上（一）に還る。初め裕、田子等の衆の少きを以て、沈林子（二）を遣はし、兵を將ゐて、秦嶺より往きて之を助けしむ。至れば則ち秦の兵已に敗れたり。乃ち相與に之を追ふ。關中の郡縣、多く潛に款を田子に送る。辛丑、太尉裕、潼關に至り、朱超石を以て河東の太守と爲し、（三）振武將軍徐猗之と與に、薛帛に河北より會し、共に蒲阪を攻めしむ。秦の平原公璞、（四）姚和都と共に之を撃つ。猗之敗れて死し、超石犇りて潼關に還る。東平公讚、司馬國璠を遣はし、魏の兵を引ききて、以て裕の後を躡ましむ。王鎮惡、水軍を帥ゐて河より渭に入り以て長安に趨かんと請ふ。裕、之を許す。秦の恢武將軍姚難、（五）香城より兵を引ききて西す。鎮惡、之を追ふ。秦主泓、灊上より兵を引き、還りて石橋（六）に屯し、以て之が援を爲す。鎮北將軍姚彊、難と兵を合せて、涇上に屯し、以て鎮惡を拒ぐ。鎮惡、毛德祖をして進み撃たしめ、之を破る。彊、死し、難、長安に犇る。東平公讚、退きて鄭城（七）に屯す。太尉裕、軍を進めて之に逼る。泓、姚丕をして渭橋を守らしめ、胡翼度、（八）石積（九）に屯し、東平公讚、灊東に屯し、泓、逍遙園（十）に屯す。鎮惡、渭に

【一〇】 秦嶺、長安の南に在り。  
 【一一】 姚和都、姚成都の弟なり。蓋し青泥既に敗れて蒲阪に犇りしなり。或は曰はく、姚和都は當に姚成都に作るべしと。  
 【一二】 香城、渭水の北、蒲津の口に在り。今の陝西省關中道朝邑縣に在り。  
 【一三】 石橋、長安城の洛門の東北に在り、石橋有り。  
 【一四】 石積、長安城の東に在り。

派りて上り、（十一）蒙衝の小艦（十二）に乗り、船を行る者、皆艦内に在り。秦人、艦進めども船を行る者無きを見、皆驚きて以て神と爲す。壬戌旦、鎮惡、渭橋に至り、軍士に令す、『食畢らば、皆、仗を持ち岸に登れ。後れて登る者は斬らん』と。衆既に登る。渭水迅急にして、艦、皆、流に隨ひ、倏忽にして、在る所を知らず。時に泓が將ゐる所、尚ほ數萬人なり。鎮惡、士卒に諭して曰はく、『吾が屬、竝に家は江南に在り。此は長安の北門なり。家を去ること萬里、舟楫衣糧、皆、已に流に隨へり。今、進み戰つて勝たば、則ち功名俱に顯れん。勝たずんば、則ち骸骨も返らじ。他岐無し。卿等、之を勉めよ』と。乃ち身づから士卒に先だつ。衆、騰踊して争うて進み、大に姚丕を渭橋に破る。泓、兵を引ききて之を救ふ。丕の敗卒の蹂躙する所と爲り、戰はずして潰ゆ。姚詵等、皆、死し、泓、單馬にて宮に還る。鎮惡、平朔門より入る。泓、姚裕等數百騎と與に、逃げて石橋に犇る。東平公讚、泓敗れぬと聞き、兵を引き、之に赴く。衆、皆、潰え去る。胡翼度、太尉裕に降る。泓將に出でて降らんとす。其の子佛念、年十一、泓に言つて曰はく、『晉人將に其の欲を逞しうせん」と。降ると雖も必ず免れじ。（十三）引決するに如かず』と。泓、（十四）惘然として、應へず。佛念、宮牆に登り、自ら投じて死す。癸亥、泓、妻子・羣臣を將ゐ、鎮惡の壘門に詣り、降らんと請ふ。鎮惡、以て吏に屬す。城中の夷

【一五】 逍遙園、長安城の西北に在り。  
 【一六】 蒙衝、軍船。  
 【一七】 他岐無し。他の路なきなり。岐は別れ路をいふ。  
 【一八】 平朔門、長安城の北門なり。  
 【一九】 引決、自殺するをいふ。  
 【二〇】 惘然、失意の貌。



晉六萬餘戶、鎮惡、國恩を以て撫慰し、號令嚴肅なり。百姓安堵す。九月、太尉裕、長安に至る。鎮惡、灊上に迎ふ。裕、之を勞うて曰はく、「吾が霸業を成す者は、卿なり」と。鎮惡、再拜して謝して曰はく、「明公の威、諸將の力なり。鎮惡、何の功か之れ有らん」と。裕笑つて曰はく、「卿、馮異を學ばんと欲するか」と。鎮惡、性貪なり。秦の府庫盈積す。鎮惡、盜取すること、勝げて紀す可からず。裕、其の功の大なるを以て、問はず。或るひと諸を裕に譖して曰はく、「鎮惡、姚泓の僞輦を藏す。將に異志有らんとす」と。裕、人をして之を覘はしむ。鎮惡、其の金銀を剔取し、輦を垣の側に棄つ。裕の意乃ち安し。裕、秦の葬器、渾儀、土圭、記里鼓、指南車を收め、送りて建康に詣す。其餘の金玉繒帛珍寶は、皆、以て將士に頒ち賜ふ。秦の平原公璞、并州の刺史尹昭、蒲阪を以て降る。東平公讚、宗族百餘人を帥る、裕に詣りて降る。裕、之を殺す。姚泓を送り、建康に至る。市に斬る。裕、薛辯を以て平陽の太守と爲し、北道を鎮押せしむ。裕、都を洛陽に遷さんと議す。諸議參軍王仲德曰はく、「非常の事は、固より常人の及ぶ所に非

- 【六〇】馮異を學ぶ。馮異が謙退して功に誇らずして能く關中を定めたるを學ぶをいふ。
- 【六一】剔取。ぬきとる。
- 【六二】葬器。宗廟にそなへおく器具。
- 【六三】渾儀。渾天儀ともいふ。日月星辰の運行をはかるものなり。
- 【六四】土圭。日の景をはかるもの。日時計。
- 【六五】記里鼓。記里車ともいふ。進行につれて道里を示す器械。
- 【六六】指南車。車上に人形を備へ置き、手常に南を指す様に装置せられし車。蓋し磁針を用ひしなるべし。
- 【六七】孝武の太元九年、姚萇、國を建て白雀と改元す。三主三十四年にして亡ぶ。
- 【六八】鎮押。しづめ、まもる。

す。必ず駭動を致さん。今、師を暴すこと日久しく、士卒、歸るを思ふ。遷都の計は、未だ議す可からざるなり」と。裕乃ち止む。羌衆十餘萬口、西して隴上に犇る。沈林子、追撃して槐里に至り、俘虜萬計。河西王蒙遜、太尉裕が秦を滅ぼせるを聞き、怒ること甚だし。門下校郎劉祥、入りて事を言ふ。蒙遜曰はく、「汝、劉裕が關に入りて事を聞き、敢て研研然たり」と。遂に之を斬る。初め夏王勃勃、太尉裕が秦を伐つを聞き、羣臣に謂つて曰はく、「姚泓は、裕の敵に非ざるなり。且つ其の兄弟、内に叛く。安んぞ能く人を拒がんや。裕が關中を取らんこと必せり。然れども裕は、久しく留まる能はず、必ず將に南に歸り、子弟及び諸將を留めて之を守らんとす。吾、之を取ること、芥を拾ふが如くならんのみ」と。乃ち馬に秣ひ兵を礪ぎ、士卒を訓養し、進みて安定に據る。秦嶺の北の郡縣の鎮戍、皆、之に降る。裕、使を遣はし、勃勃に書を遣り、約して兄弟と爲る。勃勃、中書侍郎皇甫徽をして報書を爲らしめ、而して陰に之を誦し、裕の使者に對し、口づから舍人に授け、之を書かしむ。裕、其の文を読み、歎じて曰はく、「吾、如かざるなり」と。廣州の刺史謝欣、卒す。東海の人徐道期、衆を聚めて州城を攻陥し、進みて始興を攻む。始興の相

- 【六九】研研然。妍妍然なり。服飾の妍靡なるをいふ。胡三省曰はく、河西の士民、乃ち晉室に心あり。蒙遜は胡人にして、其上に竊據す。裕が關に入るを聞き、其の響應せんことを慮る、故に祥を斬りて以て衆を威し、以て其心を鎮服するなり。姦雄の喜怒豈に苟くも然らんやと。
- 【七〇】羌衆云云。姚氏は羌なり。姚氏既に滅びたるが故に、羌衆、西に奔る。
- 【七一】門下校郎。羣臣を司察する官。
- 【七二】研研然。妍妍然なり。服飾の妍靡なるをいふ。胡三省曰はく、河西の士民、乃ち晉室に心あり。蒙遜は胡人にして、其上に竊據す。裕が關に入るを聞き、其の響應せんことを慮る、故に祥を斬りて以て衆を威し、以て其心を鎮服するなり。姦雄の喜怒豈に苟くも然らんやと。



彭城の劉謙之、討ちて之を誅す。詔して、謙之を以て廣州の刺史と爲す。

癸酉、司馬休之・司馬文思・司馬國璠・司馬道賜・魯軌・韓延之・刁雍・王慧龍及び桓溫の孫道度・道

子・族人桓謐・桓璉・陳郡の袁式等、皆、魏の長孫嵩に詣りて降る。秦の匈奴

奴の鎮將姚成都及び弟和都、鎮を擧げて魏に降る。魏主嗣、民間に詔

す、「姚氏の子弟を得て平城に送る者は、之を賞せん」と。冬十月己酉、

嗣、長孫嵩等を召して還らしむ。司馬休之、尋いで魏に卒す。魏、國璠に

爵淮南公を、道賜に爵池陽子を、魯軌に爵襄陽公を賜ふ。刁雍、南鄙を

求めて自ら效さんと表す。嗣、雍を以て建義將軍と爲す。雍、衆を河濟

の間に聚め、徐・兗(二)を擾動す。太尉裕、兵を遣はして之を討つ。克たず。

雍、進みて固山に屯す。衆、二萬に至る。

詔して、宋公の爵を進めて王と爲し、十郡を増封す。辭して受けず。

西秦王熾磐、左丞相曇達等を遣はし、秦の故の將姚艾を撃つ。艾、使

を遣はして藩と稱す。熾磐、艾を以て征東大將軍・秦州の牧と爲し、王

松壽を徵して尙書左僕射と爲す。

十一月、魏の叔孫建等、西山の丁零翟蜀洛支等を討ち、之を平ぐ。

【七三】姚秦既に滅び、司馬休之等、裕に誅せられんことを懼る、故に皆、魏に降る。

【七四】建義將軍。魏、是の號を刁雍に授くるは、これを以て義を建て以て父兄の仇を復せしめんとするなり。

【七五】固山。今の山東省濟寧道滋陽縣の西方か。

【七六】艾は、秦の上邽の鎮將なり。

【七七】十二年、熾磐、松壽を遣はして馬頭に屯せしめ、以て秦の上邽に逼る。上邽降る、故に徵還す。

【七八】西山。魏の安州の西山り。

辛未、劉穆之・卒す。太尉裕、之を聞きて驚動し、哀惋すること累日なり。始め裕、長安に留まり

て西北を經略せんと欲す。而るに諸將佐、皆、久しく役して歸るを思ひ、多く留まるを欲せず。會

穆之・卒す。裕、根本に託無きを以て、遂に意を決して東に還る。穆之の卒するや、朝廷・懼懼し、詔

を發して太尉の左司馬徐羨之を以て之に代らしめんと欲す。中軍の諮議參軍張邵曰はく、「今誠に急

に病む。任終に徐に在らん。然れども世子は命を専らにする無し。宜しく須らく之を諮ふべし」と。

裕、王弘を以て穆之に代らしめんと欲す。從事中郎謝晦曰はく、「休元

は、輕易なり。羨之に若かずと。」乃ち羨之を以て、吏部尙書・建威將軍。

丹陽の尹と爲し、代りて留任を管せしむ。是に於て、朝廷の大事、常に穆

之に決せし者、竝に悉く北のかた裕に諮る。次子桂陽公義真を以て都督

雍梁秦三州諸軍事・安西將軍と爲し、雍東秦二州の刺史を領せしむ。義真、

時に年十二なり。太尉の諮議參軍京兆の王脩を以て長史と爲し、王鎮惡を司馬と爲し、馮翊の太守を

領せしめ、沈田子・毛德祖を、皆、中兵參軍と爲す。仍て田子を以て始平の太守を領せしめ、德祖を

して秦州の刺史・天水の太守を領せしめ、傅弘之を雍州の治中從事史と爲す。是より先、隴上の流

戸の・關中に寓する者、兵威に因りて本土に復するを得んことを望む。東秦州を置くに及びて、

裕が復た西略の意無きを知り、皆、歎息して望を失ふ。關中の人、素より王猛を重んず。裕が長安に

【七九】休元。王弘の字。

【八〇】時に裕未だ天水を得ず。東秦州は即ち毛德祖の領する所なり。或は曰はく、裕、東秦州を置き、義真をして兼ね領せしむと。



克つや、王鎮惡、功、多しと爲す。是に由りて、南人、皆、之を忌む。沈田子、自ら嶢柳の捷を以て、鎮惡と功を争ひ、平かならず。裕將に還らんとするとき、田子及び傅弘之、屢、裕に言つて曰はく、「鎮惡は、家、關中に在り。保信す可からず」と。裕曰はく、「今、卿を留む。文武の將士、精兵萬人なり。彼若し不善を爲さんと欲せば、正に自滅するに足らんのみ。復た多言する勿かれ」と。裕、私に田子に謂つて曰はく、「鍾會が其の亂を遂ぐるを得ざりしは、衛瓘有りしを以ての故なり。語に曰はく、「猛獸は羣狐に加かず」と。卿等十餘人、何ぞ王鎮惡を懼れんや」と。

臣光曰はく、古人、言へる有り、「疑ふときは則ち任する勿かれ、任するときは則ち疑ふ勿かれ」と。裕既に鎮惡に委ぬるに關中を以てし、而して復た田子と後言有り。

是れ之を鬪はせて、亂を爲さしむるなり。惜いかな、百年の寇、千里の土、之を艱難に得、之を造次に失ひ、豐鄙の都をして、復た寇の手に輸さしめしこと。荀子曰はく、「兼并は能くし易きなり、堅凝は之れ難し」と。信なるかな。

三秦の父老、裕が將に還らんとするを聞き、門に詣り、流涕して訴へて曰はく、「殘民、王化に霑はざることを、今に於て百年。始めて衣冠を觀、人人相賀す。長安の十陵は、是れ公家の墳墓なり。咸陽の宮殿は、是

【八一】鍾會云云。事、七十八卷魏の元帝咸熙元年の條に見ゆ。

【八二】堅凝。堅固にこれを守りて、失はざるをいふ。

【八三】十陵。關中に在り、即ち漢の高帝の長陵、惠帝の安陵、文帝の霸陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、宣帝の杜陵、元帝の渭陵、成帝の延陵、哀帝の義陵、平帝の康

陵、凡て十一陵なり。十と言ふは多數を舉ぐるなり。長安咸陽の宮殿は皆漢の故跡なり。裕は、劉氏の子孫なるが故に、父老、是を口實として裕を留めし也。

魏に請ふ。魏主嗣、將軍王洛生、河内の太守楊聲等を遣はし、西行して、以て之に應せしむ。

閏月壬申、魏主嗣、大寧の長川に如く。

秦雍の人千餘家、襄邑の令上谷の寇讐を推して主と爲し、以て魏に降る。魏主嗣、讐を魏郡の太守に拜す。之を久しうして、秦雍の人の、流れて魏の河南・滎陽・河内に入る者、戶、萬を以て數ふ。嗣乃ち南雍州を置き、讐を以て刺史と爲し、河南公に封じ、洛陽に治せしめ、雍州の郡縣を立て、以て之を撫す。讐、招懷を善くす。流民の之に歸する者、其の初めに三倍せり。

夏王勃勃、太尉裕が東に還るを聞き、大に喜び、王買德に問うて曰はく、「朕、關中を取らんと欲す。卿、試みに其の方略を言へ」と。買德曰はく、「關中は形勝の地なり。而るに裕、幼子を以て之

【八四】次息。二男。

【八五】讐は秦の襄邑の令なり。

【八六】善く兵を用ふる者は讐を觀て動く。



を守らせ、狼狽して歸るは、正に急に篡事を成さんと欲するのみ。復た中原を以て意と爲すに暇あらじ。此れ天、關中を以て我に賜ふなり。失ふ可からざるなり。青泥・上洛は、南北の險要なり。宜しく先づ遊軍を遣はして之を斷つべし。東のかた潼關を塞ぎ、其の水陸の路を絶ち、然る後檄を三輔に傳へ、施すに威徳を以てせば、則ち義眞は網罟の中に在り。取るに足らざるなり」と。勃勃乃ち其の子撫軍大將軍瑱を以て、前鋒の諸軍事を都督し、騎二萬を帥ゐて長安に向はしめ、前將軍昌をして潼關に屯せしめ、買徳を以て撫軍の右長史と爲し、青泥に屯せしめ、勃勃、大軍を將ゐて後繼と爲る。

是の歲、魏の都坐大官章安侯封懿卒す。

十四年、春正月丁酉朔、魏主嗣、平城に至り、護高車中郎將薛繁に命じ、高車の丁零を帥ゐて北略せしむ。弱水に至りて還る。

辛巳、大赦す。

夏の赫連瑱、渭陽に至る。關中の民の之に降る者、路に屬く。龍驤將軍沈田子、兵を將ゐて之を拒ぎ、其の衆盛なるを畏れ、退きて劉廻堡に屯し、使を遣はし、還りて王鎮惡に報せしむ。鎮惡、王脩に謂つて曰く、「公、十歳の兒を以て吾が屬に付す。當に共に力を竭さんことを思ふべし。而る

【一】弱水。滿洲の西喇木倫河をいふ。

に兵を擁して進まずんば、虜何に由りてか平ぐるを得ん」と。使者還り、以て田子に告ぐ。田子、鎮惡と、素より相圖るの志有り。是に由りて益々恐懼す。未だ幾くならずして、鎮惡、田子と俱に、

北地に出で、以て夏の兵を拒ぐ。軍中詔言す、「鎮惡、盡く南人を殺し、數十人を以て義眞を送りて南に還し、因つて關中に據りて反せんと欲す」と。辛亥、田子、鎮惡を請うて傅弘之の營に至らしめ、事を計る。田子、人を屏けて語らんことを求め、其の宗人沈敬仁をして、之を

【二】北地。長安の地を謂ふ。

【三】橫門。長安城北出東頭の第一門。

【四】寡婦渡。今の甘肅省涇原道慶陽縣に在り。

【五】狂易。發狂して其の常心を變易するをいふ。

の變を察す。俄にして、田子、數十人を帥ゐて來り、「鎮惡・反せり」と言ふ。脩、田子を執へ、數むるに專戮を以てし、之を斬る。冠軍將軍毛脩之を以て、鎮惡に代りて安西の司馬と爲す。傅弘之、大に赫連瑱を池陽に破り、又、之を寡婦渡に破る。斬獲甚だ衆し。夏の兵乃ち退く。壬戌、太尉裕、彭城に至り、嚴を解く。琅邪王徳文、先づ建康に歸る。裕、王鎮惡が死せるを聞き、表して言はく、「沈田子、忽ち狂易を發し、奄ち忠勳を害せり」と。鎮惡に左將軍・青州の刺史を追贈す。彭城の内史劉遵考を以て并州の刺史と爲し、河東の太守を領し、蒲阪に鎮せしめ、荊州の刺史劉道憐を徵して、徐兗二州の刺史と爲す。裕、世子義符を以て荊州に鎮せしめ、徐州に刺史劉義隆を以て司州の刺史と爲し、洛陽に鎮



せしめんと欲す。中軍諮議張邵、諫めて曰はく、『儲貳の重きは、四海の繋る所なり。宜しく外に處らしむべからず』と。乃ち更めて義隆を以て、都督荆益寧雍梁秦六州諸軍事。西中郎將・荆州刺史と爲し、南郡の太守到彦之を以て南蠻校尉と爲し、張邵を司馬と爲し、南郡の相を領せしめ、冠軍功曹王曇首を長史と爲し、北徐州の從事王華を西中郎主簿と爲し、沈林子を西中郎參軍と爲す。義隆尙ほ幼にして、府事、皆、邵に決す。曇首は弘之の弟なり。裕、義隆に謂つて曰はく、『王曇首は、沈毅にして器度有り、宰相の才なり。汝、事毎に之に諮れ』と。南郡公劉義慶を以て豫州の刺史と爲す。義慶は道憐の子なり。裕、司州を解き、徐冀二州の刺史を領す。

秦王熾磐、乞伏木奔干を以て沙州の刺史と爲し、樂都に鎮せしむ。二月、乙弗烏地延、戸二萬を帥ゐて秦に降る。

三月、使を遣はして魏に聘す。

夏四月己巳、魏、冀定幽三州の徒河を代都に徙す。

初め和龍に赤氣有り、四もに塞がりて日を蔽ひ、寅より申に至る。燕の太史令張穆、燕王跋に言つて曰はく、『此れ兵氣なり。今魏方に彊盛なり。而るに、其の使者を執へ、好命、通せず。臣竊にこれを懼る』と。跋曰

【六】 中軍諮議。中軍諮議參軍なり。  
 【七】 儲貳。世嗣ぎの太子。  
 【八】 晉、南徐州を京口に置き、北徐州は仍つて彭城に治す。  
 【九】 徒河。徒河の民、慕容氏に従つて中國に入り、三州に留まり居る者、魏人、因つて之を徒河と謂へり。魏王珪、皇始二年、中山に克ち、安州を置き、又、行臺を立て、以て其民を鎮撫す。天興三年、改めて定州と曰ふ。中山・常山・鉅鹿・博陵・北平・河間・高陽・趙郡を領す。

はく、『吾方に之を思ふ』と。五月、魏主嗣、東巡して濡源及び甘松に至り、征東將軍長孫道生・安東將軍李先・給事黃門侍郎奚觀を遣はし、精騎二萬を帥ゐて燕を襲はしめ、又、驍騎將軍延普・幽州の刺史尉諾に命じ、幽州より、兵を引ゐて遼西に趨き、之が聲勢を爲さしめ、嗣、突門嶺に屯し、以て之を待つ。道生等、乙連城を抜き、進みて和龍を攻め、燕の單于の右輔古泥と戦ひ、之を破り、其の將皇甫規を殺す。燕王跋、城に嬰りて自ら守る。魏人、之を攻め、克たず。其の民萬餘家を掠して還る。

六月、太尉裕、始めて相國・宋公・九錫の命を受け、國中の殊死以下を赦す。繼母蘭陵の蕭氏を崇びて太妃と爲し、太尉の軍諮祭酒孔靖を以て宋國の尙書令と爲し、左長史王弘を僕射と爲し、選を領せしめ、從事中郎傅亮・蔡廓を皆侍中と爲し、謝晦を右衛將軍と爲し、右長史鄭鮮之を奉常と爲し、行參軍殷景仁を祕書郎と爲し、其餘の百官、悉く天朝の制に依る。靖、辭して受けず。亮は、咸の孫、廓は謨の曾孫、鮮之は、渾の玄孫、景仁は、融の曾孫なり。景仁、學、文を爲さざれども、敏にして思致有り、口、義を談せざれども、深く理體に達し、國典・朝儀・舊章・記注に至るまで、撰録せざるは莫し。識者、其の當世の志有るを知る。

【一〇】 其の使者を執ふ。于什門を留むるを謂ふなり。事、一百一十六卷義熙十年に見ゆ。  
 【一一】 單于の右輔。義熙七年、燕王跋、單于の四輔を置く。  
 【一二】 始めて云云。十二年に命下りしが、是に至りて乃ち受けしなり。  
 【一三】 咸。傅咸、武帝・惠帝の間に仕へ、直を以て顯ばる。  
 【一四】 謨。蔡謨、成帝・康帝・穆帝三朝に歴事し、聲績あり。  
 【一五】 渾。鄭渾、六十六卷漢の獻帝建安十七年に見ゆ。  
 【一六】 融。殷融、九十四卷成帝咸和三年に見ゆ。



魏の 天部大人白馬の文貞公崔宏、疾篤し。魏主、侍臣を遣はして病を問はしむること、一夜にして數返なり。卒するに及びて、羣臣及び 附國の渠帥に詔して、皆會葬せしむ。

秋七月戊午、魏主嗣、平城に至る。

九月甲寅、魏人、諸州に命じて、民租を調すること、戸ごとに五十石、

定・相・冀の三州に積ましむ。

河西王蒙遜、復た兵を引きて涼を伐つ。涼公歆、將に之を拒がんとす。

左長史張 體 順固く諫む。乃ち止む。蒙遜、其の秋稼を爰りて還る。歆、

使を遣はして來りて、位を襲げるを告ぐ。冬十月、歆を以て 都督七郡諸

軍事・鎮西大將軍・酒泉公と爲す。

姚艾、秦に叛き、河西王蒙遜に降る。蒙遜、兵を引きて之を迎ふ。艾

の叔父雋、衆に言つて曰はく、「秦王は寛仁にして雅度有り。自ら安居し

て之に事ふ可し。何爲れぞ河西王に従つて西に遷らんや」と。衆咸以て然

りと爲し、乃ち相與に艾を逐ひ、雋を推して主と爲し、復た秦に歸す。秦王熾磐、雋を徵して侍中・中

書監と爲し、爵隴西公を賜ふ。左丞 相 曇達を以て都督 洸罕以東諸軍事・征東大將軍・秦州の牧と

爲し、南安に鎮せしむ。

劉義眞、年少く、左右に賜與すること節無し。王脩毎に之を裁抑す。左右皆怨む。脩を義眞に譖し

て曰はく、「王鎮惡、反せんと欲す。故に沈田子、之を殺せり。脩、田子を殺せり。是れ亦反せんと欲す

るなり」と。義眞、之を信じ、左右劉乞等をして脩を殺さしむ。脩既に死し、人情離れ駭き、相統壹

する莫し。義眞、悉く 外軍を召して長安に入れ、門を閉ちて拒守す。關中の郡縣、悉く夏に降る。

赫連璜、夜、長安を襲ひ、克たず。夏王勃勃、進みて咸陽に據る。長安、

樵采の路絶ゆ。宋公裕、之を聞き、輔國將軍 叡恩をして長安に如かしめ、

義眞を召して東に歸らしめ、相國の右司馬朱齡石を以て都督關中諸軍事・

右將軍・雍州の刺史と爲し、代りて長安に鎮せしむ。裕、齡石に謂つて曰

はく、「卿至らば、義眞に勅して輕裝して速かに發せしむ可く、既に關を

出で、然して 徐行す可し。若し關 右必ず守る可からずんば、義眞と俱に歸る可し」と。又、中書

侍郎朱超石に命じ、河洛を慰勞せしむ。十一月、齡石、長安に至る。義眞の將士貪縱にして、大に掠

めて東し、多く寶貨子女を載せ、軌を方べて徐行す。雍州の別駕 韋華、夏に犇る。赫連璜、衆三

萬を帥ゐて義眞を追ふ。建威將軍傅弘之曰はく、「公、處分して亟かに進ましむ。今多く輜重を將ゐ、

一日に行くこと、十里に過ぎず。虜の追騎且に至らんとす。何を以てか之を待たん。宜しく車を棄て

- 【一】 洸罕、洸罕を謂ふ。
- 【二】 姚艾が乞伏に藩と稱すること、前年に見ゆ。
- 【三】 姚艾、秦に叛き、河西王蒙遜に降る。蒙遜、兵を引きて之を迎ふ。艾の叔父雋、衆に言つて曰はく、「秦王は寛仁にして雅度有り。自ら安居して之に事ふ可し。何爲れぞ河西王に従つて西に遷らんや」と。衆咸以て然りと爲し、乃ち相與に艾を逐ひ、雋を推して主と爲し、復た秦に歸す。秦王熾磐、雋を徵して侍中・中書監と爲し、爵隴西公を賜ふ。左丞 相 曇達を以て都督 洸罕以東諸軍事・征東大將軍・秦州の牧と爲し、南安に鎮せしむ。
- 【四】 外軍。蒲阪に屯して以て魏を捍ぎ、渭北に屯して以て夏を捍ぐ軍をいふ。
- 【五】 韋華。もと、姚氏の臣なり。裕、用つて雍州の別駕と爲す。



て輕行すべし。乃ち以て免る可し』と。義眞、從はず。俄にして夏の兵大に至る。傅弘之・蒯恩、後を斷ち、力戰すること連日、青泥に至り、晋の兵大に收れ、弘之・恩、皆王買德に禽にせらる。王買德に禽にせらる。司馬毛脩之、義眞と相失し、亦、夏の兵に禽にせらる。義眞、行きて前に在り。會、日暮れ、夏の兵、窮追せず。故に免るるを得たり。左右盡く散じ、獨り草中に逃る。中兵參軍段宏、單騎追ひ尋ね、道に縁りて之を呼ぶ。義眞、其の聲を識り、出でて之に就きて曰はく、『君は段中兵に非ずや、身は此に在り。行け。必ず兩りながら全からじ。身の頭を刎ねて以て南す可し。家公をして望絶えしめん』と。宏泣きて曰はく、『死生、之を共にせん。下官忍びず』と。乃ち義眞を背に束ね、單馬にして歸る。義眞、宏に謂つて曰はく、『今日之事、誠に算略無し。然れども大夫此を経ずんば、何を以てか艱難を知らん』と。夏王勃勃、傅弘之を降さんと欲す。弘之、屈せず。(時天)勃勃、之を裸にす。弘之、叫罵して死す。勃勃、人の頭を積み、京觀を爲り、號して鬪臺と曰ふ。(二六) 長安の百姓、朱齡石を逐ふ。齡石、其の宮殿を焚き、潼關に犇る。勃勃、長安に入り、大に將士を饗し、觴を舉げ、王買德に謂つて曰はく、『卿の往日の言、一暮にして驗あり。算に遺策無しと謂ふ可し。此の觴の集まる所、卿に非ずして誰ぞや』と。買德を以て都官尚書と爲し、

【二五】 王買德云云。王買德、先に青泥に屯す。故に二將、邀へられて禽にせらる。  
 【二六】 身。晋人多く自ら稱して身と爲す。  
 【二七】 家公。魏・晋の間、子その父を呼ぶに家公といふ。  
 【二八】 長安の百姓云云。義眞、大に長安を掠めて歸りたれば、長安の人、固く晋人を仇視せしなり。  
 【二九】 一暮。一年をいふ。

河陽侯に封す。龍驤、將軍王敬先、(三〇) 曹公壘に成す。齡石、往きて之に従ふ。朱超石、蒲阪に至り、齡石の在る所を聞き、亦、往きて之に従ふ。赫連昌、敬先の壘を攻め、其の水道を斷つ。衆渴し、戦ふ能はず、城且に陥らんとす。齡石、超石に謂つて曰はく、『弟兄、俱に異域に死せば、老親をして何を以て心と爲さしめん。爾、問道を求めて亡げ歸らば、我、此に死すとも恨み無し』と。超石、兄を持し、泣きて曰はく、『人、誰か死せざらん。寧ぞ今日兄を辭して去るに忍びんや』と。遂に敬先及び右軍參軍劉欽之と與に、皆、執へて長安に送らる。勃勃、之を殺す。欽之の弟、秀之、悲泣して、歡燕せざること十年。欽之は穆之の從兄の子なり。宋公裕、青泥敗れぬと聞き、未だ義眞の存亡を知らず、(三二) 日を刻して北伐せんとす。侍中謝晦、諫むるに士卒の疲弊せるを以てし、(三一) 他年を俟たんと請ふ。從はず。鄭鮮之、上表して以爲はく、『虜、殿下・親征すと聞かば、必ず力を併せて潼關を守らん。徑に往きて之を攻むとも、恐らくは未だ克つ可きこと易からざらん。若し輿駕、洛に頓まるは、則ち上聖躬を勞するに足らず。且つ虜、志を得と雖も、敢て勝に乗じて陝を過ぎざるは、猶ほ大威に攝服し、將來の慮を爲すが故なり。若し洛に造りて反らば、虜必ず更に揣量の心有り、或は益邊患を生せん。況

【三〇】 曹公壘。今の陝西省關中道潼關縣に在り。曹操、韓馬を伐つて築きし所なり。  
 【三一】 裕をして能く復た北伐せしめば、青泥の敗を聞き、當に杖を投じて起つべし。何ぞ日を刻するを待たんや。英雄の爲す所は、固より常人の測識する所に非ざるなり。  
 【三二】 晦が他年を俟たんと請ふは亦裕が所謂機變を知る者なり。鄭鮮之の言は則ち是に異なり。  
 【三三】 攝。攝なり。おそるる也。



んや大軍遠く出でなば、後患甚だ多からん。昔歲西征して、【一】劉鍾狼狽し、去年北討して、【二】廣州傾覆せり。既往の效は、後來の鑒なり。今、諸州大水あり、民食寡乏なり。三吳の羣盜、諸縣を攻没す。皆、征役に困しむに由るが故なり。江南の士庶、領を引き願願として、以て殿下の【三】返旆を望めり。更に北に出づるを聞かば、淺深の謀・往還の期を測らず、臣恐る、返顧の憂、更に腹心に在らんことを。若し西虜更に河洛の患を爲すを慮らば、宜しく好を【七】北虜に結ぶべし。北虜親しまば、則ち河南安く、河南安からば則ち濟泗靜ならん」と。會、段宏の啓を得、義眞が免るるを得たるを知り、裕乃ち止む。但だ城に登りて北望し、慨然として流涕するのみ。義眞を降して建威將軍・司州の刺史と爲し、段宏を以て宋臺の黃門郎と爲し、太子の右衛率を領せしむ。裕、【三〇】天水の太守毛德祖を以て河東の太守と爲し、劉遵考に代りて蒲阪を守らしむ。

夏王勃勃、壇を灞上に築き、皇帝の位に即き、昌武と改元す。

西秦王熾磐・東巡す。十二月、上邽の民五千餘戸を枹罕に徙す。

【三〇】 慧星、天津を出で、太微に入り、北斗を經、紫微を經ひ、八十餘日にして滅ゆ、魏主嗣、復た諸

【一】 劉鍾狼狽。十一年、盜、治亭を襲ふ時をいふ。  
 【二】 廣州傾覆。徐道期、廣州を陥れしをいふ。  
 【三】 返旆。はたなをいふ。軍を引き返すをいふ。  
 【七】 北虜。魏をいふ。  
 【三〇】 胡三省曰はく、裕、德祖が善く守るを知りてこれを用ふと雖も、然れども人心已に搖ぐ、宜なり其の固きこと能はざるやと。  
 【三二】 慧星云云。晉書天文志に曰はく、箕の四星、一に天津と曰ふ。太微は天子の庭なり、北斗の南に在り。紫微の十五星、北斗の北に在りと。皆星座の名。

儒・術士を召し、之に問うて曰はく、「今四海分裂す。災谷の應、果して何れの國にか在る。朕甚だ之を畏る。卿が輩、言を盡し、隠す所有る勿かれ」と。衆、崔浩を推して對へしむ。浩曰はく、「夫れ災異の興るや、皆、人事に象る。人苟くも覺無くんば、又何ぞ畏れん。昔王莽が將に漢を篡はんとせしとき、慧星出入すること、正に今と同じかりき。國家、主尊く臣卑しく、民、異望無し。晉室、陵夷して、危亡せんこと遠からじ。慧の異を爲すは、其れ劉裕が將に篡はんとするの應か」と。衆、以て其の言を易ふる無し。

宋公裕、【四一】 識に「昌明の後、尙ほ二帝有り」と云へるを以て、乃ち中書侍郎王韶之をして、帝の左右と與に、密に帝を酰して琅邪王德文を立てんと謀らしむ。德文常に帝の左右に在り、飲食寢處、未だ嘗て暫くも離れず。韶之、之を伺ひ、時を經れども間を得ず。會、德文、疾有り、出でて外に居る。戊寅、韶之、散衣を以て、帝を東堂に縊る、韶之は、【四二】 虞の會孫なり。裕因つて遺詔と稱し、德文を奉じて皇帝の位に即かしめ、大赦す。是の歲、河西王蒙遜、表を奉りて藩と稱す。涼州の刺史に拜す。

尙書右僕射袁湛・卒す。

【四一】 識云云。晉書帝紀に曰はく、初め簡文帝、識を見るに、云はく、晉の祚、昌明に盡きんと。孝武帝の孕に在るに及びて、李太后夢む、神人、之に謂つて曰はく、汝、男を生まば、昌明を以て字と爲せと。産むに及びて、東方始めて明く。因つて以て名と爲す。簡文、後に悟りて乃ち流涕すと。又曰はく、識に云はく、昌明の後二帝有り。と。裕乃ち帝を縊りて恭帝を立て、以て二帝に應ぜしむと云ふと。  
 【四二】 帝云云。帝崩するとき年三十七。  
 【四三】 虞。王敦の從弟なり。



恭皇帝

元熙元年、春正月壬辰朔、改元す。

琅邪王の妃褚氏を立てて皇后と爲す。后は哀の曾孫なり。

魏主嗣、懷渚に敗す。

甲午、宋公裕を徵して入朝せしめ、爵を進めて王と爲す。裕辭す。

癸卯、魏主嗣、平城に還る。

庚申、安皇帝を休平陵に葬る。

劉道憐に敕して、司空を以て出でて京口に鎮せしむ。

夏の將叱奴侯提、步騎二萬を帥ゐて、毛德祖を蒲阪に攻む。德祖、禦く

能はず、全軍、彭城に歸る。二月、宋公裕、德祖を以て滎陽の太守と爲し、

虎牢に戍せしむ。

夏主勃勃、隱士京兆の韋祖思を徵す。祖思既に至りて、恭懼すること過甚なり。勃勃怒りて曰はく、

「我、國士を以て汝を徵す。汝は乃ち非類を以て我を遇す。汝、昔、姚興を拜せざりき。今、何ぞ獨

り我を拜するか。我在るときすら、汝猶ほ我を以て帝王と爲さず。我死せば、汝が曹、筆を弄し、當

【一】恭皇帝。諱は德文、安帝の同母弟なり。

【二】元熙元年。西紀四一九年なり。

【三】哀。褚哀。崇德太后の父。

【四】懷渚。今の綏遠特別區域綏遠道の圖原根河畔か。

【五】原文「司空」の上に「以」の字を脱す。

【六】虎牢。今の河南省開封道汜水縣。漢の成皋縣の地なり。

に我を何の地に置くべきか」と。遂に之を殺す。羣臣、長安に都せんと請ふ。勃勃曰はく、「朕、豈

に長安は歴世帝王の都にして、沃饒險固なるを知らざらんや。然れども晉人は僻遠にして、終に吾が

患を爲す能はじ。魏は、我と風俗略ぼ同じく、土壤鄰接し、統萬より魏の境に距るまで、裁に百餘里。

朕、長安に在らば、統萬必ず危からん。若し統萬に在らば、魏必ず敢て河を濟りて西せざらん。諸

卿、適未だ此を見ざるのみ」と。皆曰はく、「及ぶ所に非ざるなり」と。

乃ち長安に於て南臺を置き、赫連璜を以て、大將軍・雍州の牧を領し、南

臺の尙書の事を録せしむ。勃勃、統萬に還る。大赦し、眞興と改元す。勃

勃、性驕虐にして、民を視ること草芥の如し。常に城上に居り、弓劍を

側置き、嫌忿する所有れば、手自ら之を殺す。羣臣の近視る者は、

其の目を齧り、笑ふ者は、其の唇を決き、諫むる者は、先づ其の舌を截

り、而る後之を斬る。

初め司馬楚之、其の父榮期の喪を奉じて、建康に歸るや、會宋公裕、宗室の才望有る者を誅翦

し、楚之の叔父宣期・兄貞之、皆死す。楚之、亡げて竟陵の蠻中に匿る。從祖休之が江陵より秦に

奔るに及びて、楚之亡げて汝・穎の間に之を聚め、衆を聚め、以て復讐を謀る。楚之、少きとき英氣有り、

能く節を折りて士に下る。衆萬餘有り、長社に屯據す。裕、刺客沐謙をして往きて之を刺さしむ。楚

【七】榮期が死すること、一百一十四卷安帝の義熙二年に見ゆ。

【八】休之は宣帝の弟、魏の中郎進の六世の孫。楚之は宣帝の弟太常暄の八世の孫。故に

休之は楚之に於て從祖たり。

休之が秦に奔ること、前卷義熙十一年に見ゆ。



之、謙を待つこと甚だ厚し。謙、發せんと欲すれども、未だ間を得ず。乃ち夜、疾と稱す。楚之が必ず往きて疾を問はんことを知り、因つて之を刺さんと欲してなり。楚之、果して自ら湯藥を齎らし、往きて疾を視る。情意、勤篤なり。謙、發するに忍びず。乃ち匕首を席下より出し、狀を以て之に告げて曰はく、『將軍、深く劉裕に忌まる。願はくは輕率なる勿かれ、以て自ら保全せよ』と。遂に身を委ねて之に事へ、之が防衛を爲す。王鎮惡が死するや、沈田子、其の兄弟七人を殺す。唯だ弟康のみ、免れて逃ぐるを得、宋公裕に彭城に就く。裕、以て相國の行參軍と爲す。康、洛陽に還りて母を視んことを求む。會、長安守られず。康、關中の徙民を糾合し、百許の人を得、僑戸七百餘家を驅帥し、共に金墉城に保す。時に宗室、多く逃亡して河南に在り。司馬文榮といふ者有り、乞活千餘戸を帥ゐて、金墉城の南に屯す。又、司馬道恭といふもの有り、東垣より、三千人を帥ゐて城西に屯し、司馬順明は五千人を帥ゐて陵雲臺に屯し、司馬楚之は柏谷塢に屯し、魏の河内の鎮將于栗磾の遊騎、芒山の上に在り、攻逼して交し至る。康、堅く守ること六旬、裕、康を以て河東の太守と爲し、兵を遣はして之を救ふ。〔二二〕平等皆散じ走る。康、農桑を勸課し、百姓甚だ之を親賴す。司馬順明、司馬道恭及び平陽の太守薛辯、皆、

- 【九】 勤篤。懇懇懇篤。
- 【一〇】 乞活。惠帝の時、并州饑荒し、其の吏民、東燕王騰に隨つて東に下る。號して乞活と曰ふ、是の後流徙して糧を逐ふ者を、亦、乞活と曰ふ。
- 【一一】 東垣。地名、今の河南省河洛道洛陽縣にあり。
- 【一二】 平等。詳かに上文を考ふるに、未だ平等の何人たるかを知らず。一説に、平は邵平なり、司馬文榮を迎へて主と爲せる者なり。王鎮惡傳に明文ありと曰ふ。

魏に降る。魏、辯を以て河東の太守と爲し、以て夏人を拒がしむ。

夏四月、秦の征西將軍 孔子、騎五千を帥ゐて、吐谷渾竟地を

水の南に討ち、大に之を破る。竟地、其の衆六千を帥ゐて秦に降る。弱水

護軍に拜せらる。

庚辰、魏主嗣、東廟に 事有り。祭を助くる者數百國。辛巳、南巡し

て雁門に至る。

五月庚寅朔、魏主嗣、漁を 澠水に觀る。己亥、平城に還る。

涼公歆、刑を用ふること嚴に過ぎ、又好みて宮室を治む。從事中郎張顯、

上疏して以爲はく、『涼土 三分し、勢、久しきを支へじ。兼并の本は、

農を務むるに在り、遠きを懐くるの略は、寬簡に如くは莫し。今、歲に入

りて已來、陰陽、序を失ひ、風雨、和に乖く。是れ宜しく膳を減じ、懸

を徹し、身を側め道を脩むべし。而るに更に刑を繁くし法を峻しくし、繕

築すること止まず。殆ど興隆を致す所以に非ざるなり。昔、文王は、百里

を以てして興り、二世は、四海を以てして滅びぬ。前車の軌、得失昭然

たり。〔三〇〕 太祖、神聖の姿を以て、西夏の推す所と爲り、左は酒泉を取り、右は西域を開けり。殿

- 【二二】 孔子。亦、乞伏氏なり。
- 【二三】 弱水。今の甘肅省の張掖河なり。
- 【二四】 事。祭をいふ。
- 【二五】 澠水。今の山西省雁門道の桑乾河。
- 【二六】 三分。李氏・沮渠・乞伏をいふ。
- 【二七】 懸。樂懸なり。音樂をいふ。
- 【二八】 二世。秦の二世皇帝。
- 【二九】 太祖。李嵩の廟を太祖と號す。
- 【三〇】 西夏の推す所と爲ること、一百一十二卷安帝隆安四年に見ゆ。酒泉を取ることに、五年に見ゆ。西域を開くこと、亦、四年に見ゆ。



下、遺志を奉承し、涼土を混壹し、【三】 蹤を張后に倅しうする能はず。將に何を以て、下、先王に見えんとするか。沮渠蒙遜は、胡夷の傑、内は政事を脩め、外は英賢を禮し、攻戰の際、身、士卒に均しくし、百姓、之に懷き、之が用を爲すを樂む。臣謂へらく、殿下、但だ蒙遜を平殄する能はざるのみに非ず、亦懼らくは蒙遜が方に社稷の憂と爲らんことを」と。歎、之を覽、悦ばず。主簿氾稱・上疏して諫めて曰はく、「天の・人主を子とし愛する、殷勤なること至れり。故に政の脩まらざるときは、災異を下し、以て之を戒告す。改むる者は、危しと雖も必ず昌に、改めざる者は、安しと雖も必ず亡ぶ。元年、三月癸卯、【二】 敦煌の謙德堂陥り、八月、【四】 效穀の地裂け、二年元日、昏霧四もに寒がり、四月、日赤くして光無く、二句にして乃ち復し、十一月、狐、南門に上り、今茲春夏、地頻りに五たび震ひ、六月、建康に隕星あり。臣、學古を稽へすと雖も、行年五十有九、請ふ殿下の爲めに、略ぼ耳目の聞見する所を言はん。復た能く遠く書傳の事を論せざるなり。【三】 乃者咸安の初め、西平、地裂け、狐、謙光殿の前に入る。俄にして秦の師奄至し、都城守られず。【二】 梁熙既に涼州と爲り、百姓を撫せずして、専ら聚斂を爲せり。【三】 建元十九年、姑臧の南門崩れ、閑豫堂に隕石あり。明年、呂光の殺す所と爲れり。段業、制を此の

- 【一】 張后。張軌及び其の子若孫を謂ふ。
- 【二】 李嵩、敦煌を得、晉に藩と稱し、謙德堂を起せり。
- 【三】 效穀。地名。
- 【四】 咸安。晉の簡文帝の年號なり。
- 【五】 堅、梁熙を以て涼州に鎮せしむ。建元十九年、堅、淮南に敗れ、明年、呂光、梁熙を殺す。
- 【六】 建元十九年。この建元は秦の苻堅の年號にて、晉にては大元八年に當る。

方に稱し、三年の中、地震ふこと五十餘所。既にして先王、瓜州に龍興し、蒙遜、張掖に篡弒せり。此れ皆目前の成事、殿下の明かに知る所なり。效穀は先王の鴻漸の地、謙德は尊に即くの室なり。基陥り地裂くるは、大凶の徵なり。日は太陽の精にして、中國の象なり。赤くして光無きは、中國將に衰へんとするなり。諺に曰はく、「野獸、家に入れば、主人將に去らんとす」と。狐、南門に上るは、亦、變異の大なる者なり。今、蠻夷益々盛に、中國益々微なり。願はくは殿下、亟かに宮室の役を罷め、遊畋の娛を止め、英俊を延禮し、百姓を愛養し、以て天變に應じ、未然に防げ」と。歎、從はず。

- 【一】 瓜州。敦煌郡の地なり。
- 【二】 鴻漸。漸漸に下より上に進むことなり。嵩、效穀の令より、敦煌を得、遂に七郡を有てり。故に效穀を鴻漸の地といふ。
- 【三】 進爵云云。さきに王に進められしを拜受するなり。
- 【四】 度支尙書。軍國の支計を司る官。
- 【五】 湟川。今の四川省西川道松潘縣にあり。

秋七月、宋公裕、始めて進爵の命を受く。八月、移りて壽陽に鎮す。【一】 度支尙書劉懷慎を以て、督淮北諸軍事・徐州の刺史と爲し、彭城に鎮せしむ。辛未、魏主嗣・東巡す。甲申、平城に還る。九月、宋王裕、自ら揚州の牧を解く。秦の左衛將軍匹達等、兵を將ゐて、彭利和を湟川に討ち、大に之を破る。利和、單騎にて仇池に奔る。其の妻子を獲たり。羌豪三千戸を枹罕に徙す。湟川の羌三萬餘戸、皆、安堵すること故の



如し。冬十月、尚書右僕射王松壽を以て、益州の刺史と爲し、瀼川に鎮せしむ。

宋王裕、河南蕭條たるを以て、乙酉、司州の刺史義眞を徙して、揚州の刺史と爲し、石頭に鎮せしむ。

蕭太妃、裕に謂つて曰はく、『道憐は汝が布衣の兄弟なり。宜しく用ひて揚州と爲すべし』と。

裕曰はく、『寄奴、道憐に於て、豈に惜む所有らんや。揚州は根本の寄

る所、事務至つて多く、道憐の了する所に非ず』と。太妃曰はく、『道憐

は、年、五十を出づ。豈に汝の十歳の兒に如かざらんや』と。裕曰はく、

『義眞は、刺史たりと雖も、事、大小と無く、悉く寄奴に由る。道憐は、

年長じたれば、其の事を親らせずんば、聽望に於て足らじ』と。太妃乃

ち言無し。道憐、性愚鄙にして貪縱なり。故に裕、肯て用ひず。

十一月丁亥朔、日、之を食する有り。

十二月癸亥、魏主嗣、西巡して雲中に至る。君子津より西して河を渡り、大に薛林山に獵す。

辛卯、宋王裕、殊禮を加へられ、王太妃を進めて太后と爲し、世子を太子と爲す。

【三】 道憐、蕭太妃の生む所。  
【四】 寄奴、裕の小子。  
【五】 十歳の兒、義眞をいふ。  
【六】 聽望は猶ほ觀聽と言ふが如し。  
【七】 薛林山、屋寶城の西に在り。今の綏遠特別區域歸綏縣附近か。

卷の第一百一十九

宋紀一

高祖武皇帝

永初元年、春正月己亥、魏主、宮に還る。

秦王熾磐、其の子、乞伏暮末を立てて太子と爲す。仍て撫軍大將軍を領

し、中外の諸軍事を都督せしむ。大赦し、建弘と改元す。

宋王、禪を受けんと欲すれども、言を發するを難る。乃ち朝臣を集め

て宴飲し、從容として言つて曰はく、『桓玄、位を篡ひ、鼎命已に移れり。

我、首として大義を唱へ、帝室を興復し、南征北伐し、四海を平定し、功成

り業著はれ、遂に九錫を荷ふ。今、年將に衰暮ならんとす。崇極なること

此の如し。物は盛滿を忌む。久しく安んず可きに非ず。今、爵位を奉還し

京師に歸老せんと欲す』と。羣臣、惟だ盛に功德を稱し、其の意を諭るもの莫し。日晚れ坐散す。中

宋高祖武皇帝永初元年

【一】 高祖武皇帝、南朝宋の始祖。姓は劉、名は裕、字は徳興。小字は寄奴。在位三年。  
【二】 永初元年。西紀四二〇年なり。是の年六月、改元す。  
【三】 乞伏暮末、晉書には乞伏暮末に作り、宋書には乞佛茂蔓に作る。これは十六國春秋に従ふ。  
【四】 朝臣。宋朝の臣をいふ。



書令傅亮、外に還りて乃ち悟る。而して宮門已に閉ず。亮、扉を叩き、見えんことを請ふ。王、即ち門を開きて之を見る。亮入り、但だ曰はく、「臣暫く宜しく都に還るべし」と。王、其の意を解し、復た他言する無く、直だ云ふ、「幾人を須ひて自ら送らん」と。亮曰はく、「數十人にして可なり」と。即時に辭を奉じ、亮出づ。已に夜なり。長星の天に竟るを見、髀を拊ちて歎じて曰はく、「我常に天文を信せず。今始めて驗あり」と。亮、建康に至る。夏四月、王を徵して入り輔けしむ。王、子義康を留めて、都督豫司雍并四州諸軍事・豫州の刺史と爲し、壽陽に鎮せしむ。義康尙ほ幼なり、相國の參軍南陽の劉湛を以て長史と爲し、府州の事を決せしむ。湛、弱年より、即ち物を宰するの情有り、常に自ら管葛に比し、博く書史に涉り、文章を爲らず、談議を喜まず。王甚だ之を重んず。

五月乙酉、魏、更めて宣武帝に諡して道武帝と曰ふ。魏の淮南公、司馬國璠、池陽子司馬道賜、外に叛かんと謀る。司馬文思、之を告ぐ。庚戌、魏主、國璠・道賜を殺し、文思に爵鬱林公を賜ふ。國璠等、坐して族誅せらるる者數十人なり。章安侯封懿の子玄之、坐に當す。魏主、

- 【五】長星云云。長星は彗星にして、舊を除き新を布くものとせらる、故に然云ふ。
- 【六】壽陽。即ち壽春なり。今の安徽省淮泗道壽縣。
- 【七】府州。都督府及び豫州なり。
- 【八】管葛。管仲、諸葛亮。
- 【九】宣武帝。魏王嗣永康二年、父珽に諡して宣武帝と曰ふ。
- 【一〇】司馬國璠等、魏に降ると、前卷晉の安帝義熙十三年に見ゆ。
- 【一一】慕容廆が昌黎に興るや、封氏、これに依り、遂に世に燕に仕ふ。

を以て、其の一子を宥さんと欲す。玄之曰はく、「弟の子磨奴、早く孤なり。乞ふ其の命を全うせよ」と。乃ち玄之の四子を殺し、而して磨奴を宥す。

六月壬戌、王、建康に至る。傅亮、晉の恭帝に諷して、位を宋に禪らしむ。詔草を具し、帝に呈して之を書せしむ。帝、欣然として筆を操り、左右に謂つて曰はく、「桓玄の時、晉氏已に天下無し。重ねて劉公の延ぶる所と爲ること、將に二十載ならんとす。今日の事、本より甘心する所なり」と。遂に赤紙に書して詔を爲る。甲子、帝、琅邪の第に遜る。百官拜辭す。秘書監徐廣、流涕して哀慟す。丁卯、王、壇を南郊に爲り、皇帝の位に即く。禮畢り、石頭より、法駕を備へ、建康宮に入る。徐廣、又、悲感して流涕す。侍中謝晦、之に謂つて曰はく、「徐公、小過無きを得んや」と。廣曰はく、「君は宋朝の佐命たり、身は是れ晉室の遺老たり。悲歡の事、固より同じかる可からず」と。廣は、邈の弟なり。帝、太極殿に臨みて、大赦し、改元す。其の郷論清議を犯すものは、一に皆蕩滌し、之と更始す。

裴子野論じて曰はく、昔、重華、終を受け、四凶流放せられ、

宋高祖武帝永初元年

- 【一】二十載。晉安帝の元興三年、裕、桓玄を討つ。是に至るまで凡そ十七年。
- 【二】晉の武帝、泰始元年乙酉、禪を受け、建康四年丙子、長安陥る。凡そ五十二年。次の年、元帝、建康に即位して祀を奉じ、建武と改元す。是の年に至るまで凡そ一百三年。西晉東晉を通ずれば一百五十七年なり。
- 【三】小過は少しく過ぐる也。哀慟悲感すること過度なるにあらずやとの意。
- 【四】邈。徐邈。晉の孝武に親重せらる。
- 【五】其の郷論清議を犯す。蓋し罪を名教に得る者。
- 【六】重華。帝舜なり。



武王、殷に克ち、頑民、洛に遷さる。天下の惡は一なり。郷論清議をば、之を除くは過てり。

晉の恭帝を奉じて零陵王と爲す。優崇の禮、皆、晉初の故事に倣ふ。宮に故の 秣陵縣に即く。冠軍將軍劉遵考をして兵を將ゐて防衛せしむ。褚后を降して王妃と爲す。皇考を追尊して孝穆皇帝と爲し、皇妣趙氏を考穆皇后と爲す。王太后 蕭氏を尊びて皇太后と爲す。上、蕭太后に事ふること素より謹む。位に即くに及びて、春秋已に高けれども、且毎に入りて太后に朝すること、未だ嘗て時刻を失はず。詔す、「晉氏の封爵は、當に運に隨つて改むべし」と。獨り 始興・廬陵・始安・長沙・康樂の五公を置き、爵を降して縣公及び縣侯と爲し、以て王導・謝安・溫嶠・陶侃・謝玄の祀を奉ず。其の力を義熙に宣べ、艱難を同じうするに豫かりし者は、一に本秩に仍る。庚午、司空道憐を以て太尉と爲し、長沙王に封ず。司徒道規を追封して臨川王と爲す。道憐の子義慶を以て其の爵を襲がしむ。其餘の功臣徐羨之等、位を増し爵を進むること、各、差有り。劉穆之を追封して南康郡公と爲し、王鎮惡を龍陽縣侯と爲す。上、毎に穆之を歎念して曰はく、「穆之、死せずんば、當に我を助けて天下を治むべし。」人の云に亡ぶる、

- 【一八】 四凶。共工、驩兜、三苗、蘇なり。
- 【一九】 周の武王、殷に克つや、殷の頑民を洛邑に遷せり。
- 【二〇】 秣陵縣。今の江蘇省金陵道江寧縣。その故治は縣を去ること六十里にあり。
- 【二一】 蕭氏。帝の父翹、趙氏を娶る。帝を生みて殂す。室を繼ぐに蕭氏を以てす。
- 【二二】 始興云云。始興郡公を降して華容縣公と爲し、廬陵郡公を柴桑縣公と爲し、始安郡公を荔浦縣侯と爲し、長沙郡公を醴陵縣侯と爲す。
- 【二三】 人云云。詩の瞻卬の篇の辭。

邦國殄瘁す」と謂ふ可し」と。又曰はく、「穆之死して、人、我を輕易す」と。皇子桂陽公義真を立てて廬陵王と爲し、彭城公義隆を宜都王と爲し、義康を彭城王と爲す。己卯、秦始曆を改めて 永初曆と爲す。

魏主、(一) 騫嶺山に如き、遂に 鴻滴池に至る。上禪を受くと聞き、驛をもて崔浩を召し、之に告げて曰はく、(二) 卿が往年の言、驗あり。朕、今日に於て、始めて天道を信す」と。

秋七月丁酉、魏主、五原に如く。

甲辰、詔して、涼公歆を以て都督高昌等七郡諸軍事・征西大將軍・酒泉公と爲し、秦王熾磐を安西大將軍と爲す。

交州の刺史杜慧度、(三) 林邑を撃ち、大に之を破り、殺す所半ばに過ぐ。林邑、降らんと乞ふ。前後、鈔掠せらるる者、皆遣り還す。慧度、交州に在り、政を爲すこと纖密にして、一に、家を治むるが如し。吏民畏れて之を愛す。城門夜開き、道、遺ちたるを拾はず。

丁未、魏主、雲中に如く。

河西王蒙遜、涼を伐たんと欲し、先づ兵を引きて秦の浩臺を攻む。既に至り、師を潜めて還り、川

- 【二四】 元を以て曆を改む。
- 【二五】 騫嶺山。平城西、五原の東に在り。
- 【二六】 鴻滴池。即ち五原の鹽池なり。
- 【二七】 卿が往年の言。浩の言は前卷晉の安帝義熙十四年に見ゆ。
- 【二八】 林邑屢寇を爲す、故に慧度、これを撃つ。



巖に屯す。涼公歆、虚に乗じて張掖を襲はんと欲す。宋繇、張體順、切に諫むれども聽かず。太后尹氏、歆に謂つて曰はく、「汝は新造の國、地狹く民希にして、自ら守るだも猶ほ足らざらんことを懼る。何ぞ人を伐つに暇あらん。」先王、終に臨み、殷勤に汝を戒む、「深く兵を用ふるを慎み、境を保ち民を寧んじ、以て天時を俟て」と。言猶ほ耳に在り。奈何ぞ之を棄つるか。蒙遜は善く兵を用ひ、汝の敵に非ず。數年以來、常に兼并の志有り。汝が國は、小なりと雖も、善政を爲すに足る。徳を脩め民を養ひ、靜にして以て之を待て。彼若し昏暴ならば、民將に汝に歸せんとす。若し其れ休明ならば、汝將に之に事へんとす。豈に輕しく舉動を爲し、非望を僥冀するを得んや。吾を以て之を觀れば、但だ師を喪ふのみに非ず、殆ど將に國を亡ばざんとす」と。亦、聽かず。宋繇、歎じて曰はく、「今茲、大事去りなん」と。歆、步騎三萬を將ゐて東に出づ。蒙遜、之を聞きて曰はく、「歆、已に吾が術中に入れり。然れども吾が師を旋すを聞かば、必ず敢て前まざらん」と。乃ち西境に露布して云はく、「已に浩亶に克ち、將に進みて、黄谷を攻めんとす」と。歆、之を聞きて喜び、進みて都濱澗に入る。蒙遜、兵を引ききて之を撃ち、懷城に戰ふ。歆大に敗る。或るひと歆に勸む、「還りて酒泉に保せよ」と。歆曰はく、「吾、老母の言に違ひ、以て敗を取れり。此の胡を殺さずんば、何の面目ありて

【二九】先王云云。李嵩卒するこ  
と、前卷晉の安帝義熙十三年  
に見ゆ。  
【三〇】露布。檄を露はして其の  
事を布言する也。  
【三一】黄谷。今の甘肅省西寧道  
碾伯縣に在り。  
【三二】都濱澗。今の甘肅省甘涼  
道内に在り。

復た吾が母に見えん」と。遂に兵を勸して蓼泉に戰ひ、蒙遜に殺さる。歆の弟酒泉の太守翻・新城の太守預、羽林右監密・右將軍眺・右將軍亮を領して、西して敦煌に奔る。蒙遜、酒泉に入る。侵掠を禁ず。士民安堵す。宋繇を以て吏部郎中と爲し、之に選舉を委ぬ。涼の舊臣の才望有る者は、咸禮して之を用ふ。其の子牧健を以て酒泉の太守と爲す。敦煌の太守李恂は、翻の弟なり。翻等と與り、涼の太后尹氏を見て之を勞ふ。尹氏曰はく、「李氏、胡に滅ぼさる。知んぬ復た何をか言はん」と。或るひと尹氏に謂つて曰はく、「今、母子の命、人の掌握に在り。奈何ぞ之に傲らん。且つ國亡び子死したるに、曾て憂色無きは、何ぞや」と。尹氏曰はく、「存亡死生は、皆、天命有り。奈何ぞ更に凡人の如く、兒女子の悲を爲さんや。吾は老婦人なり。國亡び家破れ、豈に復た餘生を惜み、人の臣妾と爲る可けんや。惟だ速かに死するを幸と爲すのみ」と。蒙遜、嘉して之を赦し、其の女を娶りて牧健の婦と爲す。

【三三】安帝の隆安四年、李嵩、  
敦煌に據る。凡そ二主、二十  
一年にして滅ぶ。  
【三四】索嗣が死する事、一百十  
卷晉の安帝隆安四年に見  
ゆ。  
【三五】胡。蒙遜は張掖の盧水胡  
なり。

八月辛未、妃臧氏に追諡して敬皇后と爲す。癸酉、王太子義符を立てて皇太子と爲す。  
閏月壬午、詔して、晉帝の諸陵に、悉く守衛を署せしむ。  
九月、秦の振武將軍王基等、河西王蒙遜の胡園の成を襲ひ、二千餘人を俘にして還る。



李恂、敦煌に在り、惠政有り。索元緒、麤險にして殺を好み、大に人の和を失ふ。郡人宋承・張弘、密信をもて恂を招く。冬、恂、數十騎を帥ゐて敦煌に入る。元緒、東して涼興に奔る。承等、恂を推して冠軍將軍・涼州の刺史と爲す。永建と改元す。河西王蒙遜、世子政徳を遣はして敦煌を攻めしむ。恂、城を閉ぢ、戦はず。

十二月丁亥、杏城の羌會狄溫子、三千餘家を帥ゐて魏に降る。是の歳、魏の姚夫人・卒す。昭哀皇后と追諡す。

二年、春正月辛酉、上、南郊に祀り、大赦す。

裴子野・論じて曰はく、夫れ天地を郊祀するは、歳事を修むるなり。彼の有罪を赦すは、夫れ何爲れぞや。

揚州の刺史廬陵王義眞を以て司徒と爲し、尙書僕射徐羨之を尙書令・揚州の刺史と爲し、中書令傅亮を尙書僕射と爲す。

辛未、魏主嗣、行きて公陽に如く。

河西王蒙遜、衆二萬を帥ゐて、李恂を敦煌に攻む。秦王熾磐、征北將軍木奕干・輔國將軍元基を遣はして、上邽を攻めしむ。霖雨に遇うて還る。

三月甲子、魏の陽平王熙・卒す。

魏主、代都の六千人を發して、苑を築く。東は白登を包む、周り三十餘里。河西王蒙遜、隄を築きて水を壅ぎ、以て敦煌に灌ぐ。李恂、降を乞ふ。許さず。恂の將宋承等、城を擧げて降る。恂、自殺す。蒙遜、其の城を屠り、恂の弟の子實を獲、姑臧に囚ふ。是に於て、西域の諸國、皆、蒙遜に詣り、臣と稱して朝貢す。

夏四月己卯朔、詔して、所在の淫祠、蔣子文より以下、皆之を除かしむ。其の先賢、及び勳徳を以て祠を立つる者は、此の例に在らず。

吐谷渾王阿柴、使を遣はして秦に降る。秦王熾磐、阿柴を以て征西大將軍・開府儀同三司・安州の牧・白蘭王と爲す。

六月乙酉、魏主北巡して蟠羊山に至る。秋七月、西巡して河に至る。河西王蒙遜、右衛將軍沮渠鄯善・建節將軍沮渠苟生を遣はし、衆七千を帥ゐて秦を伐たしむ。秦王熾磐、征北將軍木奕干等を遣はし、步騎五千を帥ゐて之を拒がしめ、鄯善等を五澗に敗り、苟生を虜にし、首を斬ること二千にして還る。

初め帝、毒酒一甕を以て、前の琅邪の郎中令張偉に授け、零陵王を酖せしむ。偉、歎じて曰はく、

宋高祖武帝永初二年

【三六】密信。密使なり。  
 【三七】涼興。今の甘肅省安肅道安西縣。  
 【三八】夏に背きて魏に降るなり。  
 【三九】姚夫人が魏に歸ぐこと、一百一十七卷晉の安帝義熙十年に見ゆ。

【一】胡三省曰はく、李氏滅びたれども、李寶卒に此に由りて有唐の基を開く。天の啓く所、誰か能く之を廢せん。  
 【二】安州。秦蓋し吐谷渾の地を以て安州と爲す也。  
 【三】蟠羊山。參合陂の東に在り。今の山西省雁門道陽高縣にあり。  
 【四】五澗。川の名、洪陟嶺の北に在り。今の甘肅省甘涼道武威縣にあり。  
 【五】甕。瓦器なり、かめ。



君を酖して以て生を求むるは、死するに如かず」と。乃ち道に於て自ら飲みて卒す。偉は、邵の子なり。太常褚秀之、侍中褚淡之は、皆、王の妃の兄なり。王、男を生む毎に、帝、輒ち秀之兄弟をして方便して之を殺さしむ。王、位を遜れしより、深く禍の及ばんことを慮り、褚妃と共に一室に處り、自ら食を牀前に煮、飲食の資する所、皆、褚妃に出づ。故に宋人、其隙を伺ふを得る莫し。九月、帝、淡之をして兄の右衛將軍叔度と與に往きて妃を視しむ。妃出でて別室に就きて相見る。兵人、垣を踰えて入り、藥を王に進む。王肯て飲まずして曰はく、「佛教に、自殺する者は、復た人身を得ず」と。兵人、被を以て掩うて之を殺す。帝、百官を帥ゐて、朝堂に臨すること三日。

庚戌、魏主、宮に還る。

冬十月己亥、詔して、河西王蒙遜を以て鎮軍大將軍・開府儀同三司・涼州の刺史と爲す。

己亥、魏主、代に如く。

十一月辛亥、晉の恭帝を冲平陵に葬る。帝、百官を帥ゐて、瞻送す。十二月丙申、魏主、西巡して雲中に至る。

秦王熾磐、征西將軍孔子等を遣はし、騎二萬を帥ゐて、契汗禿眞を羅川に撃たしむ。河西王蒙遜が署する所の晉昌の太守唐契、郡に據りて叛く。蒙遜、世子政徳を遣はして之を討たしむ。契は、瑤の子なり。

上が宋公と爲るや、謝瞻、宋臺の中書侍郎と爲り、其の弟晦、右衛將軍と爲る。時に晦の權遇已だ重く、彭城より都に還りて家を迎ふるに、賓客輻湊し、門巷填咽す。瞻、家に在り、驚駭し、晦に謂つて曰はく、「汝が名位未だ多からず、而るに人歸趣すること乃ち爾り。吾が家、素恬退を以て業と爲し、時事に干豫するを願はず。交游は親朋に過ぎず。而るに汝遂に勢、朝野を傾く。此れ豈に門戸の福ならんや」と。乃ち籬を以て門庭を隔てて曰はく、「吾、此を見るに忍びず」と。彭城に還るに及びて、宋公に言つて曰はく、「臣は本、素士にして、父祖は、位、二千石に過ぎず。弟、年始めて三十、志用凡近なるに、榮、臺府に冠たり、位任顯密なり。福過ぐれば災生ず。其の應、遠きこと無し。特に乞ふ降黜せられて、以て衰門を保たんことを」と。前後屢之を陳ぶ、晦、或は朝廷の密事を以て瞻に語れば、瞻故らに親舊に向つて陳説し、用て戲笑と爲し、以て其の言を絶つ。上が位に即くに及びて、晦、佐命の功を以て、位任益重し。瞻愈憂懼す。是の歲、瞻、豫章の太守と爲り、病に遇ふ。療せず。終に臨み、

宋高祖武帝永初二年

- 【六】 初め帝、揚州の牧を領し、邵を辟して僚屬と爲す。
- 【七】 方便。宜しきに隨つて處分し其の事をして露見せしめざるをいふ。
- 【八】 是より後、禪讓の君、全きを得ること罕れなり。
- 【九】 臨。哭する也。
- 【一〇】 瞻送。みおくり。

- 【一】 羅川。青海の東方に在り。
- 【二】 瑤。唐瑤。一百一十卷晉の安帝隆安四年に見ゆ。
- 【三】 宋臺。上、宋公となる時、宋臺を彭城に建つ。
- 【四】 干豫。關係するなり。



晦に書を遺りて曰はく、「吾、體を啓きて幸に至きを得たり。亦何の恨むる所あらん。弟思うて自ら勉勵し、國の爲めにし家の爲めにせよ」と。

三年、春正月甲辰朔、魏主、雲中より西巡して屋寶城に至る。

癸丑、徐羨之を以て司空と爲す。錄尚書事、刺史たること故の如し。江州の刺史王弘を衛將軍、開府儀同三司と爲し、中領軍謝晦を領軍、將軍、兼散騎常侍と爲し、入りて殿省に直し、宿衛を總統せしむ。徐羨之、布衣より起り、又、術學無く、直に志力局度を以てす。一旦、廊廟に居るや、朝野推服し、威、宰臣の望有りと謂ふ。沈密寡言にして、憂喜を以て色に見はさず。頗る奕碁に工なれども、戲を觀ること、常に未だ解せざるが若し。當世倍、此を以て之を推す。傅亮、蔡廓常に言はく、「徐公は萬事を曉り、異同を安んず」と。嘗て傅亮、謝晦と宴聚す。亮、晦は才學辯博に、羨之は風度詳整、時にして然る後言ふ。鄭鮮之歎じて曰はく、「徐、傅の言論を觀るに、復た學問を以て長と爲さず」と。

秦の征西將軍孔子等、大に契汗禿眞を破り、男女二萬口、牛羊五十餘萬頭を獲たり。禿眞、騎數千

を帥ゐて西に走る。其の別部樹奚、戶五千を帥ゐて秦に降る。

二月丁丑、詔して、豫州の淮以東を分ちて南豫州と爲し、歷陽に治し、彭城王義康を以て刺史と爲す。又、荊州の十郡を分ちて湘州を置き、臨湘に治し、左衛將軍張邵を以て刺史と爲す。

丙戌、魏主、宮に還る。

三月、上、不豫なり。太尉長沙王道憐、司空徐羨之、尚書僕射傅亮、領軍將軍謝晦、護軍將軍檀道濟、竝びに入りて醫藥に侍す。羣臣、神祇に祈禱せんと請ふ。上、許さず。唯だ侍中謝方明をして、疾を以て宗廟に告げしむるのみ。上、性、奇恠を信せず、微なりし時、符瑞多し。貴きに及びて、史官、審かにするに聞く所を以てす。上、拒みて答へず。檀道濟出でて鎮北將軍、南兖州の刺史と爲り、廣陵に鎮し、悉く淮南の諸軍を監す。皇太子、多く羣小に狎る。謝晦、上に言つて曰はく、「陛下、春秋已に高し。宜しく萬世を存するを思ふべし。神器は至重なり。才に非ざるに負荷せしむ可からず」と。上曰はく、

【三】 義熙の初、帝、河南を開拓し豫州の地を綏定せんと欲す。九年に至りて、揚州の大江西、大雷以北を割きて悉く豫州に屬す。是に至りて淮西の地を以て北豫州と爲し、汝南に治す。沈約の志によれば、南豫州は歷陽・南譙・廬江・南汝陰・南梁・晉熙・弋陽・安豐・南汝南・新蔡・東郡・南潁・潁川・西汝陰・沙陽・陳留・南陳左郡・邊城左郡・光城左郡の十九郡を領す。徐志及び永初郡國志によれば、止だ十三郡を領す。

【四】 歷陽。今の安徽省安慶道和縣治。

【五】 湘州。晉の安帝、義熙十三年、湘州を省き、今復た置く。

【六】 臨湘。縣の名、故城は今の湖南省湘江道長沙縣の南に在り。

【七】 晉の成帝、南兖州を立て、京口に治せしが、此より廣陵に治す。廣陵・海陵・山陽・盱眙・秦川・南沛等の郡を領す。廣陵の故城は今の江蘇省淮揚道江都縣の東北に在り。



「廬陵は何如」と。晦曰はく、「臣請ふこれを觀ん」と。出でて廬陵王義真に造る。義真、盛に・與に談せんと欲す。晦、甚だ答へず。還りて曰はく、「德、才よりも輕し。人主に非ざるなり」と。丁未、義真を出して、都督南豫豫雍司秦并六州諸軍事・車騎將軍・開府儀同三司・南豫州の刺史と爲す。是の後、大州は率ね都督を加ふ。多き者は或は、五州に至る。復た詳かに載す可からず。

帝、疾瘳ゆ。己未、大赦す。  
秦雍の流民、南して梁州に入る。庚申、使を遣はし、絹萬匹を送り、且つ荆雍の穀を漕して以て之を賑す。

刁達が誅せらるるや、其の子彌・亡命す。辛酉、彌、數十人を帥ゐて京口に入る。(一)太尉の留府の司馬陸仲元、撃ちて之を斬る。乙丑、魏の河南王曜・卒す。

夏四月甲戌、魏、皇子蕞を立てて太平王と爲し、相國に拜し、大將軍を加ふ。丕を樂平王と爲し、彌を安定王と爲し、範を樂安王と爲し、健を永昌王と爲し、崇を建寧王と爲し、俊を新興王と爲す。  
乙亥、詔して、仇池公楊盛を封じて武都王と爲す。

- 【八】 宋の季に至るまで、境内惟だ二十二州のみ。梁の武帝の時に至り、沿邊に諸州を分置し、始て五十州あり。
- 【九】 秦雍の雍は、古の雍州なり。今の陝西省關中道の地。荆雍の雍は、晉末に置く所の南雍州なり、襄陽に治す。
- 【一〇】 刁達の誅。事、一百三卷晉の安帝元興三年に見ゆ。
- 【一一】 太尉の留府。時に長沙王道憐、太尉を以て京口に鎮し、入りて醫藥に侍す、故に留府あり。

秦王熾磐、折衝將軍乞伏辰を以て西胡校尉と爲し、列渾城を汁羅に築き、以て之に鎮せしむ。

五月、帝、疾甚だし。太子を召し、之を誡めて曰はく、「檀道濟は、幹略有り」と雖も、而も遠志無し。兄詔が御し難きの氣有るが如きに非ざるなり。徐羨之・傅亮は、當に異圖無かるべし。謝晦は、數征伐に従ひ、頗る機變を識る。(二)若し異同有らば、必ず此の人ならん」と。又、手詔を爲りて曰はく、「後世若し幼主有らば、朝事、一に宰相に委ね、母后は朝に臨むを煩はざされ」と。司空徐羨之・中書令傅亮・領軍將軍謝晦・鎮北將軍檀道濟、同じく顧命を被る。

癸亥、(三)帝、西殿に殂す。帝、清簡寡欲、嚴整にして法度有り、被服居處、(四)布素よりも儉なり。遊宴甚だ稀に、嬪御至つて少し。嘗て(五)後秦の高祖の從女を得、盛寵有り、頗る以て事を廢す。謝晦・微諫す。即時に遣り出す。財帛は皆、外府に在り、内に私藏無し。嶺南、嘗て入筒の細布の、一端八丈なるを獻す。帝、其の精麗人を勞するを惡み、即ち有司に付して太守を(六)彈せしめ、布を以て之に還し、并せて嶺南に制して、此の布を作るを禁す。公主出でて適くに、遣送、(七)二十萬に過ぎず、錦繡の物無し。内外の奉禁、敢て侈靡を爲す莫し。太子、皇帝の位に即く。年十七。大赦す。皇

- 【一】 汁羅。青海の東部、羅川の地。
- 【二】 帝、固より、晦を疑ふの心有り。
- 【三】 帝、時に年六十。是より以後、南北朝の君没するは、皆、殂と稱す。
- 【四】 布素。官位無き者。
- 【五】 後秦の高祖。後秦王興の廟を高祖と號す。
- 【六】 彈。彈劾するなり。
- 【七】 二十萬。二十萬錢なり。



太后を尊びて太皇太后と曰ひ、妃司馬氏を立てて皇后と爲す。后は晉の恭帝の女・海鹽公主なり。  
 魏主、寒食散を服し、頻年藥發し、災異屢見はれ、頗る以て自ら憂ふ。中使を遣はして密に白馬  
 公崔浩に問うて曰はく、〔一〕「屬者、日、趙代の分に食す。朕の疾、〔二〕彌年にして愈えず。恐る一旦、  
 不諱ならば、諸子竝に少し、將た之を若何せん。其れ我が爲めに身後の計  
 を思へ」と。浩曰はく、「陛下、春秋富盛なり、行くゆく平愈に就かん。必  
 ず・已むを得ずんば、請ふ誓言を陳べん。聖代龍興してより、儲貳を崇ばず。  
 是を以て 〔三〕永興の始め、社稷幾ど危かりき。今、宜しく早く東宮を建  
 て、賢公卿を選び、以て師傅と爲し、左右の信臣を、以て賓友と爲し、入  
 りては萬機を總べ、出でては戎政を撫せしむべし。此の如くせば、則ち陛  
 下、以て優游無爲にして神を頤ひ壽を養ふ可く、萬歲の後、國に成主有り、  
 民、歸する所有りて、姦宄、望を息め、禍、自つて生ずる無からん。皇子  
 燾、年將に 〔四〕周星ならんとし、明叡溫和なり。子を立つるに長を以てするは、禮の大經なり。若し  
 必ず成人を待ちて、然る後之を擇び、天倫を 〔五〕倒錯するは、則ち亂を召くの道なり」と。魏主、復た  
 以て南平公長孫嵩に問ふ。對てて曰はく、「長を立つるは、則ち順なり。賢を置けば、則ち人服す。燾は  
 長にして且つ賢なり。天の命する所なり」と。帝、之に従ふ。太平王燾を立てて皇太子と爲し、之を

- 【一】 屬者。猶ほ比者・近者と  
言ふがごとし。
- 【二】 彌年。年をわたる。一年  
あまりなり。
- 【三】 事は一百一十五卷晉の安  
帝義熙五年に見ゆ。
- 【四】 周星。歳星は十二年にし  
て一たび天を周る。周星とは  
十二歳をいふ。
- 【五】 倒錯。長を廢し少を立つ  
るを謂ふ。

して正殿に居り、朝に臨み、國の副主と爲らしむ。長孫嵩及び山陽公奚斤・北新公安同を以て左輔と  
 爲し、〔一〕東廂に坐して西面し、崔浩と太尉穆觀・散騎常侍代の人丘堆とを  
 右弼と爲し、西廂に坐して東面し、百官己を總べて以て焉に聽かしむ。  
 帝、避けて西宮に居り、時に 〔二〕隠れて之を窺ひ、其の決斷を聽き、大に  
 悦ぶ。侍臣に謂つて曰はく、「嵩は宿徳の舊臣、〔三〕四世に歴事し、功、社  
 稷を存す。斤は辯捷智謀あり、名、遐邇に聞ゆ。同は俗情を曉解し、事に  
 明練す。觀は政要に達し、吾が旨趣を識る。浩は博聞強識にして、天人を  
 精察す。堆は大用無しと雖も、然も公に在りて専ら謹む。此の六人を以て  
 太子を輔相せば、吾、汝が曹と與に、四境を巡行し、叛を伐ち服を柔んじ、  
 以て志を天下に得るに足らん」と。嵩の實姓は拔拔、斤の姓は達奚、觀  
 の姓は丘穆陵、堆の姓は丘敦なり。是の時、魏の羣臣、代北より出づる者  
 は、〔七〕姓、重複多し。高祖が洛に遷るに及びて、始めて皆之を改む。舊史、  
 其の煩雜にして知り難きを惡み、故に皆後の姓に従ひ、以て簡易に就く。  
 今之に従ふ。魏主、又、典東西劉黎・門下奏事代の人古弼・直郎徒河  
 の盧魯元が忠謹公勤なるを以て、之をして東宮に給侍し、分ちて機要を典り、辭命を宣納せしむ。

- 【一】 東廂に坐する者は西面  
し、西廂に坐する者は東面し、  
皆、皇太子に朝拱す。
- 【二】 隠れて之を窺ふ。自ら其  
身を隱蔽してこれを窺ふ也。
- 【三】 四世に歴事す。嵩、昭武  
帝・道武帝・明元帝及び太子  
燾に事ふ。
- 【七】 姓重複云云。後魏はもと  
鮮卑族なれば、其の姓は、漢  
人のそれの如く、單姓ならず、  
複姓多かりしなり。故にこれ  
を改めて漢人の式に則りしな  
り。即ち達奚斤が奚斤、丘穆  
陵觀が穆觀、丘敦堆が丘堆と  
なりし類なり。
- 【八】 拓跋は慕容段氏と同じく  
鮮卑に出で、其の後、強盛に  
して、東種を徒河と謂ふ。



太子、聰明にして大度有り。羣臣、時に疑ふ所を奏す。帝曰はく、『此れ我が知る所に非ず。當に之を汝が曹の國主に決すべきなり』と。

六月壬申、尙書僕射傅亮を以て中書監・尙書令と爲し、領軍・將軍謝晦を以て中書令を領せしめ、侍中謝方明を丹陽の尹と爲す。方明、善く郡を治め、至る所、能名有り、前人に承代し、其の政を易へず、必ず宜しく改むべき者は、則ち漸を以て移變し、迹の尋ぬ可き無からしむ。

戊子、長沙の景王道憐卒す。

魏の建義將軍刁雍、青州に寇す。州兵、撃ちて之を破る。雍、散卒を收

め、走りて大郷山に保す。

秋七月己酉、武皇帝を初寧陵に葬る。廟を高祖と號す。

河西王蒙遜、前將軍沮渠成都を遣はし、衆一萬を帥る、兵を嶺南に耀かし、遂に五澗に屯す。九月、秦王熾磐、征北將軍出連虔等を遣はし、騎六千を帥るて之を撃たしむ。

初め魏主、高祖の長安に克ちしを聞き、大に懼れ、使を遣はして和を請ふ。是より、每歲交聘すること絶えず。高祖の祖するに及びて、殿中將軍沈範等、使を奉じて魏に在り、還りて河に及ぶ。

【二九】大郷山。今の山東省濟寧道鉅野縣にあり。

【三〇】初寧陵。今の江蘇省金陵道江寧縣蔣山に在り。

【三一】嶺南。洪池嶺の南。

【三二】高祖長安に克つ。高祖は宋の武帝劉裕をいふ。事、前卷晉の安帝義熙十三年に見ゆ。

魏主、人を遣はし、追うて之を執へしめ、兵を發して洛陽・虎牢・滑臺を取らんと議す。崔浩諫めて曰はく、『陛下、劉裕が欵起するを以てせずして、其の使貢を納れ、裕、亦陛下に敬事す。不幸にして今や死す。遽に喪に乗じて之を伐たば、之を得と雖も、美と爲すに足らじ。且つ國家、今日、亦未だ一舉して江南を取る能はざらん。而るに徒らに、喪を伐つの名有るは、竊に陛下の爲めに取らず。臣謂へらく、宜しく人を遣はして弔祭し、其の孤弱を存ひ、其の凶災を恤み、義聲をして天下に布かしむべし。則ち江南攻めずして自ら服せん。

【三三】欵起。忽ちにして起るなり。

【三四】姚興の死云云。事、一百一十七卷晉の安帝義熙十二年及び前卷義熙十三年に見ゆ。

【三五】豐。豊と同じ。

【三六】晉兵・宋兵・吳兵・鄭兵・楚兵等の將軍は皆魏の置く所なり。

帥めて拒ぎ戦はん。功、必ず可からず。之を緩くするに如かず。其の疆臣・權を争ひ、變難必ず起るを待ち然る後將に命じて師を出さば、以て兵・疲勞せずして坐ながら淮北を收む可からん』と。魏主曰はく、『劉裕、姚興の死せるに乗じて之を滅ぼせり。今、我、裕の喪に乗じて之を伐つは、何爲れぞ不可ならん』と。浩曰はく、『然らず。姚興が死するや、諸子交争ふ。故に裕、豊に乗じて之を伐てり。今、江南は豊無し。比す可からざるなり』と。魏主、從はず、司空奚斤に節を假し、晉兵大將軍・行揚州刺史を加へ、宋兵將軍交州の刺史周幾・吳兵將軍廣州の刺史公孫表を督して、同じく入寇せしむ。



乙巳、魏主、〔三〕灑南宮に如き、遂に〔三六〕廣寧に如く。

辛亥、魏人、平城の外郭を築く、周圍三十二里。

魏主、〔三九〕喬山に如き、遂に東して幽州に如く。冬十月甲戌、宮に還る。

魏の軍、將に發せんとし、公卿、監國の前に集議するに、先づ城を攻むる

と先づ地を略するを以てす。奚斤、先づ城を攻めんと欲す。崔浩曰はく、

『南人は城を守るに長せり。昔、苻氏、〔四〇〕襄陽を攻むるや、年を経て、拔け

ざりき。今、大兵を以て、坐ながら小城を攻め、若し時に克たずんば、軍

勢を挫傷し、敵、徐ろに嚴して來るを得ん。我怠り彼銳なるは、此れ危道

なり。軍を分ちて地を略し、淮に至るを限と爲し、守宰を列置し、租穀を收

斂するに如かず。則ち洛陽・滑臺・虎牢は、更に軍北に在り、望を南救に絶

ち、必ず河に沿うて東に走らん。不ずんば則ち囿中の物と爲らん。何ぞ其

の獲ざるを憂へんや』と。公孫表、固く城を攻めんと請ふ。魏主、之に従

ふ。是に於て、奚斤等、步騎二萬を帥りて河を濟り、滑臺の東に營す。時に司州の刺史毛德祖、虎牢

に戍す。東郡の太守、〔四一〕王景度、急を德祖に告ぐ。德祖、司馬翟廣等を遣はし、步騎三千を將りて之を

救はしむ。是より先、司馬楚之、衆を聚めて陳留の境に在り、魏の兵、河を濟ると聞き、使を遣はして

迎へ降る。魏、楚之を以て征南將軍・荊州の刺史と爲し、〔四二〕北境を侵擾せしむ。德祖、長社の令王法政

を遣はし、五百人を將りて、〔四三〕邵陵に戍せしめ、將軍劉憐をして、二百騎を

將りて雍丘に戍せしめ、以て之に備ふ。楚之、兵を引きて憐を襲ふ。克た

ず。會、臺、軍資を送る。憐出でて之を迎ふ。〔四四〕酸棗の民王玉、馳せて以

て魏に告ぐ。丁酉、魏の尙書滑稽、兵を引ききて、〔四五〕倉垣を襲ふ。兵吏悉く

城を踰えて走る。陳留の太守馮翊の嚴稜、斤に詣りて降る。魏、王玉を以

て陳留の太守と爲し、兵を給して倉垣を守らしむ。奚斤等、滑臺を攻め、拔

けず。兵を益さんことを求む。魏主怒りて之を切責す。壬辰、自ら諸國の

兵五萬餘人を將り、南して天關に出で、〔四六〕恒嶺を踰え、斤等の聲援を爲す。

秦の出連度、河西の、〔四七〕沮渠成都と戦ひ、之を禽にす。

十一月、〔四八〕魏の太子燾、兵を將り、出でて塞上に屯し、安定王彌をして

安と同じく居守せしむ。庚戌、奚斤等、急に滑臺を攻め、之を拔く。王景

度出で走る。景度の司馬陽瓚、魏に執へられ、降らずして死す。魏主、成

阜侯苟兒を以て、兗州の刺史と爲し、滑臺に鎮せしむ。斤等、進みて翟廣

等を、〔四九〕土樓に撃ち、之を破る。勝に乗じ、進みて虎牢に逼る。毛德祖與に戦ひ、屢、之を破る。魏主、

宋高祖武皇帝永初三年

三五九

〔三〕 灑南宮。灑は灑。今の山西の桑乾河、その河南にある宮殿なり。

〔三六〕 廣寧。今の直隸省口北道宣化縣にあり。

〔三九〕 喬山。今の直隸省口北道涿鹿縣に在り。

〔四〇〕 襄陽を攻む云云。事、一百四卷晉の孝武太元二年四年に見ゆ。

〔四一〕 王景度。東郡の太守を以て滑臺に戍す。

〔四二〕 北境。宋の北境をいふ。

〔四三〕 邵陵。縣の名、今の河南省開封道鄆城縣。

〔四四〕 酸棗。縣の名、漢より以來、陳留郡に屬す。故城は今の河南省河北道延津縣の北に在り。

〔四五〕 倉垣。城の名、陳留郡浚儀縣に在り。今の河南省開封道開封縣に在り。

〔四六〕 沮渠成都。時に五澗に屯す。

〔四七〕 魏主、南して、河南を攻むるの兵を援く。故に太子、塞上に屯し、以て柔然に備ふるなり。

〔四八〕 土樓。虎牢の東に在り。今の河南省開封道汜水縣に在り。



別に黑稍將軍于栗磾を遣はし、三千人を將ゐて、河陽に屯せしめ、金墉を取らんと謀る。徳祖、振威將軍寶晃等を遣はし、河に緣りて、之を拒がしむ。十二月丙戌、魏主、冀州に至る。楚兵將軍徐州の刺史叔孫建を遣はし、兵を將ゐて平原より河を濟り、青兗を徇へしむ。豫州の刺史劉粹、治中高道瑾を遣はし、步騎五百を將ゐて項城に據らしむ。徐州の刺史王仲徳、兵を將ゐて湖陸に屯す。于栗磾、河を濟り、奚斤と力を并せ、寶晃等を攻め、之を破る。魏主、中領軍代の人娥清・期思侯柔然の閭大肥を遣はし、兵七千人を將ゐて、周幾・叔孫建に會し、南して河を渡り、碭碭に軍せしむ。癸未、兗州の刺史徐琰、尹卯を棄てて南に走る。是に於て泰山・高平・金郷等の郡、皆魏に没す。叔孫建等、東して青州に入る。司馬愛之・季之、先に衆を濟東に聚め、皆魏に降る。戊子、魏の兵、虎牢に逼る。青州の刺史東莞の竺夔、東陽城に鎮し、使を遣はして急を告ぐ。己丑、南兗州の刺史檀道濟に詔して、征討諸軍事を監し、王仲徳と共に之を救はしむ。廬陵王義眞、龍驤將軍沈叔狸を遣はし、三千人を將ゐて劉粹に就き、宜を量りて赴き援けしむ。

秦王熾磐、秦州の牧曇達を徵して、左丞相・征東大將軍と爲す。

營陽王

景平元年 春正月 己亥朔、大赦し、改元す。

辛丑、帝、南郊に祀る。

魏の子栗磾、金墉を攻む。癸卯、河南の太守王涓之、城を棄てて走る。

魏主、栗磾を以て豫州の刺史と爲し、洛陽に鎮せしむ。

魏主、南して恒嶽を巡る。丙辰、鄴に至る。

己未、詔して、豫章の太守蔡廓を徵して、吏部尙書と爲す。廓、傅亮に謂つて曰はく、『選事、若し悉く以て付せられんには、論せず。然らずんば、拜する能はざるなり』と。亮、以て錄事尙書徐羨之に語る。羨之曰はく、『黄散以下は、悉く以て蔡に委ねん。吾徒らに復た懷に措かじ。此より以上は、故に宜しく共に同異を參すべし』と。廓曰はく、『我、徐干木の爲めに紙尾に署する能はず』と。遂に拜せず。干木は羨之の小子なり。選案の黄紙には、錄尙書と吏部尙書と名を連ぬ。故に廓、然云ふ。

宋營陽王景平元年

【四九】豫州。宋の豫州は、汝南・新蔡・譙・梁・陳・南頓・潁川・汝陽・汝陰・陳留等の郡を領す。

【五〇】徐州は彭城・沛・下邳・蘭陵・東海・東莞・東安・琅邪・淮陽・陽平・濟陰・北濟陰・鍾離・馬頭等の郡を領す。

【五一】湖陸。故城は今の山東省濟寧道魚臺縣に在り。

【五二】碭碭。城、河津に臨む、後魏、濟州の治所と爲す。故の在平城なり。今の山東省東臨道在平縣の東南に在り。

【五三】尹卯、今の山東省濟南道東阿縣にあり。

【五四】濟水の東は即ち青州の界なり。

【五五】青州は齊・濟南・高密・樂安・平昌・北海・東萊・太原・長廣等の郡を統ぶ。

【五六】東陽城。今の山東省膠東道益都縣の東に在り。

【五七】廬陵王義眞。時に壽陽に鎮す。

【五八】劉粹。時に懸瓠に鎮す。

【一】營陽王。諱は義符、小子は車兵、武帝の長子なり。

【二】景平元年。西紀四二三年なり。

【三】去年十二月、己に魏主、冀州に至る」と書し、今又、「南して恒嶽を巡る」と書す。必ず一の誤有らん。

【四】吏部尙書。晉より以來、吏部尙書を大尙書と謂ふ。其の諸曹の右に在りて且つ其の權任要重なるを以てなり。

【五】選事云云。若し諸官を選擧する事を、悉く我に委任せらるるならば、異議なく拜命すべしとの意。

【六】錄事尙書。常に錄尙書事又は錄尙書に作るべし。

【七】黄散。黄門侍郎及び散騎



沈約・論じて曰はく、蔡廓固く銓衡を辭し、志屈するを爲すを恥づ。豈に選と録とは同體にして、義、偏斷無きを知らざらんや。良に主

聞く時難きを以て、通塞の任に居るを欲せざるなり。遠きかな。庚申、檀道濟、彭城に軍す。魏の叔孫建、臨淄に入る。向ふ所の城邑皆潰ゆ。竺夔、民を聚めて東陽城に保し、其の城に入らざる者は、各山險に依據して禾稼を芟夷せしむ。魏の軍至り、食を得る所無し。濟南の太守(三)垣苗、衆を帥ゐて夔に依る。刁雍、魏主に鄴に見ゆ。魏主曰はく、

「叔孫建等、青州に入るに、民皆藏避し、城を攻むれども下らず。(三)彼は素より卿の威信に服せり。今卿を遣はして之を助けしめん」と。乃ち雍を以て青州の刺史と爲し、雍に騎を給し、行くゆく兵を募りて以て青州を取らしむ。魏の兵、河を濟り青州に向ふ者、凡そ六萬騎。刁雍、兵を募りて五千人を得、士民を撫慰す。皆、租を送りて軍に供す。

柔然、魏の邊に寇す。二月戊辰、魏、長城を築き、赤城より、西は五原に至る、延袤二千餘里。戍卒を備置し、以て柔然に備ふ。丁丑、太皇太后蕭氏・殂す。

河西王蒙遜及び吐谷渾王阿柴、皆、使を遣はして入貢す。庚辰、詔して蒙遜を以て都督涼秦河沙四州諸軍事・驃騎大將軍・涼州の牧・河西王と爲し、阿柴を以て督塞表諸軍事・安西將軍・沙州の刺史・澆河公と爲す。

三月壬寅、孝懿皇后を興寧陵に葬る。

魏の奚斤・公孫表等、共に虎牢を攻む。魏主、鄴より兵を遣はして之を助く。毛德祖、城内に於て地に穴ほり、入ること七丈、分ちて六道と爲し、魏の圍の外に出で、敢死の士四百人を募り、參軍范道基等をして之を帥ゐて、穴中より出で、其の後を掩撃せしむ。魏の軍驚き擾る。斬首數百級。其の攻具を焚きて還る。魏の兵、退き散すと雖も、隨つて復た更に合ひ、之を攻むること益々急なり。奚斤、虎牢より、歩騎三千を將ゐて、潁川の太守李元德等を許昌に攻む。元德等敗走す。魏、潁川の人庾龍を以て潁川の太守と爲し、許昌に戍せしむ。毛德祖、兵を出して、公孫表と大に戦ひ、朝より晡に至り、魏の兵數百を殺す。會、奚斤、許昌より還り、德祖を合撃し、大に之を破る。甲士千餘人を亡ふ。復た城に嬰りて自ら守る。魏主、又、萬餘人を遣はし、白沙より河を度り、(二)濮陽の南に屯せしむ。朝議以へらく、項城は魏を去ること遠からず、輕軍の抗する所に非ずと。劉粹をし

宋營陽王景平元年

- 【一】 常侍侍郎を謂ふ。
- 【二】 選案の黃紙。選案は選曹の文案なり。制敕は黃紙を用ふ。
- 【三】 選と録と。吏部は選を主り、錄尙書は、諸曹尙書の事を兼れ録す。
- 【四】 偏斷。吏部と錄尙書と合議せずして一方に於て斷するをいふ。
- 【五】 通塞。銓衡の任、其の人を得るときは、則ち賢路通じ、其の人を得ざるときは、則ち賢路塞がる。
- 【六】 垣苗、歷城を棄てて夔に依る。
- 【七】 雍、先に兵を河濟の間に聚む。
- 【八】 赤城。今の直隸省口北道赤城縣。

- 【一】 塞表。塞外なり。吐谷渾は塞外沙嶺の地に居る、故に塞表の諸軍事を督せしむ。
- 【二】 孝懿皇后。太皇太后蕭氏の諡。
- 【三】 興寧陵。今の江蘇省金陵道丹徒縣に在り。
- 【四】 白沙。今の直隸省大名道清豐縣にあり。
- 【五】 濮陽。今の直隸省大名道濮陽縣。當時の黄河の河道は今日よりも北にありし也。



て高道瑾を召して壽陽に還らしめ、「若し沈叔狸已に進まば、亦宜しく且つ追ふべし」といふ。粹・奏すらく、「虜、虎牢を攻め、未だ復た南に向はず。若し遽に軍を攝めて項城を捨てば、則ち淮西の諸郡、憑依する所無からん。沈叔狸、已に肥口に頓まる。又宜しく遽に退くべからず」と。時に李元徳、散卒二百を帥ゐて項に至る。劉粹、(元徳ヲ)高道瑾を助けて成守せしめ、其の奔敗の罪を宥されんことを請ふ。朝議竝に之を許す。乙巳、魏主、韓陵山に敗し、遂に汲郡に如き、枋頭に至る。初め毛徳祖、北に在るとき、公孫表と舊有り。表、權略有り、徳祖、之を患ふ。乃ち與に音問を交通し、密に人を遣はして奚斤に説きて云はしむ、「表、之と謀を連ね、表書に答ふる毎に、治定する所多し」と。表、書を以て斤に示す。斤、之を疑ひ、以て魏主に告ぐ。是より先、表、太史令王亮と、少きとき營署を同じうし、好みて亮を輕侮す。亮、表を奏すらく、「軍を虎牢の東に置き、便地を得ず、故に賊をして時に滅びさらしむ」と。魏主、素より術數を好み、以て然りと爲し、前後の忿りを積み、人をして夜帳中に就きて、之を縊殺せしむ。乙卯、魏主、靈昌津より濟り、遂に東郡・陳留に如く。叔孫建、三萬騎を將ゐて、東陽城に逼る。城中の文武、纔に一千五百人、竺夔・垣苗、力を悉して固く守る。時に奇兵を出して魏を撃ち、之を破る。魏の歩

- 【一】肥口。肥水の淮に入るの口。今の安徽省淮河道壽縣に在り。
- 【二】韓陵山。魏郡の鄴縣に在り。今の河南省河北道安陽縣の東北に在り。
- 【三】北に在り。毛徳祖はもと滎陽の人、武帝未だ關洛を取らざるとき、徳祖、北より來歸す。
- 【四】靈昌津。古の延津なり。今の河南省河北道濟縣の渡津なり。

騎、城を繞りて陳を列すること十餘里、大に攻具を治む。夔、四重の塹を作る。魏人、其の三重を填め、(二)撞車を爲りて以て城を攻む。夔、人を遣はして地道の中より出でしめ、大麻縋を以て之を挽き、折らしむ。魏人復た長圍を作り、進み攻むること逾急なり。時を歴ること浸く久しく、城轉た墮壞し、戰士、死傷多く、餘衆困乏し、且暮且に陥らんとす。檀道濟、彭城に至り、以へらく、司青二州竝に急なり。而れども領する所の兵少く、分ち赴くに足らず。青州は道近く、竺夔の兵は弱しと。乃ち王仲徳と與に兼行し、先づ之を救ふ。甲子、劉粹、李元徳を遣はし、許昌を襲ひ、庾龍を斬る。元徳因つて留まりて綏撫し、并に租糧を上る。魏主、盟津に至る。于栗磾、浮橋を冶阪津に造る。乙丑、魏主、兵を引き北に濟り、西して河内に如く。娥清・周幾、閭大肥、地を徇へて湖陸に至る。高平の民、屯聚して之を射る。清等盡く高平の諸縣を攻め破り、數千家を滅ぼし、萬餘口を虜掠す。兗州の刺史鄭順之、湖陸に成し、兵少きを以て、敢て出でず。魏主、又、并州の刺史伊樓拔を遣はし、奚斤を助けて虎牢を攻めしむ。毛徳祖、方に隨つて抗拒し、頗る魏の兵を殺す。而れども將士稍零落す。夏四月丁卯、魏主、成阜に如き、虎牢の汲河の路を絶ち、停まること三日、自ら衆を督して城を攻む。竟に下す能はず。遂に洛陽に如き、石經を觀、使を遣はして、

- 【一】撞車。撞車。撞は搗く也。
- 【二】縋。大索なり。
- 【三】墮。墮と通ず。毀るる也。
- 【四】冶阪。洛陽の西北四十二里に在り。
- 【五】汲河。河より水を汲むなり。
- 【六】石經。後漢の蔡邕の書する所。五十七卷漢の靈帝喜平五年に見ゆ。



嵩高を祀る。叔孫建、東陽を攻め、其の北城三十許歩を墮る。刁雍、速かに入らんと請ふ。建許さず。遂に克たず。檀道濟等將に至らんとすと聞くに及びて、雍、又、建に謂つて曰はく、「賊、官軍の突騎を畏れ、鎖を以て車を連ねて、函陳を爲る。大峴已南は、處處狹隘にして、車、軌を方ふるを得ず。雍請ふ。募る所の兵五千を將ひ、險に據りて以て之を邀へん。之を破らんこと必せり」と。時に天暑く、魏の軍多く疫す。建曰はく、「兵人、疫病半ばに過ぐ。若し相持して休せずんば、兵自ら死して盡きん。何を須ひてか復た戦はん。今、軍を全くして返るは、計の上なり」と。己巳、道濟、臨朐に軍す。壬申、建等、營及び器械を燒きて遁る。道濟、東陽に至り、糧盡き、追ふ能はず。竺夔、東陽城壞れて守る可からざるを以て、移りて不其城に鎮す。叔孫建、東陽より、滑臺に趨く。道濟、王仲德を分遣して尹卯に向はしむ。道濟、軍を湖陸に停む。仲德未だ尹卯に至らず、魏の兵已に遠きを聞き、還りて道濟に就く。刁雍遂に留まりて尹卯に鎮し、譙、梁、彭、沛の民五千餘家を招集し、二十七營を置き、以て之を領す。蠻王梅安、梁帥數十人を帥ひて、魏に入貢す。初め諸蠻、本、江淮の間に居る。其の後、種落滋蔓し、數州に布く。東は壽春に連なり、西は巴蜀に通じ、北は汝潁に接るまで、往往に之れ有り。魏の世に在りて、甚だしく患を爲さず。晉に及びて稍益繁昌し、漸く寇暴を爲す。劉石が中原を亂るに及びて、諸蠻、忌憚する所無く、漸く復た北に徙り、伊闕以南、山谷に滿つ。

【三〇】 函陳。方陳なり。

【三一】 不其城。今の山東省膠東道即墨縣の西南に在り。

河西の世子政徳、晉昌を攻め、之に克つ。唐契及び弟和、明李寶、同じく伊吾に奔り、遺民を招集す。歸附する者、二千餘家に至る。柔然に臣たり。柔然、契を以て伊吾王と爲す。

秦王熾磐、其の羣臣に謂つて曰はく、「今、宋は江南を奄有し、夏人は關中に雄據すと雖も、皆與するに足らざるなり。獨り魏主は奕世英武にして、賢能、用を爲す。且つ讖に云はく、「恒代の北、當に真人有るべし」と。吾將に國を擧げて之に事へんとす」と。乃ち尙書郎莫者阿胡等を遣はして魏に入見せしめ、黄金二百斤を貢し、并に夏を伐つの方略を陳ぶ。

閏月丁未、魏主、河内に如き、太行に登り、高都に至る。叔孫建、滑臺より、西して奚斤に就き、共に虎牢を攻む。虎牢、圍まるること二百日、

【三二】 唐契、晉昌を以て河西に叛くこと、武帝永初二年に見ゆ。  
【三三】 高都。縣、今の山西省冀寧道鳳臺縣にあり。

日として戦はざる無し。勁兵戦死して殆ど盡く。而して魏、兵を増すこと轉た多し。魏人、其の外城を毀つ。毛徳祖、其の内に於て、更に三重の城を築き、以て之を拒ぐ。魏人、又、其の二重を毀つ。徳祖、唯だ一城を保ち、晝夜相拒ぐ。將士の眼皆創を生ず。徳祖、之を撫するに恩を以てす。終に離心無し。時に檀道濟、湖陸に軍し、劉粹、項城に軍し、沈叔狸、高橋に軍し、皆、魏の兵の彊きを畏れ、敢て進まず。丁巳、魏人、地道を作り、以て虎牢城中の井を洩らす。井の深さ四十丈。山勢峻峭にして、得て防ぐ可からず。城中、人馬渴乏し、創を被むる者、復た血を出さず。重ぬるに飢疫を以てす。魏仍て急に之を攻む。己未、城陷る。將士、



德祖を扶けて出で走らんと欲す。德祖曰はく、「我、此の城と俱に斃れんと誓へり。義として・城亡びて身存せしめざるなり」と。魏主、將士に命ず、「德祖を得る者は、必ず之を生致せよ」と。將軍代の人、豆代田、德祖を執へて以て獻す。將佐、城中に在る者、皆、魏に虜とせらる。唯だ參軍范道基、二百人を將る、圍を突きて南に還る。魏の士卒疫死する者、亦、什に二三。奚斤等、悉く、司兗豫の諸郡縣を定め、守宰を置き以て之を撫す、魏主、周幾に命じて河南に鎮せしむ。河南の人安之、徐羨之、傅亮、謝晦、境土を亡失するを以て、上表して自ら効す。詔して、問ふ勿からしむ。

徐羨之の兄の子、吳郡の太守珮之、頗る政事に豫り、侍中王韶之、程道惠、中書舍人邢安泰、潘盛と、結びて黨友と爲る。時に謝晦久しく病み、客を見るに堪へず。珮之等、其の詐り疾みて異圖有らんことを疑ひ、乃ち羨之の意と稱し、以て傅亮に告げ、亮をして、詔を作らしめて之を誅せんと欲す。亮曰はく、「我等三人、同じく顧命を受く。豈に自ら相誅戮す可けんや。諸君果して此の事を行はば、亮、當に角巾歩いて、掖門を出づべきのみ」と。珮之等乃ち止む。

五月、魏主、平城に還る。  
六月己亥、魏の宜都の文成王穆觀、卒す。

丙辰、魏主、北巡し、參合陂に至る。

秋七月、帝の母張夫人を尊びて皇太后と爲す。

魏主、三會の屋侯泉に如く。八月辛丑、馬邑に如き、溼源を觀る。

柔然、河西に寇す。河西王蒙遜、世子政德に命じて之を撃たしむ。政德、輕騎にて進み戦ひ、柔然に殺さる。蒙遜、次子興を立てて世子と爲す。

九月乙亥、魏主、宮に還る。奚斤を召して平城に還らしめ、兵を留めて虎牢を守らしめ、娥清・周幾をして枋頭に鎮せしむ。司馬楚之が將る所の戸口を以て、汝南・南陽・南頓・新蔡の四郡を置き、以て豫州に益す。

冬十月癸卯、魏人、西宮の外垣を廣む。周り二十里。

秃髮儁檀が死するや、河西王蒙遜、人を遣はして其の故の太子虎臺を誘はしめ、許すに、番禾・西安の二郡に之を處き、且つ之に兵を借し、秦を伐ちて其の父の讐を報じ、故の地を復取せしむるを以てす。虎臺、陰に之を許す。事泄れて止む。秦王熾磐の后は、虎臺の妹なり。熾磐之を待つこと初めの如し。后密に虎臺と謀りて曰はく、「秦は本我の仇讎なり。婚姻を以て之を待つと雖も、蓋し時宜のみ。先王の薨するや、又、天命に非ず、遺令して治せざらしむるは、子孫を全濟せんと

【三四】 豆は姓、代田は名。  
【三五】 司兗豫云云。是の時、司州の地、盡く魏に入る。兗州の地は、湖陸より以南、豫州の地は、項城より以南、皆、宋の爲めに守る。魏未だ悉く諸郡縣を定むる能はざるなり。  
【三六】 掖門。宮門の正南門を端門と曰ひ、左右の二門を左掖門・右掖門と謂ふ。

【三七】 三會。今の山西省雁門道忻縣に在り。

【三八】 晉の惠帝、汝陰を分ちて新蔡郡を立て、汝南を分ちて南頓郡を立て、魏未だ四郡の地を有する能はず、これを備置するのみ。

【三九】 西宮。平城の西宮なり。魏主珪が天賜元年に築く所。

【四〇】 儁檀の死。事、一百十六卷晉の安帝義熙十年に見ゆ。  
【四一】 遺令して治せざらしむ。鳩を被りて解かざるを謂ふ。事、一百一十六卷晉の安帝義熙十年に見ゆ。



欲したるが故なり。人の子たる者、豈に仇讎に臣妾となりて・而も報復を思はざる可けんや」と。乃ち武衛將軍越質洛城と與に、熾磐を弑せんと謀る。後の妹、熾磐の左夫人たり、(寵有)其の謀を知りて之を告ぐ。熾磐、后及び虎臺等十餘人を殺す。

十一月、魏の周幾、許昌に寇す。許昌潰ゆ。潁川の太守李元徳、項に奔る。戊辰、魏人、汝陽を圍む。汝陽の太守王公度も亦項に奔る。劉粹、其の將姚聳夫等を遣はし、兵を將ゐて、助けて項城を守らしむ。魏人、許昌城を夷げ、鍾城を毀ち、以て封疆を立てて遷る。

己巳、魏の太宗殂す。壬申、世祖、位に即く。大赦す。十二月庚子、魏、明元帝を金陵に葬り、廟を太宗と號す。魏主、其の母杜貴嬪を追尊して、密皇后と爲す。司徒長孫嵩より以下、普く爵位を増す。襄城公盧魯元を以て中書監と爲し、會稽公劉瓘を尙書令と爲す。司衛監尉眷・散騎侍郎劉庫仁等八人、分ちて四部を典る。眷は古眞の弟の子なり。河内の鎮將代の人羅結を以て侍中、外都大官と爲し、三十六曹事を總べしむ。結時に年一百七、精爽、衰へず。魏主、其の忠愍なるを

【四二】鍾城は泰山の界に在り。今の山東省東臨道禹城縣の東南に在り。許昌を夷げて以て豫州の封疆を立て、鍾城を毀ちて以て兗州の封疆を立つるなり。

【四三】魏の太宗明元帝、殂するとき、年三十二。

【四四】世祖、諱は燾、字は佛理、明元皇帝の長子なり。

【四五】金陵、雲中の金陵なり。

【四六】密、諡なり。

【四七】司衛監は魏の置く所の官なり、以て宿衛を掌る。

【四八】四部、東西南北の四部。

【四九】尉古眞は一百六卷管の孝武太元十一年に見ゆ。

【五〇】魏に外都大官・内都大官あり。

以て、之を親任し、(之ヲ)長秋卿を兼ね、後宮を監典し、臥内に入らせしむ。年一百一十にして、乃ち歸老を聽す。朝廷、大事有る毎に、騎を遣はして焉に訪ふ。又、十年にして、乃ち卒す。左光祿大夫崔浩、經術を研精し、制度を練習す。凡そ朝廷の禮儀、軍國の書詔、關掌せざるは無し。浩、老莊の書を好まず、曰はく、「此れ矯誣の説にして、人情に近からず。老聃は禮に習ひ、仲尼の師とする所なり。豈に肯て法を敗るの書を爲り、以て先王の治を亂らんや」と。尤も佛法を信せず、曰はく、「何爲れぞ此の胡神に事へんや」と。世祖が位に即くに及びて、左右多く之を毀る。帝、己むを得ずして、浩に命じて、公を以て第に歸らしむ。然れども素より其の賢なるを知り、疑議有る毎に、輒ち召して之に問ふ。浩、(五)織妍潔白にして、美婦人の如し。常に自ら謂へらく、「才は張良に比び、而して稽古は之に過ぎたり」と。既に第に歸り、因つて服食養性の術を修む。初め嵩山の道士寇謙之は、讚の弟なり。(五)張道陵の術を修め、自ら言ふ、嘗て老子の降るに遇へり。謙之に命じ、道陵に繼ぎて天師と爲らしめ、授くるに辟穀輕身の術及び科戒二十卷を以てし、之をして道教を清整せしむ。又、神人李譜文に遇へり。云はく、「老子の玄孫なり」と。授くるに圖籙真經六十餘卷を以てし、

【五一】聖賢に託して以て其の説を神にするを矯と謂ひ、聖賢に是の事無きに、寓言して証を加ふるを誣と謂ふ。

【五二】史記及び小戴禮、皆云ふ、仲尼、禮を老聃に問ふと。

【五三】織妍、細やかにして美好なるをいふ。

【五四】稽古、古の學藝等を學習研究するをいふ。

【五五】張道陵、後漢の人なり、五斗米道、即ち後の道教を修む、俗に所謂天師なり。

【五六】今の道家の科戒は蓋し此に始まる。



之をして北方の太平眞君を輔佐し、天宮靜輪の法を出さしむ。其の中の數篇は、李君の手筆なりと。謙之、其の書を奉じて魏主に獻す、朝野多く未だ之を信せず。崔浩獨り之に師事し、從つて其の術を受け、且つ上書し、其の事を贊明して曰はく、『臣聞く、聖王、命を受くるや、必ず天應有り。』河圖・洛書は、皆、言を蟲獸の文に寄す。未だ今日の、人神接對し、手書榮然たるが若くならず。辭旨深妙なること、古より比無し。豈に世俗の常慮を以てして上靈の命を忽せにす可けんや。臣竊に之を懼る』と。帝・欣然として、謁者をして、玉帛牲牢を奉じて嵩嶽を祭り、謙之の弟子の・山中に在る者を迎へ致さしめ、以て天師を崇奉し、新法を顯揚し、天下に宣布し、天師の道場を平城の東南に起し、重壇五層、道士百二十人の衣食を給し、毎月、厨を設け、數千人を會す。

臣光曰はく、老莊の書は、大指、死生を同じうし去就を輕んせんと欲す。而るに神倦を爲むる者は、餌を服し修鍊し、以て輕舉せんことを求め、草石を鍊りて金銀と爲さんとす。其の術たるや、正に相戾れり。是を以て、劉歆の七略には、道家を叙して諸子と爲し、神仙を方技と爲す。其の後、復た符水禁呪の術有り。謙之に至りて、遂に合して一と爲し、今に至るまで之に循ふ。其の訛甚だし。崔浩、佛老の書を喜ばずして、謙之の言を信するは、其の故何ぞや。昔、臧文仲、爰居を祀り、孔子、以て不智と爲せり。謙

【五〇】河圖洛書。黄河、圖を出し、伏羲象どりて以て八卦を畫す。洛水、書を出して、禹これを得、以て九疇を叙す。上古の傳説なり。  
【五九】符水禁呪の術。即ち張道陵の術なり。  
【六〇】爰居。海鳥なり。爰居、風を避けて魯の東門の外に止

之の如きは、其の爰居(類)たること亦大なり。『詩三百、一言以て之を蔽へば、曰はく、思、邪無し』と。君子の術を擇ぶに於ける、慎まざる可けんや。

まる。臧文仲、國人をして之を祀らしむ。孔子以爲へらく、臧文仲、不智なる者、三あり、爰居を祀るは、其の一なりと。



卷の第一百二十

宋紀二

太祖文皇帝上の上

元嘉元年、春正月、魏、始光と改元す。

丙寅、魏の安定の殤王彌卒す。

營陽王、喪に居りて禮無く、好みて左右と狎暱し、遊戯、度無し。特進致仕范泰、封事を上りて曰はく、「伏して聞く、陛下時に後園に在り、頗る武備を習ふと。鼓鞞、宮に在り、聲、外に聞ゆ。武を掖庭の内に黷し、省闈の間に誼諱するは、徒に以て四夷を威すに足らざるのみに非ず、祗に遠近の怪を生ぜん。陛下、踐祚して、政を宰臣に委ぬるは、實に高宗の諒闇の美に同じ。而るに更に小人を親狎するは、懼らくは社稷の至計。經世の道に非ざらん」と。聽かず。泰は、齊の子なり。南豫州の刺史廬陵王義眞は、警悟にして文義

宋太祖文皇帝元嘉元年

- 【一】太祖。諱は義隆、小字は車兒、武帝の第三子なり。
- 【二】元嘉元年。西紀四二四年なり。是の年八月改元す。
- 【三】鞞。鞞と同じ。
- 【四】范泰は汪の子、儒學を以て孝武帝に親しまる。



を愛す、而れども性輕易なり。太子の左衛率謝靈運、員外常侍顔延之、慧琳道人と、情好歎密なり。嘗て云はく、「志を得るの日、靈運・延之を以て宰相と爲し、慧琳を西豫州の都督と爲さん」と。

靈運は玄の孫なり。性褊傲にして、法度に違はず。朝廷、但だ文義を以て之を處し、以て實用有りと爲さず。靈運自ら謂へらく、才能宜しく權要に參すべしと。常に憤邑を懷く。延之は含の曾孫なり。酒を嗜みて放縱なり。徐羨之等、義眞が靈運等と遊ぶを惡む。義眞の故の吏范晏、從容として之を戒む。義眞曰はく、「靈運は空疎、延之は隘薄、魏の文帝の所謂「古今の文人、類ね細行を護らざる者なり。但だ性情の得る所、未だ言を悟賞に忘るる能はざるのみ」と。是に於て、羨之等以爲へらく、靈運・延之、異同を構扇し、執政を非毀すと。靈運を出して永嘉の太守と爲し、延之を始安の太守と爲す。義眞、歷陽に在り、求索する所多し。執政毎に裁量し、盡くは與へず。義眞深く之を怨み、數、不平の言有り。又、表して、都に還らんことを求む。諮議參軍廬江の何尚之、屢、諫むれども聽かず。時に羨之等、已に密に帝を廢せんことを謀る。而れども次ぎて立つ者は、應に義眞に在るべし。乃ち義眞が帝と隙有るに因りて、先づ其の罪惡を奏列し、廢して庶人と爲し、新安郡に徙す。

- 【五】西豫州。即ち豫州なり。宋の南豫州は歷陽に治し、豫州は壽陽に治す。壽陽は歷陽の西に在り、故に亦、豫州を西豫州と謂ふ。
- 【六】靈運。玄の子の奐の子なり。有名なる詩人なり。
- 【七】憤邑。憤懣なり。邑は愠と通す。
- 【八】顔含は九十六卷晉の成帝咸康四年に見ゆ。
- 【九】悟賞。開覺と褒嘉となり。
- 【一〇】裁量。裁は節する也。量は度る也。

前の吉陽の令堂邑の張約之上疏して曰はく、「廬陵王、少うして先皇の優慈の遇を蒙り、長じて陛下の睦愛の恩を受く。故に心に在れば必ず言ひ、懷ふ所は必ず亮かにす。驕恣の愆を致招せん。天姿の夙成に至りては、實に卓然たるの美有り。宜しく容養し、善を録し瑕を掩ひ、義方を訓へ盡し、進退すること漸を以てするに在るべし。今猥りに剝辱を加へ、遠郡に幽徙せば、上は陛下の常棣の篤きを傷つけ、下は遠近をして怛然として圖を失はしめん。臣伏して思ふ、大宋、基を開くこと造次に、根條未だ繁からず。宜しく廣く藩戚を樹て、敦睦するに道を以てすべし。人誰か過無からん。能く自ら新にするを貴ぶ。武皇の愛子・陛下の懿弟を以て、豈に其の一眚を以て長く淪棄を致す可けんや」と。書奏す。約之を以て梁州府の參軍と爲し、尋いで之を殺す。

夏四月甲辰、魏主、東して大寧に巡す。

秦王熾磐、鎮南將軍吉毗等を遣はし、步騎一萬を帥る、南のかた白苟・車孚・崔提・旁爲の四國を伐ち、皆、之を降す。

徐羨之等、南兖州の刺史檀道濟が先朝の舊將にして、威、殿省を服し、且つ兵衆有るを以て、乃

- 【一】吉陽縣は廬陵郡に屬す。今の江西省廬陵道吉水縣。
- 【二】臣道を犯すの事あり、以て驕恣の罪を致すべきを言ふなり。
- 【三】剝辱。爵を褫き庶人と爲すを謂ふ。
- 【四】怛然。おそるる貌。
- 【五】一眚。ひとつのあやまち。
- 【六】白苟・車孚・崔提・旁爲は、皆、羌の據れる地にて青海にあり。
- 【七】南兖州。中原亂れ、北州の流民多く南に渡る。晉の成帝、南兖州を立て、京口に寄治せしむ。文帝始めて江淮の間を割きて境と爲し、廣陵に治す。



ち道濟及び江州の刺史王弘を召して入朝せしむ。五月皆、建康に至る。(義之)廢立の謀を以て之に告ぐ。甲申、謝晦、領軍府の屋敗れたりといふを以て、悉く家人をして外に出でしめ、將士を府内に聚め、又、中書舍人邢安泰、藩盛をして内應を爲さしめ、夜、檀道濟を邀へて同じく宿す。晦は、(二)悚動して、眠るを得ず。道濟は寢に就き便ち熟す。晦、(一)此を以て之に服す。

時に帝、(三)華林園に於て列肆を爲し、親自ら沽賣す。又、左右と與に船を引きて樂と爲す。夕に天淵池に遊び、龍舟に即きて寢ぬ。乙酉詰旦、道濟、兵を引きて前に居り、羨之等、其の後に繼ぎ、雲龍門より入る。安泰等、先づ宿衛を誡め、禦ぐ者有る莫からしむ。帝未だ興きず。軍士進みて二侍者を殺し、帝の指を傷つく。扶けて東閣を出で、璽綬を收む。羣臣拜辭し、故の太子の宮に衛送す。侍中程道惠、羨之等に勸め、皇弟南豫州の刺史義恭を立てしめんとす。羨之等、宜都王義隆が素より令望有り、又符瑞多きを以て、乃ち皇太后の令と稱して、帝の過惡を數め、廢して營陽王と爲し、宜都王を以て、大統を纂承せしめ、死罪以下を赦す。又、皇太后の令と稱して、璽綬を奉還せしめ、并に皇后を廢して營陽王妃と爲し、營陽王を吳に遷し、檀道濟をして入りて朝堂を守らしむ。王、吳に至り、金昌亭に止まる。六月癸丑、羨之等、邢安泰をして就きて之を弑せしむ。王、多力にして、突走して、(三)昌門

- 【一】 悚動。おそれ、をののく。
- 【二】 其の大事を處するに其の常度を變ぜざるに服する也。
- 【三】 華林園天淵池。魏氏、華林園・天淵池を洛中に作る。晉氏南渡の後、其の制に倣ひ、これを建康に作る。華林園は宮城の北隅に在り。
- 【四】 金昌亭は、昌門の中に在り。昌門は吳の西郭の門なり。

を出づ。追ふ者、門關を以て踏して之を弑す。  
裴子野、論じて曰はく、古は人君、子を養ふに、能く言へば、師、之が辭を授け、能く行けば、傳、之が禮を相く。宋の教誨は、雅より斯に異なり。中に居るときは則ち僕妾に任じ、外に處るときは則ち、(三)趨走を近づく。太子、皇子、帥有り侍有れども、是の二職の者は、皆、(三)臺阜なり。其の行止を制し、其の法則を授け、臧否を導達すること、之に由らざる罔し。言、禮義に及ばず、識、今古に達せず。謹敕なる者は、能く之に勸むるに吝嗇を以てし、狂愚なる者は、或は之を誘ふに凶慝を以てす。師傳有りと雖も、多く(四)耆艾の大夫を以て之と爲し、友及び文學有りと雖も、多く(五)膏粱の年少を以て之と爲し、位に具はるのみ。亦、與に遊ばず。幼王、州に臨むや、長史、事を行ひ、教命を宣傳し、又、(六)典籤有り、往往專恣にして、威權を竊弄す。是を以て、本根、茂ると雖も、而も端良甚だ寡く、嗣君冲幼にして、世、姦回を繼ぐ。惡物醜類は天然に自ら出づと雖も、然も習ふときは則ち常を生ず。其の流や遠し。降りて太宗に及びて、天下を擧げて之を棄つ、亦、昵比の爲なり。嗚呼、國を有ち家を有つもの、其れ之を鑑みよ。

- 【一】 趨走。役を執る者。
- 【二】 臺阜。微賤なる者をいふ。
- 【三】 左傳に、申無字曰はく、士の臣は早、僕の臣は臺と。
- 【四】 耆艾の大夫。六十を者とす。
- 【五】 膏粱の年少。美食せる子弟の義。艱難を知らず、世情に疎きものをいふ。
- 【六】 典籤。官名。



傳亮、行臺の百官を帥る、法駕を奉じ、宜都王を江陵に迎ふ。祠部尙書蔡廓、尋陽に至り、疾に遇ひ、前むに堪へず。亮、之と別る。廓曰はく、「營陽、吳に在り。宜しく厚く供奉を加ふべし。一旦不幸あらば、卿諸人、主を弑するの有名らん。世に立たんと欲すとも、將た得可けんや」と。時に亮、已に羨之と與に、營陽王を害せんことを議す、乃ち信を馳せて之を止む。及ばず。羨之大に怒りて曰はく、「人と共に計議し、如何ぞ旋背する。即ち惡を人に賣るか」と。羨之等、又、使者を遣はし、前の廬陵王義真を新安に殺す。羨之以へらく、荊州の地は重しと。宜都王至らば或は別に人を用ひんことを恐れ、乃ち亟かに録命を以て、領軍將軍謝晦を除して、都督荆湘等七州諸軍事、荊州の刺史を行はしめ、外に居りて援を爲さしめんと欲し、精兵舊將、悉く以て之に配す。秋七月、行臺、江陵に至り、行門を城南に立て、題して大司馬門と曰ふ。傳亮、百僚を帥るて門に詣り、上表して璽紱を進む。儀物甚だ盛なり。宜都王、時に年十八、教を下して曰はく、「猥に不徳を以て、謬りて大命を降さる。己を顧みて兢悸す、何ぞ以て克く堪へん。輒ち當に暫く朝廷に歸り、哀を陵寢に展べ、并に賢彦と與に、申ねて懷ふ所を寫すべし。望むらくは其の心を體せよ。辭費を爲す勿かれ」と。府州の佐史、竝に臣と稱し、勝を諸門に題すること一

- 【一七】 晉氏、江を渡りて、始めて祠部尙書の官あり、常に右僕射を以てこれを攝す。若し右僕射闕くるときは、祠部尙書、右事を攝す。
- 【一八】 營陽。營陽王をいふ。
- 【一九】 旋背。轉背と言ふがことなり。
- 【二〇】 録命。録尙書自ら命を出すなり。
- 【二一】 州府國。州は荊州。府は都督府。國は宜都國。
- 【二二】 網紀。その當局の者。上

に宮省に依らんと請ふ。王、皆、許さず。州府國の網紀に教へて、統ぶる所の内の見刑を宥し、連責を原さしむ。諸將佐、營陽・廬陵王死せりと聞き、皆、以て疑と爲し、王に勸む、「東下す可からず」と。司馬王華曰はく、「先帝、天下に大功有り、四海の服する所なり。嗣主不綱なりと雖も、人望未だ改まらず。徐羨之は中才の寒士、傳亮は布衣の諸生、晉の宣帝、王大將軍の心有るに非ざること明かなり。寄を受くること崇重なり。未だ遽に敢て徳に背く容からず。廬陵は嚴斷にして將來必ず自ら容れざらんことを畏れ、殿下の寬叡慈仁なるは遠近の知る所なるを以て、且に次を越えて奉迎せんとし、以て徳とせられんことを冀ふ。悠悠の論、殆ど必ず然らじ。又、羨之等五人、功を同じうし位を竝ぶ、孰か肯て相讓らん。就ひ不軌を懷くとも、勢必ず行はれじ。廢主若し存せば、其の將來禍を受けんことを慮り、此の殺害を致ししならん。蓋し、生を食ること過深なるに由る。寧ぞ敢て一朝にして、頓に逆志を懷かん。權を握りて自ら固め、少主を以て仰待せんと欲するに過ぎざるのみ。殿下、但だ當に六轡を長驅し以て天人の心に副ふべし」と。王曰はく、「卿復た、宋昌と爲らんと欲するか」と。長史王曇首、南蠻校尉到彦之、皆、王に、行かんことを勸む。曇首、仍て天人の符應を陳ぶ。王乃ち曰はく、「諸公、遺を受く。義に背く容からず。且つ、勞臣舊

- 佐據屬なり。
- 【二三】 王大將軍。王敦なり。
- 【二四】 定策を以て徳と爲さんことを冀ふなり。
- 【二五】 五人。徐羨之・傳亮・謝晦・檀道濟・王弘を謂ふ。
- 【二六】 六轡。天子の車には六頭の馬を駕す。
- 【二七】 宋昌の事、十三卷漢の高后八年に見ゆ。
- 【二八】 勞臣。功勞ある臣。

宋太祖文皇帝元嘉元年



將、内外充滿す。今、兵力は、又、以て物を制するに足る。夫れ何の疑ふ所かあらん」と。乃ち王華に命じて、後任を總べ、留まりて荊州に鎮せしむ。王、到彦之をして兵を將ゐて前驅せしめんと欲す。彦之曰はく、「彼が反せざるを了せば、便ち應に朝服して流に順ふべし。若し虞有らしめば、此の師既に恃むに足らず、更に嫌隙の端を開かん。遠邇の望に副ふ所以に非ざるなり」と。會、雍州の刺史褚叔度卒す。乃ち彦之を遣はし、權に襄陽に鎮せしむ。甲戌、王、江陵を發し、傅亮を引見し、號泣して左右を哀動す。既にして義眞及び少帝薨廢の本末を問ふ。悲哭嗚咽し、側侍する者、能く仰ぎ視るもの莫し。亮、流汗、背を沾し、對ふる能はず。乃ち腹心を到彦之・王華等に布き、深く自ら結納す。王、府州の文武を以て、兵を嚴して自ら衛る。臺の遣はす所の百官衆力、部伍に近づくを得ず。中兵參軍朱容子、刀を抱き、王の乗る所の舟の戶外に處り、帶を解かざる者累旬なり。

魏主、宮に還る。

秦王熾磐、太子暮末を遣はし、征北將軍木奔干等步騎三萬を帥ゐて、貂渠谷に出で、河西の白草嶺・臨松郡を攻め、皆、之を破り、民二萬餘口を徙して還る。

八月丙申、宜都王、建康に至る。羣臣、迎へて新亭に拜す。徐羨之、傅亮に問うて曰はく、「王は

【元】了。了知する也。  
 【四〇】非常を防ぐなり。  
 【四一】白草嶺。今の甘肅省西寧道大通縣にあり。  
 【四二】臨松郡。今の甘肅省甘涼道張掖縣の地。

誰にか方ぶ可き」と。亮曰はく、「晉の文景以上の人なり」と。羨之曰はく、「必ず能く我が赤心を明かにせん」と。亮曰はく、「然らず」と。丁酉、王、初寧陵に謁し、還りて中堂に止まる。百官、璽綬を奉る。王、辭讓すること數四にして、乃ち之を受け、皇帝の位に中堂に即く。法駕を備へて宮に入り、太極前殿に御す。大赦し、改元す。文武、位二等を賜ふ。戊戌、太廟に謁す。詔して、廬陵王の先封を復し、其の柩及び孫脩華、謝妃を迎へて建康に還らしむ。庚子、行荊州刺史謝晦を以て眞と爲す。晦將に行かんとし、蔡廓と別る。人を屏けて問うて曰はく、「吾は其れ免れんか」と。廓曰はく、「卿、先帝の顧命を受け、任ずるに社稷を以てし、昏を廢し明を立つ。義、不可無し。但だ人の二兄を殺し、而して之を以て北面し、主を震ふの威を挾み、上流の重きに據る。古を以て今を推せば、自ら免れんこと難しと爲す」と。晦、始め、去るを得ざらんことを懼る。既に發し、石頭城を願望し、喜びて曰はく、「今、脱るるを得たり」と。癸卯、徐羨之は位を司徒に進め、王弘は位を司空に進め、傅亮は開府儀同三司を加へ、謝晦は號を衛將軍に進め、檀道濟は號を征北將軍に進む。有司奏すらく、「車駕、故事に依り、華林園に臨みて詔を聽け」と。詔して曰はく、「政刑は未だ悉さざる所多し。先者の如く、二公推諫す可し」と。帝、

【四三】然らず。亮は固より其の免るるを得ざるを知りしなり。  
 【四四】改元。元嘉と改元せるなり。  
 【四五】孫脩華。義眞の母。  
 【四六】謝妃。義眞の妃。  
 【四七】謝晦は撫軍將軍より號を進め、檀道濟は鎮北將軍より號を進む。  
 【四八】二公。徐羨之・王弘を謂ふ。